筑波大学博士（文学）学位請求論文

ウジェーヌ・ミンコフスキー研究

―分裂性と同調性

佐藤　愛

２０１５年度

目次

序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第一部　　方法と実践―『生きられる時間』読解

第一章　　生きられる現在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第一節　　方法の出発点

（１）記述と対立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９

（２）一つの全体としての生成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

（３）ベルクソンにおける生成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

（４）ツィーエンへの批判・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

（５）万華鏡的な時間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

第二節　　停止する場所

（１）空間の取り上げ直し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

（２）過去から現在への移行・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

（３）現在から接触へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０

第二章　　四つの原理における分裂と同調・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６

第一節　　第一の原理―展開の原理

（１）点の並列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７

（２）現在と今の相違・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９

第二節　　第二の原理―自我を超えた結合、すなわち超人格的結合の原理

（１）人格的躍動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１

（２）行為による開花・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４２

第三節　　第三の原理―浸透あるいは分有の原理・・・・・・・・・・・・・・４５

第四節　第四の原理―箱入れの原理

（１）同心円・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８

（２）生の広がり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０

第五節　分裂性と同調性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５３

第二部　精神病理学

第一章　「精神分裂病」論における自閉概念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５８

第一節　ブロイラーの自閉概念

（１）基本症状としての自閉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５９

（２）早発性痴呆における自閉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６２

（３）自閉と全体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５

第二節　自閉的活動性

（１）自閉における夢や夢想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６９

（２）行為における自閉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７１

（３）行為における境界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７４

第三節　現実との生きられる接触の喪失と回復

（１）制御の喪失・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７７

（２）全体の変容の表現・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７９

（３）自己自身との一致・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８２

第二章　現代の精神医学と接触の精神医学の交叉・・・・・・・・・・・・・・・・８５

第一節　気質論における連続的な視点

（１）気質論における同調性と分裂性・・・・・・・・・・・・・・・・８６

（２）性格の分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８８

第二節　モレルとブロイラーの差異

（１）モレルにおける変化と同一性・・・・・・・・・・・・・・・・・９０

（２）ブロイラーと誤謬・・・　・・・・・・・・・・・・・・・・・　９２
（３）われわれに固有の感情の領域・・・・・・・・・・・・・・・・　９５
第三節　『ロールシャッハ』における生きられるものの型
（１）「展望」の章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９７
（２）反応性、内的共鳴と固有の方法・・・・・・・・・・・・・・・　９９
（３）狭められた「接触」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０２
（４）色彩と像の連結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１０３
（５）沈殿と変容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０４

第三部　コスモロジー
第一章　諸経験間の移行の問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０７
第一節　明るい空間と暗い空間
（１）明るい空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０７
（２）暗い空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０９
（３）二つの空間の重なり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１１
第二節　眺望の可逆
（１）明るい空間の名残・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１４
（２）幻覚―三十八歳の画家・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１７
（３）進行麻痺―医師Ｌ・Ｍ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１２２
（４）昼の世界と夜の世界の往来・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３０
（５）目でものを見るのか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３２
（６）視覚による経験の合一・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３５
第三節　明るさ、透明性、闇
（１）ランプに灯をともす・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１３７
（２）透明な世界と形の世界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１４１

（３）理念の透明性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４２
（４）暗い塊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４４
（５）記憶の闇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４５
（６）生きられる三幅対・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４８
第二章　「精神の哲学」としてのコスモロジー・・・・・・・・・・・・・・・・・１５０
第一節　同じもの
（１）精神の哲学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５１
（２）人間的な接触・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５３
（３）隠喩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５５
（４）触覚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５７
第二節　ゴッホと領野
（１）蛇行と旋回・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６０
（２）「より遠くに行く」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６３
（３）修道院、精神病院、畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６５
第三節　反響
（１）一つの音・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６６
（２）形態・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６８

結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７２
文献表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７５

序論

1. 目的と研究方法

本論文は、フランスの精神病理学者であり哲学者であるウジェーヌ・ミンコフスキー（Eugène Minkowski 1885-1972）の思想を研究対象として取り上げる。ミンコフスキーは、「精神分裂病（現・統合失調症）」の治癒可能性について、人間と世界が織り成す構造の分析から示そうとした。われわれはこうしたミンコフスキーの思想を、本論文を通して、「分裂性（schizoïdie）」と「同調性（syntonie）」の二大原理から検討することを目指す。

ミンコフスキーは、ルートヴィヒ・ビンスワンガー（Ludwig Binswanger 1881-1966）らとともに、20 世紀前半に起こった「人間学的精神病理学（anthropologique psychopathologie）」に寄与した第一人者に数えられ、また、ベルクソン哲学やフッサール現象学を、いち早くフランスで精神医学に取り入れたことでも知られている。ミンコフスキーは、1927 年に『精神分裂病』において、「精神分裂病」の患者が「現実との生きられる接触の喪失」状態にあると述べ、人間と世界との関係性の「喪失」から「精神分裂病」を規定しようとした。1933 年には『生きられる時間』を出版し、計測可能な時間に対する質的な時間としての「生きられる時間」という観点から、精神の病理において患者が経験している時間構造の変容を主張した。また、計測可能な空間に対する質的な空間としての「生きられる空間」について論じ、患者においては空間構造もまた時間構造と同様に変容するとした。1936 年には『コスモロジーに向けて』を刊行し、精神病理学的な視点のみならず、日常の生活において経験される、人間と世界の構造について考察した。本論文は、主にこれらの三つの著作を対象として取り上げる。

ミンコフスキーの著作の分析において最も大きな課題となるのは、「精神分裂病」が治癒可能であるとする彼の主張を、どう解釈するかという点である。この主張は、『精神分裂病』の第五章「精神分裂病概念の治療的な射程」において、明確に述べられている。「〔精神分裂病の基本障害である〕現実との生きられる接触の喪失という概念は、この接触の全て、ある

いは少なくともその一部分の回復の可能性を含む概念である。」（S 269）われわれが注目するのは、「概念（notion）」についての、ミンコフスキーの次のような見解である。「精神医学においては、治癒可能性という概念（*la notion de curabilité*）は、それ自体、治癒的価値（*une valeur curative*）を持つ。」（S 270）果たして、「治癒可能性という概念」が、「精神分裂病」の治療において「価値を持つ」とは、何を意味するのだろうか。ここでミンコフスキーが主張したのは、われわれにとってある一つの概念を抱くことが、治療の役に立つこともあるという曖昧な事態ではない。そうではなく、ミンコフスキーが提示しようとしたのは、ある価値の体系と、別の体系が交叉することによって、互いの共通の基盤を見出してしまうような接触だったのではないだろうか。われわれは本論文において、ミンコフスキーの思想における、「精神病理学、人間の心理的、また精神的活動が関連する諸現象」の領域と「偉大な諸真理」（S 267）の領域の交叉、すなわち「身体と精神の平面（le plan somato-psychique）」と「人間とコスモスの平面（le plan anthropo-cosmique）」（EcC 139）の接触を見定め、帰結として、支えとして後者の領域が見出されることを明らかにする。

ミンコフスキーの著作の分析の上で、われわれは以下の二点に留意する。第一に、ミンコフスキーが、人間と世界の「根底の連帯（solidalité foncière）」（EcC 141）の構造であるとしたところの「コスモロジー」は、彼独自のものではなく、フランス・スピリチュアリスムを含む「いつの時代にも存在してきた」（VC 3）形而上学に由来するものとみなしていた点である。ミンコフスキーは、この「精神の哲学」を基礎とし、その上に医学を含む人間に関わる諸科学全体としての「人間学（anthropologie）」を位置付ける。ここで重要なのは、ミンコフスキーが諸科学から人間や世界について探求することを批判しようとしたのでは決してないという点である。むしろミンコフスキーは、精神病理学が属する「身体と精神の平面」が、形而上学としての「人間とコスモスの平面」に「開かれている（accessible）」と考えた（EcC 139-140）。

第二に、ミンコフスキーが「コスモロジー」の内容として、「コスモス（cosmos）」が同調することを基礎としながら分裂するとみなした点である。「分裂性」と「同調性」という二

つの性質を、ミンコフスキーは「生命の二大基礎原理」とし、精神の病においても、また日常の生活においても、繰り返し現れるとした。序論の後ろで見るように、ミンコフスキーとブロイラーは確かに、躁うつ病になりやすい傾向として「同調性」を、また、「精神分裂病」になりやすい傾向として「分裂性」を提示したのだが、ミンコフスキーは、これら二つのものが対であり、「精神分裂病」の患者の内部でも、また、病理以外のいかなる場合においても並存し、かつ、「同調性」が支えとして見出されると主張する。分裂性と同調性のこうした関係についてミンコフスキーは、その二元論的な「図式化傾向（schématisme）」（S 272）の外観には還元仕切れない「重要な因子（facteur important）」（S 272）があると主張したのである。

ここで、「分裂性」と「同調性」という概念について確認しておきたい。これらは、ミンコフスキーの師であるオイゲン・ブロイラー（Eugen Bleuler 1857-1939）によって提唱された。ブロイラーは 1908 年の 4 月、ベルリンで行われたドイツ精神医学会における講義で初めて「精神分裂病」という病の名称を提示したのだが[1]、さらに 14 年後の 1922 年、この病になりやすい傾向として、「分裂気質（Schizoidie）」を、この対となる躁うつ病になりやすい傾向として「同調気質（Syntonie）」を提示する[2]。ミンコフスキーはこれらの「生命の二大基礎原理」と呼ばれる傾向を引き継ぎながら、1927 年に『精神分裂病』を刊行し、ブロイラーと意見を異にしていることを明示しながらも（S 274）、「精神分裂病」の治癒可能性を主張した。

2. 先行研究からの本論の位置付け

ミンコフスキーの哲学に関する重要な先行研究としては、まず、1970 年に『生きられる時間』[3]を英訳して刊行した、ナンシー・メッツェル（Nancy Metzel）による『生きられる空

[1] Paolo Fusar-Poli et Pierluigi Politi, « Images in Psychiatry : Paul Eugen Bleuler and the Birth of Schizophrenia (1908) », in *The American Journal of Psychiatry*, 165, 11, Nov 2008, p. 1407.
[2] Eugen Bleuler, « Die Probleme der Schizoidie und der Syntonie », in *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 78, 1922.
[3] *Lived Time : Phenomenological and Psychopathological Studies*, transl. by Nancy Metzel, Evanston, Northwestern University Press, 1970.

間－ウジェーヌ・ミンコフスキーの生きられる時間への批判的序論』（1973 年）があげられる[4]。メッツェルは、ミンコフスキーの空間論がベルクソンの哲学から現象学への接合点に位置すること、また、ミンコフスキーにおける「空間」概念が「共通世界」であり、特異的で反復不可能な出来事とともにある時間の流れから、同質性や持続可能性、類似性、普遍性といった概念をともなう空間への移行を取り持っていることを主張する。本論は、先行研究のこうした観点を受け継ぎながらも、ミンコフスキーが「空間」概念のなかに、分離と接触の両面を見ていたことを強調する。すなわちわれわれは、ミンコフスキーが「時間」においても「空間」においても、「分裂性」と「同調性」の両方を見定めていたと考える。

また、こうしたミンコフスキーの「空間」概念の分離と接触の両義性については、1930 年代に活躍した思想家たちと、ミンコフスキーとの交流についての先行研究からも裏付けられると考える。ロイ（Christian Roy）は 2007 年に、「1930 年代の非順応主義者たち（les non-conformistes des années 30）」という思想グループの一員として活躍したアルノー・ダンデュー（Arnaud Dandieu 1897-1933）とミンコフスキーとの交流を、当時の雑誌記事を取り上げながら論じている[5]。われわれはここで、この先行研究で取り上げられたダンデューの「空間」概念について確認しておきたい。ダンデューは、バタイユ主催の雑誌『ドキュマン』にも参加していたのだが、ダンデューが担当した『ドキュマン』（1930 年）の「空間」の項に引用されたのが、ウジェーヌ・ミンコフスキーの空間論である。ダンデューは「空間」の項のなかで、エミール・メイエルソン（Emile Meyerson 1859-1933）の思想とミンコフスキーの空間論を接近させながら、次のように述べている[6]。

---

[4] Nancy L. Metzel, *Lived space : A critical introduction to Eugène Minkowski's Lived time*, Thesis (Ph. D.) Northwestern University, 1973.

[5] Christian Roy, « Arnaud Dandieu and the Epistemology of Documents », *Papers of Surrealism*, Issue 7, 2007, p. 1-23. また、「1930 年代の非順応主義者たち」についての研究は、以下を参照した。（Jean-Louis Loubet des Bayle, *Les non-conformistes des anées 30 : une tentative de renouvellement de la pensée politique française*, Paris, Seuil, 1969, Conclusion de l'édition de 2001.）「1930 年代の非順応主義者たち」による右派と左派の両方に属さないという主張は、中心人物であったアレクサンドル・マルク（Alexsandre Marc）によるものである（*Ibid*., p.122.）。

[6] エミール・メイエルソンについては、フレデリック・フルトー・ドゥ・ラクロによって、そのエピステモロジー全体を見渡す研究が 2009 年に刊行された。ここでフルトー・ドゥ・ラクロは、メイエルソンの諸理論に対し、ミンコフスキーの「精神分裂病」研究の影響があったという見解を示している。（Frédéric Fruteau De Laclos, *L'épistémologie d'Emile Meyerson : une anthropologie de la connaissance*,

われわれはミンコフスキー博士の観察に依拠しながら、またメイエルソンの理論に接近しながら、純粋に非合理的でしかないこの空間が、自然との個別的な接触（contact indivisuel）でしかないことに気づく。（中略）同調的（*syntonique*）であると同時に因果的（*causal*）であるような、この具体的な空間は、純粋に情動的な歓びと、科学に固有な仮説の基礎となる役目を果たす[7]。

ダンデューは、メイエルソンとミンコフスキーの空間論を合わせて、「空間」について、次のように特徴づけている。1. 非合理的である。2. 個別的な接触である。3. 同調的である。4. 因果的である。5. 具体的である。6. 情動的な歓びと、科学に固有な仮説の基礎となることなどである。ダンデューがここで記述しているのは、「流れ」のように非合理的なものと、諸科学の基礎となる反復可能な因果律の共存である。われわれは本論文において、こうした先行研究の結果を受けながら、ミンコフスキーがこうした二つの性質について、後者の不動性をただ批判したのではなく、むしろこれらを交錯させながら、分裂したものたちの内奥の同調である「反響や響きの現象（phénomène de l'écho ou du retentissement）」（EcC 139）として、世界の構造を記述しようとしたことを示したい。

3. 構成

最後に、各章の構成に移りたい。本論文は、第一部「方法と実践―『生きられる時間』読解」、第二部「精神病理学」、第三部「「精神の哲学」としてのコスモロジー」の三部構成を取る。

第一部第一章は、「生きられる現在」である。ミンコフスキーは、『生きられる時間』（1933年）の序論のなかで、1910年代から『生きられる時間』の準備を開始したことを述べてい

Paris, Vrin, 2009, p. 102. ）

[7] Bataille G., Dandieu A., Leiris M., « Dictionnaire », *Documents*, deuxième année, 1930, n° 1, p. 44.

る。またこの一方で、同じ時期にはスイスでブロイラーに接触している。したがってわれわれは、『生きられる時間』における「時間」と「空間」についての思弁的な考察が、ミンコフスキーの「精神分裂病」についての研究と並行して練り上げられていたとみなし、まず彼の「時間」と「空間」の概念について検討する。ここで明らかになるのは、ミンコフスキーが「時間」においても、「空間」においても、分離的性質と結合的性質の両面を提示している点であり、また、この二元性を結びつける絶対的な中心として、「生きられる現在」を見出した点である。

第二章は、「四つの原理における分裂と同調」である。ここでは、『生きられる時間』の第一章から第四章までに提示される四つの原理を順番に分析することを通して、分裂した諸点が、その中心性を「休息」させながら世界を分有するまでの過程を示す。また、ミンコフスキーのこれらの原理が、単なる思弁ではなく、ブロイラーの臨床から着想を得たものであることを『精神分裂病』の記述から確認する。

第二部第一章は、「「精神分裂病」論における自閉概念」である。ミンコフスキーは、分裂性と同調性の錯綜する様態について、「理性」による診断と合わせ、医師の「全人格」から「洞察（pénétration）」することこそが、医師の仕事であると考えた。そして、後者を「直観（intuition）」とも呼び、これこそが「精神分裂病」において、「いまだに切れてはいない弦（cordes）を発見し、不協和の弦を調律し、切れた弦をさえ継ごうとするだろう」（S 281）と考えた。本章では、ミンコフスキーが、どのような様態を「分裂」と考えたのかについて、ブロイラーが記述した「自閉」概念に注目し、これについて検討しながら明らかにする。

第二章は、「現代の精神医学と接触の精神医学の交叉」である。ここでは、「分裂性」の内奥で働く「同調性」について確認する。われわれは、「現代の精神医学」と呼ばれる原因と結果の因果律を見定めようとする医学が、人間と世界の接触を見る医学と交叉する場を、ミンコフスキーの『精神分裂病』と、ミンコフスカの『ロールシャッハ』の分析を通して確認する。

第三部第一章は、「諸経験間の移行の問題」である。ここでは、「精神分裂病」における回復の問題について、メルロ＝ポンティによる、ミンコフスキーの「明るい空間と暗い空間」について分析から裏付けることを目指す。メルロ＝ポンティとミンコフスキーによる「明るい空間と暗い空間」や幻覚の問題と、ミンコフスキーによる「進行麻痺」患者との会話を取り上げ分析することによって、経験の移行や「回復」を可能にする、人間と世界が結ぶ内的紐帯があることを明らかにする。

第二章は「「精神の哲学」としてのコスモロジー」である。ミンコフスキーが自身の思想の基盤として立脚したのが、世界と人間の「根底の連帯（solidalité foncière）」という考え方であった。ミンコフスキーにとって「世界（univers）」とは、あらゆるものが内包する「小宇宙（micro cosmos）」から構成される。ミンコフスカがロールシャッハ・テストの方法論によって研究したゴッホの描く線は、人間による小宇宙の内包を、「領野」とそこに立つ人間から捉える。われわれは、『コスモロジーに向けて』と『ファン・ゴッホ』の分析を通して、分裂した個体たちが、それぞれの内的紐帯としての小宇宙によって、一つのものを分有することを示す。

第一章　　生きられる現在

ミンコフスキーは『生きられる時間』の序文の冒頭において、時間と空間の問題が「心理学、哲学、さらに言うなれば、現代文化全体の中心問題」（TV 1）であったと述べる。しかしながらこのような問題設定は著作の出発点としてあまりに広く、『生きられる時間』においてミンコフスキーが何を問おうとしていたのかを、むしろ曖昧にするものであった。では、「時間と空間の問題」を問うことによってミンコフスキーは、何を問おうとしていたのだろうか。ミンコフスキーは、「精神分裂病」において失われるものについて、「生きられる接触」や「調性（tonalité）」（N 729）といった語を提示するのであるが、これらの臨床上の概念は、「時間と空間の問題」を問うことと並行して練り上げられていったのであり、また、こうした抽象的な問題を問うことを通してこそ、「調性」の回復の仕方を検討して来たと考えられる。したがって本章においてわれわれは、このような観点から、ミンコフスキーが「時間と空間の問題」を通して提示した概念を、『生きられる時間』が構想された順番に沿いながら整理することを目指す。これによってミンコフスキーの「時間と空間の問題」が、「生きられる現在」という概念において結実を示すこと、またこの結実によって、「調性」の場としての「生きられる現在」という絶対的な点を定めることが、ミンコフスキーにおいて重要であったことを確認する。

『生きられる時間』の序文でミンコフスキーは、第一編の素描を行った順序について、次のように示している。まず 1914 年の 7 月に、「質的時間の本質的諸要素」という、「ベルクソンの著作」（TV 4）からの影響に基づく時間論を一度成し終えたとする。これは後に、『生きられる時間』の第一章「生成と質的時間の本質的諸要素」に当てられたと考えられる。次いで、1915 年に「生命の躍動の基本的な諸性格」と「記憶と忘却」、1916 年から 1917 年にかけて「死の現象学」、1918 年の終戦以降に「われわれは未来を（われわれがそれについて

知っていることをではなくて)」生きるか」（TV 5）と題した論考を素描する。これらはそれぞれ、第二章「人格的躍動の本質的特徴」、第六章「過去」、第五章「死」、第四章「未来」の基礎となる。第三章「現実との生きられる接触」だけが第一編のなかで下書きの時期が示されていないが、この内容は、1920 年代以降に発表された「精神分裂病」論と重なる部分が多いため、構想としてはこのなかで最も遅くに練られたと考えられる。それぞれの年代において『生きられる時間』の本文は素描されたに過ぎず、ミンコフスキー自身が述べるように、構想から刊行までの 20 年の間には、「断片群」（des tronçons）（TV 7）を「一つに総合」（TV 7）にするための作業が必要とされた。しかしながら、構想の順に沿ってミンコフスキーが「時間と空間」に関して立てた問題を辿っていくと、『生きられる時間』は、「生きられる現在」を軸とした、一続きの時間-空間論となっていることが明らかになる。その上で、彼が実際の下書きの順番とは異なる仕方で『生きられる時間』の第一編を現行の順番で再構成したのはなぜかを問い直せば、「精神分裂病」論の治療論に関わる第三章の「接触」の問題を中心に据えようとしたからであると考えられる。

第一節　方法の出発点

（1）記述と対立

『生きられる時間』の序文においてミンコフスキーは、当時の「心理学、哲学、さらに言うなれば、現代文化全体の中心問題」（TV 1）として「時間と空間の問題」を示すとともに、この著作が「時間と空間の問題」をフッサール現象学とベルクソン哲学からの影響のもとに書かれたことを明言する。

> われわれの時代になってフッサール現象学とベルクソン哲学が生まれたのはこのようにしてである。前者は、それがどのような起源を持ち、一見どのような正当性を備えているように見えるものであれ、いかなる前提によっても探求を導かれたり制限されたりしないで、生命現象を研究しかつ記述することを目的とした。

後者は、驚くべき大胆さをもって、直観を知性に、生あるものを死せるものに、時間を空間に対立させた。この二つの流れが現代思想全体に深い影響を及ぼすのに暇はかからなかった。（TV 3）

ミンコフスキーはこのように、「時間と空間の問題」への関心のもと、「「道具なしに」みつめ、われわれが見ているものを語りたい」（TV 3）という要請から、二つの哲学が生まれたとする。フッサール現象学とは、ミンコフスキーにとって、無前提的記述を目指す学問であり、一方ベルクソン哲学とは、直観と知性、生あるものと死せるもの、時間と空間といった対立を明示するものであった。ミンコフスキーは、これら二つの方法を『生きられる時間』において複合させようと試みるのだが、この目論見は容易ではなかった[8]。『生きられる時間』においては、「時間と空間の問題」という問いの設定も、フッサールの現象学とベルクソンの哲学の導入の仕方についても、曖昧にしか言及されないのである。

では、他の著作から確認してみよう。1968 年に出版された『精神病理学概論』では、フッサールの文献として『論理学研究』の第二巻改定版（1913 年）と、『デカルト的省察』（1931 年）が文献表に示されている（T 869）。また 1948 年の論文「精神病理学における現象学と現存在分析」においては、『論理学研究』と『イデーン』を参照したことが明示されている（EcC 100-101）。ここで、『イデーン』についてはこれが「現象学的還元」を扱うものであるという記述があるのみであるが、『論理学研究』については、この著作のなかでミンコフスキーが触れたフッサールの思考について、次のように述べられる。

特に『論理学研究』において私が親しんだフッサールの思考とは、われわれのま

[8] ヴァルデンフェルスはミンコフスキーの哲学の方法の特徴と弱さについて、次のように指摘している。「ミンコフスキーの書き方は、一部は箴言的で要点を突くものであり、一部は瞑想的で循環的であり、一部は叙事詩的で大袈裟であって、このことが、どんな体系化も自発的に回避する、起伏に富み幾重もの裂け目のある著作を生じさせた。」（『フランスの現象学』佐藤真理人監訳、東京、法政大学出版局、2009 年、459 頁。）また、スピーゲルバーグは、ミンコフスキーの著作内にフッサールへの言及がほとんどなく、その「現象学」の語には、「技術的な意味が全くない」ことを批判している。（Herbert Spiegelberg, *Phenomenology in Psychology and Psychiatry : A Historical Introduction*, Evanston, Northwestern University Press, 1972, p. 236. ）

なざしと諸現象それ自身のあいだに介入しに来るところのあらゆる先入観、あらゆる概念、あらゆる構成を解除する必要の正当性である。そこにははっきりと、その本質によって、この秩序についての事実の全体を一挙に乗り越えるところの理論の諸原理を設立する（fonder）ことが問題となる際に、社会学主義におけるそれのように、孤立した諸主体（des sujets isolés）に結び付けられる諸事実としての心理主義の過剰に、どこまで気をつけるべきかが現れていた。（EcC 100）

ここにあるように、ミンコフスキーはフッサール現象学について、これが、様々な前提を解除しながら諸原理を設立しようとするものであると捉えていた。さらにミンコフスキーは、フッサール現象学が向かうのは、「孤立した諸主体（des sujets isolés）に結び付けられる諸事実としての心理主義の過剰」に注意を払うような道であり、言い換えれば、この方法を徹底した先に広がるのは、「孤立した諸主体」についての理論ではないと解釈した。このように、ミンコフスキーのフッサール現象学の理解は、まずこれが、われわれに現象が与えられる際に、前提なしにその与えられ方を記述し、構成を分析する方法であるという意味では、精神医学における「現象学」の受容から大きくはずれるものではない[9]。しかしながら同時にここでミンコフスキーは、フッサール現象学が「孤立した諸主体に結び付けられた諸事実」にはつながらないという着想も得ていた。したがって、ミンコフスキーがフッサール現象学の方法から見出したものには、後述する「結合」や「同調性」の領野が含まれていたと考えられる。

（２）一つの全体としての生成

次に、ミンコフスキーにおけるベルクソンの哲学の影響と、ここから引き出された時間の

[9] 例えば『幻覚の現象学への序論』において、ジョルジュ・シャルボノーは、精神医学における現象学の方法について、「現象学の観点においては、意識の作業によるあらゆる現実の構成を問題にする」としている。（Georges Charbonneau, « Introduction à la phénoménologie des hallucinations », *Introduction à la phénoménologie des hallucinations*, Paris, Le Cercle Herméneutique, 2001, p. 19.）

定義について確認したい。よく知られているように、ミンコフスキーの「時間」についての哲学的思索の源泉は、ベルクソン哲学にあった。ミンコフスキーは 1914 年の 7 月の第一次世界大戦における総動員の前には、「質的時間の本質的諸要素」（TV 4）に関する一つの研究を成し終えていたと述べている。ではミンコフスキーは「時間」について、まずはどのように定義したのだろうか。

ミンコフスキーは『生きられる時間』第一章第二節の冒頭において、「時間とは何か」と問い、次のように応えている。

> それは、ベルクソン流にいうならば、わたしが時間について瞑想するときも、わたしの周囲に、わたしのうちに、つまり至るところに、わたしが見るところの、この「流動する塊（マス）」、動く、神秘的で、壮麗で、力強い大海原（océan）である。それは生成である。（TV 16）

このようにミンコフスキーは、ベルクソンにならって、時間を空間化の視点を拒む純粋な流れ、すなわち「生成」としてまずは定義しようとしている。また次のように述べ、このような一つの大きな「流れ」についての思考が、古代ギリシャから連続するものであるとし、古代からの思想の延長上に、「流れ」としての時間についての思考を位置づけている。

> 古代から現代にいたるまで、途絶えることなく哲学史を貫く万物流転（パンタ・レイ）の思想の基底に生成の現象がある。しかしながらこの命題において、それらがどのようなものであれ、万物（パンタ）を孤立した単位の総和とみなすことは慎まなければならない。（中略）ここでいう万物（パンタ）とは、分解することを許さない一つの原初的な全体、流転（レイ）によって成り立ち、かつそれ以外のものによっても成り立たない、一つの「全体」（un « tout »）である。この観点に立てば、流れ（ロエ）が流転（レイ）すると言ったほうがおそらくより適切だろう。このように言うなら、生成が基本であり、生成にはそれか

ら区別されるどんな基体（substratum）もないということが、より際立つだろう。（TV 17）

こうしてミンコフスキーはベルクソンの生成概念を、ヘラクレイトスの「万物流転の思想」の延長上に置くのだが、ここで注意したいのは、ミンコフスキーが流れとしての「万物」をとらえる仕方である。ミンコフスキーはそもそも「万物」を孤立した単位の総和とみなすことを退け、これをどのような要素にも還元できない「一つの全体（un « tout »）」であるとしている。

時間は原初的な現象として、常にそこにあり、生きており、われわれのまったく身近に、すなわち、時間のなかに見分けることのできるすべての具体的な変化よりも限りなくわれわれに身近な現象として現れる。（TV 16-17）

ミンコフスキーはこのように、時間を生成であると定義することによって、時間が認識にとって接近不可能な現象であり、常にそこにあり、生きられており、限りなく身近な「一つの全体」であると定義するのである。かつ、この全体がわれわれの眼前にすでに「与えられている」という。

ここで問題にしたいのは、時間という現象に関し、われわれの思惟がまったく相対的で不十分である、ということでは決してない。われわれは何らかの積極的なものを目の前にしているのであり、かくしてわれわれは、生成の現象と推論的思惟の手続きとが、根本的に相容れないことを確認するのである。（中略）生成は認識（connaissance）にとって接近不可能である。というのは、生成が認識されるものの背後に留まるからではなく、それがいわば完全に与えられていて、その本性に関して、推論的思惟の領域に属するいかなる問題をも提起しないからであ

る。（TV 18）

原初的な現象としての生成は、このように、われわれの目の前に「完全に与えられて」おり、この生成に対して認識は接近不可能であるという。しかしながらここで注意しておきたいのは、ミンコフスキーが、次節において見るように、生成を捉えられないはずの推論的思惟や因果律に基づく思考と、生成を捉える直観や洞察に基づく方法を並立させようとする点である。この展開に入る前に、まずはベルクソンの生成概念と、これから遠いとミンコフスキーによってみなされたツィーエンの心理学の理論を確認しておこう。

（３）ベルクソンにおける生成

ミンコフスキーは『生きられる時間』の第一章第三節から、個々の現象と生成全体が連帯するという論を展開する。この第三節には、第一節と第二節において一度批判された「空間化された時間」の取り上げ直しと、フッサール現象学への「曲がり角（un tournant）」（TV 19）が含まれている。この転回の意義を検討する準備として、まずはベルクソンによる「生成」概念についての考察を確認したい。ベルクソンは、『創造的進化』（1907 年）において、「生成」について次のように述べている。

> われわれの知覚の工夫（artifice）、いわばわれわれの知性の工夫、いわばわれわれの言語の工夫は、これらの実に多様な諸生成（ces devenirs très variés）から、それ自身では何も言わず、われわれが考えることがまさしくめったにないところの生成一般（le devenir en général）の、未決定な生成の、不可分な抽象の、唯一の表象を引き出す。常に同じであり、さらに、曖昧であるいは意識されないこの観念に対し、われわれはこのとき、それぞれの固有な事例において、諸状態を表象し、あらゆる諸生成を互いに区別するのに役立つところの、一つあるいは複数の明解なイマージュを付け加える。われわれが変化の特殊性（la spécificité du

changement）に置き換えようとしたのは、まさしく、一般的で未決定な変化（le changement en général et indéterminé）と、特殊で決定されたある状態とのこの配合（composition）なのである。さまざまに色づいた限りない多様性は、いわば、われわれの目を通り過ぎる。（EC 303-304）

ここでベルクソンは、われわれが生成そのものを表現するために、これを別のものに置き換えてしまう過程を論じている。われわれの知覚、知性、言語は、それ自身では無言で、稀にしかわれわれに考えられないままに留まっているいるところの「生成」について、「生成一般」という「唯一の表象」を作り上げるのだが、ベルクソンによれば、このときわれわれは、「常に同じであり、さらに、曖昧であるいは意識されない」ような「生成一般」の観念に対して、「諸生成」を区分するのに役立つような中間のイマージュを付け加える。すなわちベルクソンにとって生成そのものは、われわれの知覚、知性、言語の工夫によっては表現し尽くせないものであり、これを見ようとしても、諸生成の多様な豊かさは、「われわれの目を通り過ぎてしまう」のである。

上に見たように、ミンコフスキーもまた、このようなベルクソンの「生成」に従い、認識によってはこれに接近不可能であるとし、知性による認識の働きと生成が相容れないことを明言した。そしてミンコフスキーは、ベルクソンから投げかけられたこの問いに対して、認識や推論的思惟と、直観や洞察の両方を進む道を選び、「生成一般」と「諸生成」が二者択一とならない「配合」の方法を検討していく。

（４）ツィーエンへの批判

次節においてミンコフスキーの二面的捉え方を検討するための準備として、ミンコフスキーによる空間化された時間についての批判を検討しておきたい。ミンコフスキーは時間の空間化を行う物理学とこれに基づく心理学に対し、『生きられる時間』第一章の第一節と第二節で、批判を述べている。

> 問題となるのは測定可能な時間、すなわちベルクソン流に言うならば空間と同一視された時間であることを見て取るのは何の困難もない。空間に対するように無造作に適用された「測定」、「距離」、「間隔」といった表現が、この十分な証拠である。（TV 11）

ミンコフスキーはここでまずは、時計で測定することが可能な時間を、狭いものであるとし、退ける。計測可能な時間は、「測定」、「距離」、「間隔」といった空間的比喩のもとにねじ曲げられたものであり、時間はこうした空間的な形容からはほど遠いものであるとみなすのである。「われわれは以上のような時間の様相を問題にしない。それは時間の現象の一般的な研究にとっては、あまりに狭い基礎であろう。」（TV 12）このように、ミンコフスキーが時間を論じるときにはまず、空間的比喩を適用することがはっきりと退けられているのであり、彼がベルクソンの「生成」と空間の間には、親和性が全くないと当初考えていたことが分かる。

例としてミンコフスキーは、近代物理学と結びついた「伝統的心理学」を取り上げ、これに反論しようとしているので、詳しく見てみよう。ミンコフスキーは、自身の時間についての論じ方が、「伝統的心理学とは意見を異にする」（TV 36）ことを明言し、次のように述べる。

> 伝統的心理学は、感覚、知覚そして表象を出発点にするから、時間に関する現象が問題になると、まず記憶のことを考える。そこで未来は、われわれの前に投影された過去のイマージュとしてしか考察されず、未来に入り込む第一の行為は予見だということになるだろう。この条件の下では、理想は一切を予見することだろう。（TV 36）

ミンコフスキーはこのように、「伝統的心理学」について、これが感覚、知覚、表象を出発点にしながら時間論を展開した点について批判している。ミンコフスキーによれば、「伝統的心理学」は、時間を過去からしか考えず、未来もまた、過去との関係性においてしか語ることができないという。

では、感覚、知覚、表象を出発点とする「伝統的心理学」とは、具体的にはどのようなものだったのだろうか。ここで、ある心理学者があげられている箇所を参照したい。ミンコフスキーは、次のように述べる。

> わたしがツィーエンの書物の一つにおける時間の記述によって与えられた印象は、次のようなものだった。「われわれは決して停止する場所（πού στῶ）を見出さないだろう。われわれはわれわれの表象と感覚によって運ばれる。われわれはそれらを停めることができないし、われわれを乗せて前方へ疾走する戦車から飛び降りて、観客としそれを眺めることもできない。われわれの表象に関する思惟の各々は、すでに新しい一つの表象である。瞬間Aをつかんだと思うや否や、われわれはすでに瞬間Bの餌食である」[10]この記述を読むとき、ひとはほとんど叫びをあげたい欲求を感じる。（TV 14）

ミンコフスキーはここでテオドール・ツィーエン（Theodor Ziehen 1862-1950）の名前をあげ、「停止する場所」のない時間論を批判するのだが、ミンコフスキーが取り上げたツィーエンによる時間論を把握するために、彼の『生理学的心理学への指針』（1891 年）を見てみよう。

ツィーエンはまず「感覚」について、次のように述べている。

---

[10] 引用内の括弧は、ミンコフスキーがかつて、自身の初期の論文「心身並行説の原理における接続についての研究」において、同様の内容をすでに述べたことを意味している。（Eugène Minkowski, “Betrachtungen im Anschluss an das Prinzip des psychophysischen Parallelismus,” *Archiv für die gesamte Psychologie*, t. XXXI, 1914.）

外的刺激 E（刺激物）は、これとともにわれわれが出発すべきものであるが、純粋に生理学的な要素である。感覚神経への刺激によって、この外的刺激は神経－刺激となる。この神経－刺激はもうひとつの生理学的過程であり、適切に物理的もしくは化学的ともみなされ得る。この刺激の生理学的過程は、求心的神経回路に沿って中枢に向けて伝えられる。そして、大脳皮質において S（感覚）から刺激を製造する。最初の精神的要素は、感覚であるが、これはこの大脳刺激に相当するのであり、したがって、生理学的心理学の主な役割は、感覚の理論を扱うことにある[11]。

ツィーエンはこのようにして、生理学的心理学の主要な役割が感覚の理論を扱うことであることを明言する。ここで言う感覚とは、彼の論理に従えば、われわれにおける「最初の精神的要素」であり、「大脳刺激」に相当する。ツィーエンは、生理学的心理学においては、われわれの感覚とは、あくまでも物理的もしくは化学的な「刺激」に還元されるものであるという立場を取る。すなわちツィーエンは、感覚を純粋に物理的なものに帰するが、同時に、これについての理論を論じることこそが、生理学的心理学の役割であるとする。

次に、ツィーエンが「表象」と呼ぶところのものについて確認しよう。

皮膚刺激は感覚 S に相当する。以前の皮膚刺激の残留は心的イメージもしくは観念と呼ばれる。これが I である。自然淘汰によって、この脳のメカニズムは、以前の刺激が最も複雑な方法によって利用され得るほどに発達してきた[12]。

このようにツィーエンは、時間的に以前の刺激の残留を、心的イメージもしくは観念と呼ぶ。これが、ミンコフスキーが表象と呼ぶところのものである。ツィーエンは「刺激」、すなわ

[11] Theodor Ziehen, translated by C. C. Van Liew and Otto Beyer, *Introduction to physiological psychology,* London, Sonnenschein, 1892, p. 21-22.
[12] *Ibid*., p. 23.

ちツィーエンが「感覚」と呼ぶものが、物理的に神経に残存することによって心的イメージ、すなわち観念がわれわれに引き起こされると考えるのであり、したがって、ミンコフスキーが上で「表象」と呼んだものもまた、「感覚」と同様に、純粋に物質に還元されるものである。

しかしながら、ミンコフスキーがツィーエンの「生理学的心理学」を批判するのは、このように「感覚」や「表象」が純粋に物理的・化学的なものとされたからではない。では、ミンコフスキーはツィーエンの心理学のどのような点に対し、異議を唱えたのだろうか。再び上のミンコフスキーの引用に戻ろう。

> 「それは全部間違っている。停止する場所は存在する。われわれは皆それを知っている。存在の各瞬間に、われわれは観客になることができる。われわれの使命はそこにあるくらいである。それはわれわれが生において果たすべき本質的な企ての一つである。」（TV 14）

ここでミンコフスキーは、ツィーエンによる感覚や表象の目まぐるしい時間論に抗おうとする。上で確認したように、ツィーエンは心的イメージや観念を時間的に前の刺激、すなわち感覚の残留物と捉えていた。したがって、ツィーエンに従えば、記憶の経過は前の刺激の残留から説明されることになり、時間は感覚の残留の堆積物でしかなくなり、時間の流れは、感覚とそれについての表象が生じては消えていくという各瞬間の繰り返しでしかなくなってしまう。こうしてわれわれは永久に新たな感覚、すなわち刺激を受容し続けることでしか時間を生きられなくなってしまうのである。そこでミンコフスキーは、このような時間論に対し、「われわれは、ツィーエンがそれを望むように、時間をもっぱらわれわれの意識の多様な要素の間断なき継起としてのみ生きるということがあり得ない」（TV 14-15）とし、われわれが、ツィーエンが言うところの感覚とそれについての表象の連鎖から時間を生きるのではなく、存在の各瞬間毎に「停止する場所」に立ってそれを静かに眺めることができると

主張する。すなわちミンコフスキーは、われわれの生を眺め、観想することを可能にする、絶対的な支点があるという立場に立つのであり、この場所に立つことでのみ、二つのものを結びつけるような捉え方が可能になると考えた。

（５）万華鏡的な時間

ミンコフスキーによれば、われわれは「停止する場所」を持っている。この場こそが、ツィーエンへの反駁の根拠であり、ミンコフスキーが時間論において立つ支えとなるものである。この「停止する場所」について、さらに詳しく検討しよう。『生きられる時間』において、ミンコフスキーは瞬間に関して、次のように述べている。

> 非常にしばしば、われわれは、瞬間ごとに、絶え間なく、常に、外界や内的生命の出来事に関する新しいイマージュを眼前に形成しながら、時間の現象が、一種の万華鏡（カレイドスコープ）に変えられたのを見る。このようにして、渦動、自失する疾走、絶え間ない継起の観念が生に取って代わる。これはわれわれの持つ反省と省察の必要に対して、ごく僅かでも安定した、どんな支点も与えない。（TV 14）

ミンコフスキーはここで、目まぐるしく継起する各瞬間から、時間について論じることを拒否する。これはツィーエンの時間論に対する批判であり、このようなものとして時間をみなすことを、時間が万華鏡に変えられてしまった状態として退けようとする。ここで確認しておきたいのは、「万華鏡」がしばしばベルクソンによって使用される比喩でもあったという点である。

ベルクソンは『物質と記憶』（1896 年）において、「作為的分割（*division artificielle*）」（MM 220）について、万華鏡の比喩を用いながら次のように述べている。

> どのようにしてわれわれは物質的延長の原初的に看取される総体としての連続

性を、それぞれ、実体と諸個体とに分割するのだろうか。なるほどこの連続性も、瞬間とともに様相を変化させる。しかしながらなぜわれわれは、あたかも万華鏡を回転したかのように、全体が変化するということを、そのまま単純に認めないのであろうか。なぜ全体の動きのなかに、結局、運動する物体のたどった跡を探すのか。すっかり変化しつつもまた留まっているところの動的連続性は、われわれに与えられている。なぜわれわれは恒常性と変化というこの二つの項を分解し、恒常性を物体によって、変化を空間における等質的運動によって表象しようとするのだろうか。（MM 220-221）

ここでベルクソンは、なぜわれわれは「全体」が、万華鏡を回転したときのように「変化する」ことを単純に認めないのか、と問いかけている。しかしながら一方ではこのとき、「動的連続性の全体」はすっかり変化すると同時に、また「留まっている」とも述べる。ミンコフスキーは、ベルクソンから投げかけられたこのような「変化」と「恒常性」の並立の問いに対し、上に見たように、一度、万華鏡の比喩が「行きすぎた動力学主義（ディナミスム）」（TV 14）を示すものであり、これが「停止する場所」を持たないからこそ、退けられるべきであると答えた。しかしながら、「停止する場所」についての検討を深めるなかで、もう一度万華鏡の比喩を検討し直し、これを認め直すことができてもなお、われわれには「停止する場所」が存在すると主張し、推論的思惟と直観の往復を通じて、われわれの内奥にある「同調性」の次元に入り込もうとしていく。

第二節　停止する場所

（1）空間の取り上げ直し

ここまでに確認したように、ミンコフスキーは「ベルクソン哲学に忠実に」（TV 19）時間について定義し、「空間と同一視される時間」であるために、「行き過ぎた静力学主義（スタチスム）」としての不変の時間を退けるとともに、「行き過ぎた動力学主義（ディナミスム）」であるところの万華鏡的な

時間に対しても距離を取った。しかしながらミンコフスキーは、これらの空間と同一視された時間と、万華鏡的な時間の両方に再び接近していく。これはどういうことなのだろうか。

ミンコフスキーは、ここまでは確かに、空間と同一視された時間について批判したのだが、続いて、空間の「安定」的な側面を認めることによって、生きられる時間には空間の概念が結びつけられているのではないか、と改めて問うようになる。

> このようにして、時間の内的本性に入り込もうとするすべての研究において、背景に空間の観念が、無言の、しかし不可欠の端役として現れるのを、われわれは見るのである。（TV 20）

ミンコフスキーは『生きられる時間』の第一章第三節以降において、「停止する場所」の視点に立つことによって、一度退けた「空間化された時間」に回帰し、これと「生きられる時間」の連帯を認めつつ、「現象学」と自らが呼ぶ方法に注目するようになる。すなわち、空間概念を「無言の、しかし不可欠の端役」として認めることによって、時間の経験についての検討を拡大しようとするのである。

> われわれは、ベルクソン自身が『創造的進化』においてしたように、生物学的現象という形式の下に、時間よりももっと安定しもっとしっかりした一つの基体を時間に与え、このようにして自然界の事実連鎖の輝かしい概観（aperçu）を獲得することもできるだろう。しかし同様に、純粋な現象の領域に留まろうと努めることもできる。推論的思惟と直観との間、空間と時間の間に、互いに還元し難い対立を確認することによって、われわれが押しこめられたと思っている袋小路の奥に、ひとつの出口が隠されてはいないだろうか。（TV 19-20）

第一節において確認したように、ミンコフスキーは、確かに時間が生成であり、一つの基体

であるとしていたが、ここではこれが生物学的現象、すなわち生物の進化という視点の下にはなかったという点に注意を促す。ここでミンコフスキーは、一つの全体であるところの生成が、「輝かしい概観」の働きではなく、「現象の領域」に留まることによってのみ与えられるとし、「推論的思惟と直観との間に、互いに還元し難い対立を確認することによって、われわれが押しこめられたと思っている袋小路の奥」へ進もうとするのである。

この観点からミンコフスキーは、すでに退けた万華鏡の比喩までをも、再び取り上げていく。このとき言及されるのが、「疲労、失望、落胆」（TV 20）といった、「自然界の事実連鎖の輝かしい概観」としての生物学的前進に対しては、一見すると否定的で、後退的に働くような諸現象である。

> われわれは万華鏡のイマージュを退けた。しかしながら、このイマージュはそれを描いたものの精神のうちに生じることができたのである。なるほどそれは本当の時間ではないであろうが、しかしそれにも関わらず、おそらく時間の一つの様相なのである。それではいまやわたしは、事象の継起の観念から出発して、問題の万華鏡を心の内に再構成できることを認めるのだろうか。然り。この万華鏡を単に表象するばかりではなく、さらにそれをはるかに生々しく経験することが、しばしばわたしに起こるのである。疲労、失望、落胆のときには、すべてが束の間の、儚い、つかみどころがないものに思われる。（TV 20）

ここでミンコフスキーは、一度退けた万華鏡的な時間の比喩に再び接近する。万華鏡はミンコフスキーにとって、目まぐるしく、変化し過ぎるものであり、儚く、つかみどころのないものである。しかしながら、確かにわれわれはこの万華鏡の現象としての「疲労、失望、落胆」のときを生々しく経験するのであり、ミンコフスキーにおいては、こういった「特殊な様相」と、自身が「現象学」と呼ぶものへの接近、さらには「空間」概念の取り上げ直しとは連なったものであり、これらは「袋小路の奥」（TV 20）へ進むことをを助けるという。

ミンコフスキーはここで、自身が経験した「生々しい」経験の例をあげる。彼は第一次世界大戦中に塹壕で過ごした際に、「時間の単調さ」に打ちひしがれるのだが（TV 12）、一方では、こうした時間が、生のなかでは過ぎ去るものでありつつ、確かに存在してもいるという確信を得る。

> 生命が、わたし自身の生命も、わたしのまわりに流れる生命も、現実に時間とともに逃げていき、わたしはそこに足を踏まえることができないように思われる。そして「それが何になる」という破滅的な態度がわたしの存在全体を支配する。それらは一過的な瞬間でしかなく、またそうであることをわたしも望むが、しかしながら、このような瞬間は存在するのだし、そして時間の特殊な様相を表現しているのである。（TV 20）

ミンコフスキーはこのように、「疲労、失望、落胆」（TV 20）といった一時的な現象もまた、たとえすぐに過ぎ去ってしまうものであるとしても、生の様相の一つであると述べる。すなわち、「わたし自身の生命も、わたしの周りに流れる生命」も、どちらも「逃げていく」（TV 20）ような後退的な時間経験において、そうした一時的な現れ方をする生の様相にこそ注目することを通し、「時間」についての考察を進めようとするのである。では、ミンコフスキー自身の経験したこれらの現象を、さらに詳しく検討してみよう。

（２）過去から現在への移行

本章の冒頭で指摘したように、『生きられる時間』の序文においてミンコフスキーは、1915 年に「生命の躍動の基本的な諸特性」と「記憶と忘却」、1916 年から 1917 年にかけて「死の現象学」、第一次世界大戦終了後の 1918 年頃に「われわれはいかに未来を生きるか」という論考をそれぞれの下書きを行ったことを明言している。しかしながらそれぞれは、これらの年代には下書きに留まり、以降、これらから構成される『生きられる時間』の実現まで、

20 年間を要したという。

> これらの研究はすべて下書きの状態に留まっていた。大戦の間ひとは平和を待っていた。ひとは生活を、ひとがそれを捨てたところで、〔やがて〕再び拾いあげられると思っていた。現実には、困難と、落胆と、失敗と、生きるために新しい問題に適応しようとする、苦しくまたしばしば虚しい努力の新しい時期が始まっていた。哲学的思惟に適した静寂は、なお再生するにはほど遠かった。不毛にして暗く長い歳月が大戦に続いた。私の仕事は引き出しの底で眠り続けた。（中略）わたしはただこの著作の誕生と展開の一般的方向性とをよりよく理解するのに、助けとなるだろうと信じるところの、わたしの個人的人生の若干の事実を指摘したいと望んだだけである。戦争はわたしの人生を深く変化させた。（TV 5）

ミンコフスキーは、『生きられる時間』の内容と、大戦を挟んだ自身の個人的な生の展開とが連帯していることを、ここで示唆する。さらに、この時期の経験について次のように述べる。

> 塹壕での単調な生活はしばしばわれわれに日付も曜日も忘れさせた。（中略）普通の意味での時間上の見当識障害といえば、われわれはしばしばそれに陥った。しかし誰かがわわれわれを「時間なし（sans temps）」の存在であると言ったとしたら、われわれは抗議の叫びを挙げたであろう。反対に、われわれのすべての苦しみは、死によってばら撒かれる損害以外には、時間から来ていた。われわれは続く日々の単調さに打ちひしがれていた。そして死んだ粘液の塊のようにわれわれの存在のなかに浸み込み、虚無に帰そうと脅かす倦怠──これは容易に了解されるように本質的に時間的本性の現象である──と戦っていた。大戦中、われわれは単に敵に対していたばかりではなく、「倦怠に対して」いたとひとは言わなかっ

ただろうか。（TV 12）

ミンコフスキーは、時間の変化が自身のなかでどのように発生するかについて検討するうちに、前進し、躍動するものとしての時間とは異なる時間についての経験があるという側面にたどり着く。そして、後者の「死んだ粘液の塊」のように変化してしまった時間を、「過去」についての論考と「死の現象学」として記述しようとする。

さらにミンコフスキーは、『生きられる時間』の第五章と第六章においては、死と記憶の忘却といった、「否定的で」（TV 135）、「うんざりする」（TV 139）現象に注目する。これらの「過去」についての論考、及びに「死の現象学」について、それぞれ順番に確認してみよう。『生きられる時間』の第五章において、ミンコフスキーは死について次のように論じている。

> わたしは未来に関するわたしの最初の認識を獲得する。わたしはわたしが死ぬであろうことを知る。わたしはわたしがもはやいなくなるであろうことを知る。最初の定点（le premier point fixe）、最初の明確化がこのようにして生成のうちに浸透する。そして、このことは反省を与えるのだが、この最初の明確化は、わたし自身やわたしの似たものたちの生に関する、何らかの相対的な肯定によってではなく、否定的で破壊的な性格の現象、死によってもたらされるのである。死は一つの日付の力を得る。それは、このようにして生成のうちに記録されるに至る、現象学的観点からする最初の日付である。（TV 135）

ここでミンコフスキーは、前進しない時間が一時的であるにせよ存在するという自身の経験を通して、多様な時間的現象において、軸として機能している定点を探ろうとする。この定点は、停滞した時間経験においては、不動の様相のもとに現れ、こうした様相を呈するときには、「否定的で破壊的な」ものとなる。しかし不動の様相は本質的であると同時に一時的

なものであり、時間の間隔を置いて、再び安定する支点として現れる。しかしながらいずれの様相を提示する場合においても、支点は「最初の定点」であり、「現象学的な観点における最初の日付」であるということをミンコフスキーは見出す。すなわち、定点が「最初の日付」として安定することと、これが「否定的で破壊的な」様相をもつことは、表裏一体である。このようにミンコフスキーは、多様で相対的な生は、それ自体で肯定されているのではなく、否定的で破壊的な面を含み持つことによってのみ、初めて成り立つと考える。

続く第六章「過去」においては、こうした定点は、記憶の欠落や忘却として記述される。

> 記憶の欠落は、こうした条件の下においては、常にわれわれの手段を減少させる。一つの名前、一つの日付あるいは一つの用を忘れることは、常にうんざりすることである。現象学が問題となるところでは、この実用主義的因子に対して警戒しなければならない。（中略）われわれにとって興味があるのは、生の一般的構成なのであって、生を構成する諸現象の各々が、日常生活において提供し得る有用性の度合いではないからである。さらに、有用性の次元においては、忘却はもっぱら記憶の欠如とみなされる。（TV 139）

ここでは、停止する場所が与える記憶の欠落は、有用性の尺度のもとでは、手段を減少させるものであると断定される。停滞した時間において、定点は、死んだものであり、有用でないばかりでなく、記憶の欠落であり、われわれをうんざりさせるもののように経験されるのであり、われわれはこれを退けることができない。しかしながらミンコフスキーは、これが一見すると有用でないという点に注目し、思い出せる過去の断片と思い出せない「塊」との関係を分析しようとする。

> どのような過去の断片が喚起されるのであれ、いつでもその周囲には、漠然とした薄暗い一つの圏（ゾーン）のようなものがあるのであって、それはこの圏のなかから浮

かびあがるのであり、またこの圏はそれの支え（support）となるのである。いつでもその背後には、穏やかに、衝突もなく、無限のなかに薄れゆくところの、測り難い一つの「以前」があるのであり、この「忘却されたものの塊」こそは、過去の第一の直観であり、記憶がその上に孤立した出来事の思い出を綴る、布地の実質を構成すると思われる。（TV 145-146）

ここでミンコフスキーは、記憶として戻って来る過去について、これが記憶としては欠落したものから成る、薄暗い圏（ゾーン）に取り囲まれながら立っていると述べる。言い換えれば、思い出されるに至った「孤立した出来事」たちは、「忘却されたものの塊」によって支えられているのであり、個別の記憶は、一枚の布地であるところの暗い圏を基礎としながら、その上にかろうじて立とうとしているのである。すなわち、薄暗い圏（ゾーン）という否定的なものの塊こそが、想起という現在に関係する記憶を促すのであり、現在の想起の「支え」となっている。

こうした前進する生に対する否定的な側面への注視は、ミンコフスキー自身においては、二つの章の下書きを書いた 1915 年から 1917 年だけでなく、「苦しくまたしばしば虚しい努力の新しい時期」（TV 5）に該当する戦後の時期にも、長らく保たれた。しかしながら、こうした「倦怠」（TV 12）の時間の後で、ミンコフスキーは、第六章の最後に、「時間の取り戻し」について記述する。

そこには運動があり、力動性があり、そのうちには時間がある。そこに時間があるのは、まさしくそこにおいて全てが忘却に捧げられているのに応じてである。時間はこのようにしてそこにおいて、その本性を保持するのである。時間はついにそれが与えたものを取り戻す。時間は一瞬、──この一瞬が数世紀であることもありうる──それの表面に浮かぶことのできたものを、沈めてしまう。このようにして、憤慨するどころか、われわれは普遍的忘却の規則のうちに、深い鎮静を見出すのである。それは夜の到来をわれわれに予告する夕の平安である。（TV 153）

ミンコフスキーによれば、時間は、忘却に付き従うものである。しかしながら、時間は「忘却されたものの塊」に自身を捧げることによってこそ、構成されることが可能になる。時間は、運動と力動性を持ち続けており、表面に浮かぶ断片を、ときに「数世紀」という長い時間を跨いで沈め、蓄積し続けるからこそ、取り戻される。このとき、時間の取り戻しは、死や忘却の現象から脱することによってではなく、暗い塊と共にあることによる、「劇的」ではない、「和らぎ、澄んだ雰囲気」（TV 154）のなかで起こる。

こうして取り戻された時間は、もはや、前進するだけでのものではない。全てが暗い忘却されたものの圏に捧げられたことを通して、今度は関係が転倒し、この薄暗い圏は、最初の日付を生に与え始める。忘却されたものの塊は、このとき、奥行きとして機能する支えとなり、この支点は、過去から現在の取り戻しと移行を促すようになっていく。

> 過去から現在への移行（passage）には、線的なところは少しもない。（中略）現在──生きられる現在のことであるが──は、どのようにしてもそれら〔切り取られる事実〕から演繹されることはないだろう。というのもこの現在は、過去と未来の間に滑稽にも挟まれた一部分ではなく、過去を特徴付ける時間の生き方とは全く異なった、時間を生きる一つの仕方であるからである。それは切り取りもしなければ、遊離させもしないで、統合し、展開し、光を放射し、かくしてわれわれの前に未来の地平を開く。（TV 155）

過去の章の最後に、このようにしてミンコフスキーは、過去から現在への移行を記述する。ミンコフスキーは、過去から現在への視点の移行には、線的な連続性ではなく、「全く異なる」面への移行があるとする。思い出すことのできる断片的な過去と、この支えとなる想起することのできない過去の塊についての記述を経て取り戻される「現在」は、このような過程を経て、想起できる断片と想起できない塊からなる過去とは、全く異なる面に位置する、

絶対的な点となる。すなわち、忘却されたものの塊という「支え」（TV 145）を得ることによって、「現在」は、過去の断片を切り取りもしなければ、「遊離させもせず、統合し、展開し、光を放射」（TV 155）するようになるのである。

（３）現在から接触へ

こうした過程を経てミンコフスキーは、「生きられる現在」を見出す。これは、「統合し、展開し、光を放射する」ような「現在」なのだが、これについて、ジャネの「現実機能」との比較から確認したい。ミンコフスキーは、『生きられる時間』第一章の第四節において、ジャネの記憶理論を要約し、ジャネの理論に則りながら「現在」について検討している。ジャネは、「抽象的な知性は、思考の最も低次の段階にあり、意志、注意、現在の感情（le sentiment du présent）といった現実機能（la fonction du réel）であるところの高次の段階が消失したときにも残存する」[13]とし、「現在の感情」を含む「現実機能」を、精神の諸機能の最も高次のものに位置付ける。ここでわれわれは、ミンコフスキーがジャネの記憶理論に従うことによって、「抽象的な知性」の能力が低次のものであるとしたジャネの図式を再び逆転させ、「現実機能」や「生きられる現在」という土台の上に立つことによって初めて可能になる、分化によって遠くへ行くための能力であると捉える点に注目する。そして、ジャネが高次のものとした「現実機能」について、これが頂点ではなく、土台であり「支え」であるからこそ、どのような場合においても「後から」回復可能であるとするミンコフスキーの主張を明確化したい。

まずは、ミンコフスキーによるジャネの要約を見てみよう。ミンコフスキーはまず、ジャネの語を引用しながら、「現在」とは複雑な行為であると定義する。

> 「これがわたしの現在だ」とわたしが言うとき、わたしは自分自身にであれ、他人にであれ、わたしがまさに行為しているときに、そのわたしの行動について物

[13] Pierre Janet, *Les obssesion et la psychasthénie*, Paris, Félix Alcan, 1903, p. 461.

語をしているのにほかならないのである。こうして現在とは、われわれが行為しつつあるあいだに、その行動についてわれわれがする話である。現在とは物語（narration）と行動とを結合する特殊な行為である。（中略）現在は記憶を再びより堅固なものにし、それを行動の実践的領域に再び連れ戻すのである。現在はこのように複雑で困難な行為である。（TV 29-30）

このように、ミンコフスキーにおいて「生きられる現在」は、特殊な「行為」であり、また「状態」（TV 30）でもあるとされる。なぜなら、われわれは「生きられる現在」を「これがわたしの現在だ」と自分自身に語りきかせことによって形成するからである。では、これについてのジャネの記述を確認してみよう。ジャネは『記憶の進化と時間の概念』という1927年から1928年の講義において、次のように述べている。

現在化（présentification）は最初の基礎的な作用を必要とする。それは、現在の構成である。現在の概念は非常に複雑なものである。現在は、われわれの構成員たちとともに実際に行動すること、言葉の上だけではない本物の行為を成すこと、すなわち真の行為を行うことと、同時に、行為があたかも為されていないかのように話（récit）をするという二重の作用において構成される。話における記憶上の行為と、実際の振る舞い、これら二つの行為を混合するのである。われわれは、講義（le cours）を聞きながら、一つの流れ（un cours）に立ち会うだけではなく、同時に、われわれは、われわれ自身を聞くのである。「わたしはコレージュ・ドゥ・フランスの講義に出席している。」このフレーズは一つの話である。この話は一日の終わりには意義を持たないが、誰かに会ったとき、あなたがすぐにそうしたときには、一方で、あなたはあなたの現在を成す。なんと特異な行動であろうか[14]。

[14] Pierre Janet, *L'évolution de la mémoire et de la notion du temps : Leçons au College de France 1927-1928*,

ここでジャネは、「現在化」という行為が、前提としての「最初の基礎的な作用」であるところの「現在の構成」を必要としつつ行われるという矛盾を述べる。すなわち「現在化」は、「一つの流れ」に立ち会いながら、同時に、それがわれわれ自身による言葉を聞くという、ねじれた時間の上にしか成り立たないとする。ジャネにとってこうしねじれや「混合」は、特異で、複雑で、困難であるとしか言いようのないものである。このように「現在」は、ジャネにおいても、われわれの「基礎」であるにも関わらず、それが未だにないものであるということが示唆される。ジャネは、「現在」を構成するこうしたねじれを可能にする、われわれの能力の複雑さや豊かさに着目するからこそ、これを土台ではなく、「高次のもの」であるとみなしたと考えられる。

さらにミンコフスキーは、こうしたジャネの記憶の発達についての理論を支持し、この機能をわれわれの「支え」でありながら、時間をかけて「後から」構築されるものであることを強調する。ここで鍵となるのは、ジャネの記憶理論における、自閉した「作話」の概念である。まずミンコフスキーは、閉じられた個々の世界で作られる「作話」の作成からしか、共通の「現在」を含み込んだ「生きられる現実」が構成され得ないとする。

> 記憶の問題に戻るならば、われわれはいまや二種類の記憶を区別しなければならないだろう。一方は作話（fabulation）の記憶であるが、それにおいてはすべてが相対的であり、以前と以降とはいかなる現在においても結合されていない。また、このことからして、それは思いのままに引き延ばすことができる。もう一方は堅固な記憶であるが、これはひとつの本質的な作用、すなわち、現在を構成する作用によって性格づけられており、それは現在を考えに入れることを強制されている。（TV 30）

Paris, L'Harmattan, 2006, p. 272.

ミンコフスキーは、ジャネにおける「作話（fabulation）」とこれに挿入される「現在」に注目し、記憶を二つのものに分ける。一つ目は「作話」の記憶であり、「現在」と関わりのない記憶である。「作話」は、年代的な順序や「遊戯」（TV 29）の要素を持ち、これだけで完結することができるし、どのようにも引き伸ばすこともできる、柔らかい記憶である。一方、二つ目の記憶は堅固な記憶であり、現在という最初の点を強制された記憶である。

> 以前と以降の関係は全く相対的なもので、どの「以前」も、別の「以前」との関係においては、「以降」であり得る。作話の基礎にあるのはまさしくこの相対性である。この相対性を抹殺するためには、一つの絶対的な点、過去と未来とを、一義的な仕方で、それに対して配することができるところの、いうなれば一つの限界を導入することが必要となった。このようにして現在の概念が発達したのである。（TV 29）

「作話」の記憶は、この内部に前と後という順序を持つが、この順序はどこにでも挿入することが可能であり、相対的である。一方で、後者の堅固な記憶は、絶対的な点を挿入された記憶である。さらにミンコフスキーは、この「現在」の絶対的な点について、不在者と、その塊としての過去との関連のなかで発達したものであるとする。すなわちここで、「現在」が未だ挿入されていない自己自身で完結した遊戯としての「作話」概念と並行して、「作話」がすでに「現在」という不在の点をすでに含み込んでいるという二重性が提示される。

> 記憶の起源は、人間は、群れを成して生活するある種の動物たちがするように、野営地の外に見張りを立てるようにすることから引き出すことのできるすべての利益を発見したときから、発達し始めたところの一つの社会的な行為にある。この行為は不在者に言葉によって警告したり、命令を伝達したりする能力を明らかに含んでいる。話（récit）はこのように記憶の基礎となる行為である。この行

> 為はいまや進化の過程を通じて次第に複雑化していく。それはまずもって、不在者に、もはや単純な命令ではなく、状況を伝達することを目的にする記述を生むであろう。（TV 28）

ミンコフスキーのジャネの記憶理論の解釈によれば、記憶の起源は、「不在者」への警告や命令のための「話（récit）」として形成された社会的な行為にある。こうした「話」は、まず、共同体内部における不在者に向けて形成され、次に、「過去の消失（disparition du passé）」というまとまった不在を含むようになると、「物語（narration）」となる[15]。そして、「以前」と「以降」という配列を含んでいくことによって、これ自体が目的として自閉するような「作話」となり、実際の行動に回帰しながら、「現在」を形成するに至る。ここで重要なのは、「現在」が、「作話」に「後から」付け加えられるとされる一方で、「不在者」として最初からこのなかに含み込まれていたともみなされる点である。すなわち、共通の「現在」は、「後から」構成されるという側面と、これがどのようなときにもすでに「作話」に支えとして含み込まれているという二重性を持つ。

このようにしてミンコフスキーは、ジャネの理論に従いながら、その場にいるものといないもの、構成されるものと構成するものの二重化や混合状態を、「接触」という相互性のなかにとらえていく。そして、病においてこの「現在」が失われているように見えたとしても、これを誰か一人の絶望的な努力や、医師と患者との一対一の努力によってではなく、主体と世界の「根底の連帯」から、さらにはこれを介した複数のひとやものの相互的な「接触」のなかで構築し直せると考えるのである。ミンコフスキーは、「生きられる接触」とジャネの「現実化機能」、ベルクソンの「生への注意」を関連させながら、次のように述べる。

> 自閉の概念を手がかりにして、わたしは、現実との生きられる接触の喪失を精神分裂病の本質的な障害とした。（中略）この概念は、ベルクソンの「生への注意」

[15] *Ibid.*, p. 12.

> と少なからず共通するものをもち、また他方では、ピエール・ジャネの「現実化機能」にも似ている。したがってそれは、こういう表現が許されるならば、現代の哲学と精神病理学の諸傾向の中軸に位置する観念であると言えるだろう。（TV 256）

ミンコフスキーは、「生きられる接触」についてこのように、これが「自閉」概念を中心として論じられたものであり、ベルクソンの「生への注意」やジャネの「現実化機能」と類似したものであるとみなす。しかしながら、次章移行で詳しく論じるように、ミンコフスキーは分裂性による「自閉」を通して現実に対して注意を払わないことが、創造的行為であることを強調しながら、現在における点の取り戻しという「精神分裂病」の臨床上の課題に、「接触」概念の検討から取り組もうとするのである。

第二章　　四つの原理における分裂と同調

次に、人間と世界に共通した性質としての「分裂性」と「同調性」の交錯について、ミンコフスキーが思弁的に記述している箇所を確認したい。ミンコフスキーは、これら二つの性質がわれわれを貫いているのであり、これに例外はないと考えた。このような思弁は、しかしながらブロイラーの臨床の理論から着想を得たものであり、この二つの性質を明確化することによって、ミンコフスキーは、すぐには「実用的でない」ものであっても、長い時間をかけて実用的なものになると考えていた（S 267）。したがってわれわれはまず、一つの流れから始まって世界のなかに自我が注がれるまでのミンコフスキーの四つの原理を示した後で、これがブロイラーの臨床とどのように関わっているかについて明らかにしたい。

「四つの原理」のなかで、まず注意したいのは、分裂と同調の過程において、第一章で検討した「生きられる現在」が、常に中心として働いている点である。「生きられる現在」は、接触や移行、「統合し、展開し、光を放射する」（TV 155）ことを可能にする支点であり、ミンコフスキーにとってこうした「現在」の支点は、あらかじめありつつ、かつ構成までに「時間がかかる」（TV 155）という二重の面からとらえられていた。ミンコフスキーの臨床においては、こうした「現在」の支点が弱まった場合における再構成が目指される。また、四つの原理のうち第三の「浸透あるいは分有の原理」こそが、自我を「休息させる」ことによって「一つの感情」の「接触」を形成するための、最も重要なものであったことも強調しておきたい。しかしながらこの「第三の原理」を検討するにあたって、それに先立つ第一の原理、第二の原理においても、重要な点を抽出しておく必要がある。「第一の原理」においては、この構成に向かうために、自我を一つの流れから分化することが目指され、「第二の原理」においては、この分化が強められ、個別化に向かっていく。なぜなら、四つの原理のなかでも最も重要な「第三の原理」における同一のものの浸透や接触は、全く異なる個別的なものの間にしか発生し得ないからであり、ミンコフスキーがこれらの過程を、順序のある

ものとして考えていたからである。さらに第四の原理においては、分化したものが、さらなる拡大をしていくことが目指されている。これら四つの原理を追った後で、最後に、これらの原理とブロイラーの臨床との関係について確認する。

第一節　第一の原理──展開の原理

（1）点の並列

『生きられる時間』第一章で提示される「展開の原理（le principe de déploiement）」は、生成が個別の継起を乗り越え、広がりつつも、それぞれの継起を同質化し、安定させる様態を指す。ミンコフスキーは、第一の原理について次のように述べる。

> 継起が永続化すればするほど、万華鏡や流砂の印象が生まれるかわりに、反対に、類似性、安定性、延長、一定性、さらにいえば、単調の要因さえもがそこから析出され、特別の衝突なしに、生成のうちに浸透するのを、われわれは見るのである。（TV 26）

第一の原理においてミンコフスキーは、本論第一章第二節において確認したように、「生成」がみずからを座標空間に配置された点のように分解し、連続した点としてしまうことを、積極的にとらえようとする。点に分かれた生成は、それぞれの点を形成するために、おのずから互いに似たものとなり、単調になっていく。われわれは、このような仕方での生成の現れを見るのである。これらの点は互いに似たものになることによってのみ、互いを繰り返し、反復することができるようになる。

> 物理学は、浸透と合体しかないとみえるところに、独立点（$T, T+t_1, T+t_2 \ldots$）の並列を導入して、時間を空間化し、それを変形する。しかしこれに対しては、一つの本質的に重要な問題が提出されるであろう。すなわち、物理学がこの同一視

をなすことをゆるすものは何であるか。しかも物理学はこれをまったく自然に行うのであって、それに天才的創意などは全然必要ないのである。（TV 21）

「浸透と合体しかない」一つの流れであるところの「時間」を分解してしまうことは、確かにわれわれが時間に加えた操作的な変形であるかのように見えるかもしれない。しかしわれわれにとっては、この操作を完全にやめてしてしまうことのほうが困難である。なぜなら、われわれは一つの流れとしての時間と、個別の断片としての時間という二つの時間を生きているからであり、「停止する場所」としての定点に支えられるとき、点の連続もまた、統合され、連続性を保証されるようになる。生成が自らを分化する様態をわれわれが「見る」ことと、その分解そのものがわれわれから生成の側に加えた操作であることは、ここで交錯する。われわれがいままさに立ち合っている、生成のおのれ自身による分解は、同時に、われわれが行った操作でもあるからである。

時間は一切の概念的方式化に逆らう非合理的な一現象として現れるが、しかし他方において、われわれがそれを表象せんとするやいなや、それは自然に一本の直線の様相を取る。ゆえに、時間のこれら二つの極端な様相の間に挿入され、かつ重なり合いつつ、一方から他方への移行を可能にするような諸現象が存在するのでなければならない。われわれの研究はいまや明確な一つの方向づけを受けた。それはこれらの挿入されるべき諸現象を対象とするであろう。（TV 23）

ここで時間はミンコフスキーによって二つの仕方で定義されている。1）非合理的な一つの現象であり、かつ2）多数の変化する点の連続からなる直線である。こうした時間の「二つの極端な様相」は、どちらか一方で成立するのではなく、互いに移行し合っている。このように、ミンコフスキーにおいては、分割できない二つであるところのもの重なりは、われわれが生について論じるときにはいつも現れる。時間という流れの各独立点（$T, T+t_1, T+t_2 \ldots$）

への変化もまた、この交叉によってあらかじめ準備されたものであり、われわれ自身もまた、このような変形を被っている。しかし同時に、この変形は、振り返るときには、あたかもわれわれ自身が行った行為であるかのようにしか経験できない。流れの変形は、確かにわれわれが行った行為でもあるからである。

（２）現在と今の相違

第一の展開の原理における二つの時間の交叉において、ミンコフスキーは、やはり「現在」の機能を強調する。

> 現在のうちには持続、延長の一部がある。わたしは現在がどこで始まり、どこで終わるかを言うことができず、その限界を明示することがまったくできない。しかしそれでもわたしは、これらの限界が、今（maintenant）とは反対に、流動的で、伸延性のある、柔軟なあるものを、内に持っていることを知るのである。われわれにとって現在は、その時々の事情に応じて、現在の瞬間（今）であることも、今日であることも、現代であることもできる。そしてこれらすべての現在の形式は、互いに入れ子になっているのであるが、生きられる現在の観念に従属することは、依然として変わらないのである。（TV 32）

ここでミンコフスキーは、「現在」の感覚は延長と持続を同時に内包しており、かつ、「今」という客観的空間を含まない主観的な点とは違って、流動的で、伸延性のあるものであるとする。こうした「今」と「現在」の違いについて、ミンコフスキーは、『生きられる時間』第二編において、「進行麻痺」と「精神分裂病」の患者の時間経験の違いについて論じながら例を示しているので、確認してみよう。ミンコフスキーによれば、「進行麻痺」の患者においては、「わたし-ここ-今」（TV 257）という主観的な感覚だけが強くなる。一方、「精神分裂病」においては、客観的に場所を「知っている」（TV 257）ことのみが強調されるため、

これらは両方とも、「現在」を含んでいないという。

> 痴呆期に達した進行麻痺患者は、「あなたはどこにいますか」という問いに、しばしば「ここ」と答える。そして答えを強要すると地団駄を踏んだり、手で自分のいる場所を指したりする。自分のいる場所については、正確な知識も記憶も全く介入させることができないため、「わたし-ここ-今」が、彼においては、いわばむき出しの状態でさらされている。精神分裂病患者は、逆に、自分がどこにいるかを正確に知っているため、自分がいる場所に対して感じないとか、「わたしは存在する」という言葉が彼には明確な情報を持たないと述べる。（TV 257）

このようにミンコフスキーによれば、「進行麻痺」の患者においてわたしが「今」、「ここ」にいる感覚だけが強まる一方で、「精神分裂病」患者は、正確にその場所のことを「知っている」という。これらはどちらも、「現在」の点を含んでいない。ミンコフスキーによれば、「現在」とは、「今」、「ここ」だけからも、「知っている」ことのみからも構成されないものであり、また、ジャネの「現実機能」のように階層上の頂点ではなく、等質的で静かな「高原（plateau）」（TV 32）であるからである。

> それ〔現在〕は、もはや眩暈を覚える山頂ではなく、安らぎを感じせしめる高原（plateau）である。それは今よりもはるかに峻厳を欠き、排斥的でなく、独断的でない。それははるかにより静穏（calme）で、より等質的（homogène）で、より鎮静的（apaisant）である。われわれは現在のなかで、わたしを生きるに任せることができる。（TV 32）

このように、ミンコフスキーにおいて「現在」とは、山と山を接触させ、結ばせるような平らな高原であり、穏やかな場所であるとされる。

第二節　第二の原理─自我を超えた結合、すなわち超結合の原理

（１）人格的躍動

次にミンコフスキーは、第二の原理について検討する。ミンコフスキーは、第二の原理を考察するために、次のような疑問を提示する。独立した個別の点たちは、同質的な点の連続のなかで、いかにして渾然一体となってしまわずに留まり続けることができるのだろうか。この問題についてミンコフスキーは、個々の点を今度は「生きた人格（personnalité vivante）」に置き換え、二番目の「自我を超えた結合、すなわち超結合の原理（Le principe de l'union au delà du moi ou de l'union transpersonnelle）」を考察する。

ミンコフスキーは、上の問題を次のように問い直す。

> いかにして躍動（élan personnel）は、属性をすべて遠ざけてしまうところの、言い換えれば、その進路上に見出されるすべてのものをその波の下に沈めてしまうところの、生成を前にして存続し得るのだろうか。（TV 42）

ここで注目したいのは、ミンコフスキーが躍動を「生きた人格」が行う創造的な行為であり、これによって創造された作品や創造の行為が、われわれ自身を「超えている」とみなす視点である。

> 躍動によってわたしがあることを実現したとき、このようにして創造された状況や、「わたしはわたしが達成しようと企てたことを達成した」とか、さらには、「わたしはあるものを作った、一つの行為を完了した」とかいうことの確認によって、決して尽きるものではない。そのようなことは、この場合には、わたしが目の当たりにしていることの一部分、それも最も重要でない一部分でしかない。それは、わたしの作品であるということは変わらないままに、それをわたしの作品として

> 生み出したようにみえる複合体（complexus）とは全く違う、それよりもはるかに強力で、はるかに大きい、一つの複合体のうちに統合される（s'intégrer）のである。作品は常に一つの射程、客観的な、より適切には、超主観的（transsubjectif）な一つの特徴を持っており、それが作品の意味そのものなのである。（TV 52）

躍動によって、「生きた人格」は、個別の行為を行う。また、この行為によって生まれた作品は、「な作品」として、それを作り出したわれわれの機構よりももっと大きく、客観的で、より正確にいえば、超主観的である機構のなかに統合されるという。ミンコフスキーはここで創造的行為によって生み出されたものが、自らを結実することを通して、自分自身とそれを超えたものを「結合」させ、この「結合」によってのみ両者を確立する様態を論じようとするのである。

（２）行為による開花

ここでわれわれが注目したいのは、創造的行為とその完成を通して、生成とわれわれが結合し、互いに触れ合うことである。

> 周囲の生成がそのあるところのものものになるのは、ただわたしの躍動がそこに統合され、そこで具体化する（prendre corps）がゆえにである。周囲の生成に、わたしの目に何らかの現実的で、有効で、堅固で、手触りのある（palpable）ものという性格を与えるのは、この統合である。躍動が実現化という因子を含んでいるからこそ、それが飛び込む生成は、わたしに現実的なものに見えるのであり、わたしがこの生成に到達し、直接それに触れるからこそ、それは実現された作品に広がりながら、有効で手触りのある印象をわたしに与えるのである。わたしは物質性という言葉を使いたくさえなる。（TV 52）

このように、躍動としての創造的行為が行われるとき、生成は「わたしの目」にとって、堅固で物質的な、手触りのあるもののように見えるという。ここには第一の原理と同様の論理展開がある。われわれは、第一の展開の原理において、生成による自らの分解にわれわれが立ち合うことと、その分解がわれわれの側からの主体的な行為であることが、交錯することを確認した。この交錯は、第二の原理においては、新たな項であるところの躍動を介して、同様に語られる。すなわちわれわれは、創造的行為としての躍動を介して、生成に触れるのである。この接触は、生成が行為によって生まれた作品に広がりながら、生成からわれわれに与える手触りそのものである。さらにここで、われわれが創造的行為を介して触れた生成は、創造的行為そのものを通して、今度は、われわれに折り返される。この折り返しのなかで、生成は物質的な手触りをわれわれに与える。言い換えれば、われわれの創造的行為は、われわれの生きた個人とそれを超えた生成との接合の結び目となっており、その結び目がわれわれに折り返されてくるために、われわれが生成に触れることを可能にしているのである。こうして、われわれが行った躍動は、結び目として生成のなかに統合され、生成のなかに堅い具体的なものの手触りを堆積させていく。われわれがその手触りに触れることができるのは、ただ創造的行為を通してのみであり、そのような行為をしたときにだけ、生成はわれわれにその具体的なものを返す。そして、おのおのとして開花した諸点は、生成のなかに統合され、降り積もり、これを豊かにする。

この折り返しを、ミンコフスキーは次のようにも述べている。

> わたしはわたしの行為（mes actions）によって開花する（s’épanouir）。そしてこのようにして開花しながら、わたしの自己を確立するのであるが、そのとき一挙にわたしは、わたしの自己にひとつの超−自己（un sur-moi）を、すなわち、結局のところ、ひとつの非−自己（un non-moi）を、生成において、重ね合わせる（superposer）のである。（TV 45）

このように、行為としての躍動は、個別の点としての「わたし」とわたしでないものとしての生成を重ね合わせる。行為によって、わたしとわたしでないものは、互いを結び、重ね合わせながら、堅さをもった互いに異なるものとして、それぞれを開花する。

> われわれのうち誰も不可欠でなく、われわれの一人一人はこの世の偶発事（incident）でしかない。そうではないであろうか。そうだ、とわれわれは言うであろう。しかしそれは生のある瞬間においてだけであり、また反省するときにだけである。（TV 43）

諸点であるところのわれわれは、確かに互いに似ているために、交換可能であるし、反省は、この連続性について省みることができる。しかし反省は、自己と生成の垂直的な関係を証言することができない。そこでミンコフスキーは、並列した点として自らを分離しつつも、生成との垂直的な関係をつくり出す行為、すなわち、「躍動」という「生成という明るい影に付き添われる」（TV 42）ような創造的な行為を記述する。

> たとえわたしが、自ら咲き、自ら示すところの自己を、わたしの行為とわたしの作品によって固定するとしても、わたしは、わたしの躍動が、決して自らを限定しないこと、しかしながら、わたしには満たすべき一つの役割があり、わたしが一つの場所（もちろん空間的な意味でではなく）を占め、またそれが、わたしがわたしをはるかに凌ぐあるものの表現であることを、直接的な仕方で語るのを見る。（TV 43）

躍動は、行為し作品の刻印を残すことによって、まずは自らを並列的に安定させる。しかし同時に躍動は、「わたし」をはるかに凌ぐものについて、「わたしの行為と作品」を通して語る。したがって、躍動が残す点がおのおののあいだで渾然一体となってしまわないのは、行

為そのものと行為によって創造された作品が、自らを点として一定化させ、一つの場所を占めさせるからであるが、そのようにしつつも、この点は、生成との「重なり」を再び被る。

ここから、第一の原理と第二の原理の共通点が見えてくる。第一の原理においては、生成が自ら分かれることと、その分離がわれわれの操作であるという二重性が語られた。そして、第二の原理においては、躍動を介したわれわれと生成との接触には折り返しがあり、この折り返しによって、われわれとわれわれを超えたものが重なり合うことが明らかになった。このように、ミンコフスキーにおいては、一である生成と、複数のわれわれが属する異なる次元が、互いを結び、互いを活気づけ合うことによってのみ、初めて両者ともに存在することが可能になる。これをミンコフスキーは、生成とわれわれとの、「分割されざる二元論（dualité indivise）」（TV 44）と呼ぶ。

ここでわれわれが注目したいのは、この二元論においては、二元的なものが、二つであることを保ちながら、かつ「分割することができない」という点である。この別々でありながら完全に断絶されることなく交叉する様態は、第三の「浸透あるいは分有の原理」で、さらに詳しく論じられることになる。

第三節　第三の原理－浸透あるいは分有の原理

次にミンコフスキーは『生きられる時間』第二章で記述した、「結合の原理」においてまさに焦点となった「結合」について、躍動によっては語り得ないもう一つの側面から記述しようとする。第三章の冒頭において「躍動」から「現実との生きられる接触（le contact vital avec la réalité）」の現象に目を移しながら、ミンコフスキーは次のように述べる。

> 躍動を特徴づけていた緊張の感情（sentiment de tension）が、休息と弛緩の感情（sentiment de *repos* et *détente*）に変わる。われわれの周囲との関係に以前存在していた空隙（lacune）が、いまや満たされるように思われる。われわれは生成に

よって前方に運ばれ、優しく揺られるように感じる。そしてもしこのようにしてわれわれが自分自身を断念するようにみえるとしても、同時にわれわれは、周囲の生成と混じり合う（se confondre）能力のうちに、ある崇高なものを味わうのである。われわれは、可能なかぎり親密に周囲の生成と結合されているのを感じ（se sentir uni）、いわばそのうちに溶解し、同時にこの相互浸透（pénétration réciproque）の価値を理解する。（TV 58）

「躍動」と「現実との生きられる接触」は、どちらも、われわれと生成を結合する働きをもつが、その役割は全く異なるものである。躍動は、創造的行為によってわれわれと生成を「触れさせ」、結合させるが、現実との生きられる接触は、相互浸透によって結びつけるからである。これはどういうことだろうか。これらを比較するために、われわれはまず躍動における結合について、もう一度確認したい。

躍動においては、われわれは生成と接触するが、この接触は隔たりを持った接触である。この接触においては、触れるものは、躍動を介して、互いの隔たりを強く感じることになる。ミンコフスキーは躍動が発生させる分離について、次のように述べる。

われわれを周囲と対立せしめ、それとの親密な接触を、少なくとも一時的に断念させるものは、この活動性である。われわれはわれわれ自身のうちに必要な力を汲みながら、またわれわれの作品のなかに自分を完全に吸収させながら、周囲の生成に刻印（une empreinte personnelle）を遺そうとするのである。躍動のうちには、このように、いわば分裂性の要素がある。（TV 68）

確かにミンコフスキーは、第二章において結合の原理について語り、躍動を介してわれわれと生成とが触れ合うことについて記述した。しかし同時に、躍動のもつ「分裂性」による、われわれと生成との切り離しにも注目する。われわれと生成は、「空隙」によって隔たらせ

ながらしか自らを結びつけることができない。人格的躍動は先の引用で見たように、物質的な手触りによってわれわれと生成を繋ぐために、われわれは生成の手触りを感じることができたとしても、これに直接入り込むことができないからである。創造的行為がもたらす手触りは、触れられるものであるからこそ、常に隔たりとともにある。

一方、第三章「浸透あるいは分有の原理」で論じられる、現実との生きられる接触を介した結合についてはどうだろうか。ミンコフスキーによれば、われわれは、人格的躍動を介した結合の場合に存在していた空隙が、現実との生きられる接触においては、「満たされる」のを感じるという。この結合は、優しく揺られるような、休息と弛緩の感情をわれわれに与え、生成とわれわれが溶け合い、相互に浸透することを可能にする。このような仕方の結合をこそミンコフスキーは、「浸透あるいは分有の原理（le principe de pénétration ou de participation）」と呼ぶ。

> われわれは共感のうちに、現実との生きられる接触の本質的特徴を、苦もなく見出すことができる。共感は瞬間的であることはできないだろう。それのうちには常に持続がある。そしてこの持続のうちには、相並び完全に調和して流れる、いわば二つの生成がある。このようにして流れながら、それらは互いにあまりにも親密に浸透し合うので、ひとはそこに、一種の反響によって類似の感情を相手のうちに呼びさまし合う、二つの感情の存在を認めるかわりに、むしろ一つのものでありながら、二つの異なる人格的生命のなかに統合されるに至った、たった一つの感情（un seul sentiment）を認めたくなるだろう。そこには現実的な分有（participation）がある。（TV 61）

前章まで、一貫して一つの流れとして語られていた生成は、ここで、簡単に二つの流れとして語られてしまう。二つの流れは、初めから二つのものであったかのように、二つの生命のうちに別々のものとして流れているだろう。しかしそれでも、ここには、これらの二つの流

れとはさらに別の、一つであるところの何かがある。それは、感情（sentiment）である。われわれは、二つの別々の流れを生きながら、たった一つの感情に触れる。この接触には、物質性を介した接触とは異なる、隔たりのない接触があるだろう。この隔たりを介さない相互浸透としての「一つの感情」の分有は、ミンコフスキーの哲学にとって最も重要な原理である。ミンコフスキーにおいて、別々のものたちがそこに触れるたった一つの感情は、一時的な、移ろいやすいものではない。ここでいう感情はその場ごとに作られるような儚いものではなく、むしろ、そこにいる二つの別々の生命があるよりもずっと前から、あらかじめ存在していたものである。現実との生きられる接触とは、このたった一つの感情に触れる行為であり、ミンコフスキーによる臨床もまた、この一つの感情への接触を取り戻すことが主眼に置かれていた。われわれはこの点について、本章の最後に確認する。

第四節　第四の原理──箱入れの原理

（１）同心円

次の第四の原理においてミンコフスキーは、「分有あるいは浸透の原理」によって「生の広がり」が拡大される様態を、「箱入れの原理（le principe d'emboîtement）」として論じている。この原理においては、分離した複数のものたちが、それぞれの中心をもち、それらが同時的に一つのものに触れる様態が記述される。ミンコフスキーによれば箱入れとは、「われあり« J'existe »」、「われもつ« J'ai »」、「われ…に属す« J'appartiens à… »」という三つの現象が、同心円を描きながら放射していくことを指す。これはどういうことだろうか。ミンコフスキーは、第四の原理について次のように述べる。

> 空間を超える（au-dessus de l'espace）と同様に、言葉の通俗的な意味での、時間をも超える（au-dessus du temps）、一つの原初的な球体（une sphère primitive）があり、そのなかにこれらの現象の──もちろんそれらが計量可能で量的なものをもつ限りにおいてではなく、それらが何よりもまず質的で生命的なものをもつ限り

における──本質的な属性が、全体のうちに包摂されるかのように、含まれていることを承認しなければならないのではないだろうか。（TV 113-114）

ミンコフスキーは、二つの次元の交叉を、一つの原初的な球体（une sphère primitive）のなかに見出す。この球体は、範囲をもって、三つの段階を経ながら同心円状に広がって行く。この球体のなかには、「質的で生命的な」属性が含まれ、包摂されている。ここで重要なのは、この球体が空間と時間を超えるという点である。

わたしは、これらの性格〔「より遠くへ « plus loin »」と「果てまで « jusqu'au bout »」〕の本来的な意味をわれわれに与えるものは、まさしくこれらの生命現象〔活動性、欲望、倫理的行為〕であり、それ以外のものではないとすら言いたい。この同じ現象は、生命存在が空間性との関係において、いかに延長し（s'étend）、展開し（se déploie）、開花する（s'épanouit）かを、それも幾何学的空間において場所を動くことなくそうするかを、われわれに示すであろう。箱入れの観念も、これと同じ意味に取らなければならないであろう。（TV 114）

球体における交叉は、物理的に延長すること、同質的な諸点が展開すること、そしてそれぞれを開花すること、という行為のなかで発生する。この交叉によって、おのおのの個体は、座標上の定点である「場を動くことなく」広がっていく。すなわち、箱入れの原理とは、物質性をもつ時間が、物質性をもたない時間を二重にもち、物質の重みを軸としながらも、その意味においては動くことなく、他の空間に染み出し浸透していく様態を指している。さらに詳しく、この広がりについて見てみよう。

わたしはここで、「われあり« J'existe »」、「われもつ« J'ai »」、「われ…に属す« J'appartiens à… »」という、三つの現象のことを念頭に置いている。容易に了解で

きるように、これらは活動性、欲望、そして倫理的行為の追求という諸現象と緊密な関係にあるものであり、またこれらの現象が相互に持つような関係を、それらも相互に持つのである。（TV 114）

ミンコフスキーによれば、中心をもった「われわれ」の広がりは、「われ在り」から出発して、「われ持つ」を経由しつつ、「われ…に属す」に至る。これらの三つの段階はそれぞれ、「活動性」、「欲望」、そして「倫理的行為」という現象によって説明されるのだが、これら三つの段階では、固有性を持った「わたし」が、わたし以外に取り替えのきかない主体として自らを確立することを軸にすることによってのみ、それ自身を逆さにしていく様態が描かれる。

「われ在り」は、自己を休息状態に引き込みながら、かの「より大きくなること」、すなわち、われわれの活動性がその周囲に線を引く（tracer）ところの、かの特殊な球体（sphère particulière）の、いわば中心となる。（TV 117）

一つ目の段階である「われ在り」は、強い自我の定立であり、「今」と「現在」の違いで確認したような、「今」の主観的なわたしの確立である。このように、まず自己は自らの重力の中心を持たなければならない。わたしの固有性は、「進行麻痺」の患者において表現されたように、「ここ」にいるわたしにだけ向かう行為であり、このわたしは、自らの位置する場所を名指すことができないような、「ここ」にいるわたし自身であるだろう。「今-ここ」から区別される「高原」としての「現在」は、このような「今-ここ」の「われ在り」を経ることなしには構成され得ないのであり、ミンコフスキーにおいて「われ在り」は、物質的で、重力を被る「ここ」を出発点とする。

（２）生の広がり

また、ミンコフスキーの「箱入れの原理」においては、場所の名前を知らない「今-ここ」のわたしは、「休息状態」にあるとされる。自我を「休息」させつつ、「わたし」は「今-ここ」を通過し、「休息」の反対のものであるところの活動性の中心となっていく。すなわち、休息する「わたし」のみが、活動を行う「わたし」であり得るというのだが、これはどういうことだろうか。

> その存在を肯定し得る自己の周りに活動性が展開するのなら、同じ中心の周りに、さらにもう一つ別の仕方で、自己が延長するのをわれわれは見出す。（TV 117）

中心となる「われ在り」が真か偽かという問いを、ミンコフスキーは立てない。むしろ、「今」における、休息し、安らぐ主体、すなわち理性においては沈黙した主体としての「わたし」からしか、主体の転倒が始まらないことを中心に引き入れ、この物質的な重さを中心に世界を集めようとする。この「わたし」は世界を被り、次章で見るように「自閉」するような「わたし」であり、この受動的な「わたし」を軸としてしか、その周りに活動性を集め、円を描きながらあらゆるものに染み出していく「相互浸透」することができない。このようにして、活動を広げる「わたし」こそが、次の段階の「われ持つ」である。

さらにこの外側には、倫理的行為に表れるような「われ…に属す」があるという。ミンコフスキーは、倫理的行為について、次のように述べる。

> 倫理的行為は、一つの共同体があるところにおいてでなければ可能でない。というのは、われわれの行為が他者にとって有益もしくは有害であるからではなく、倫理的行為の探求のうちに「似たものたち（semblables）」とのまさしく一つの親密な融合（une fusion intime）の観念が見出されるからである。その似たものたちは、あるがままの彼らではないにしても、少なくとも、あり得るであろう、またあらなければならないであろうような彼らである。たとえ倫理的行為によって、

わたしが人間の近づき得るもっとも高い峰にに到達するにしても、わたしはそこで決して孤立しているのではなく、わたしの組みになっているものたち（mes pairs）の真中にいるようなものである。これらのものたちの姿（figures）は理念的で捉え難いが、そうであるにも関わらず、それらは「集合体« collectivité »」の理念的な原型（le prototype idéal）を構成している。（TV 119）

同心円の三番目の「われ…に属す」は、倫理的行為をする「わたし」である。ここではじめて、「今–ここ」にいる固有で作話的な「わたし」が、固有でない「われわれ」としての「わたし」と重なる。だがしかし、こうした「わたし」は休息したままの「わたし」であり、この休息を通して融合する「わたし」である。休息し、眠った「わたし」はその周りに活動性を集め、その先の、倫理的行為を行う「わたし」に向かう。本章第一節において確認したように、現在の安定した点そのものとなった「わたし」は、自我の作話的な峻厳性を眠らせている。このように、ミンコフスキーにおいては自我の休息を経た「わたし」だけが、たった一つの感情に触れながら、より遠く、果てに向かうことができる。

これらの同心円は、次のようにまとめられる。

「われ…に属す」という現象によって、自己は所有の球体（la sphère de l’avoir）を超えて拡張する。ところでこの拡張は、いまやいささか違った性格を帯びる。「われ在り」という現象は、安定する一点を固定した。それは本質的に自己中心的である。「われ持つ」という現象は、多少という属性を認める意味において、すでにこれよりも環境に対する伸張性がある。わたしは生活において多少とも「豊か」でありうる。ここでいう豊かさは、もちろん決してわたしの金庫のなかの有価証券の数のことではなく、わたしの欲望の生命力のしるしとしての、生活における獲得物のことである。しかしながら、所有は、自己に還流し、その周囲に集中するという点で、自己中心主義を完全に脱却してはいない。それは世界

（univers）との関係において、いわば収縮の因子を含み、部分的に地平を塞ぐに至る。「われ…に属す」という現象は、反対に、それがもはや世界を自己のまわりに集めるということがまったくなく、逆に、自己をこの世界のなかに入らしめるという点で、所有から相違するのである。視線はいまや世界に導かれ、次第に広がる展望をそこに発見する。（TV 120）

三番目の「われ…に属す」は、前の二つの「わたし」とは違う、より大きな差異を持っている。それは、「われ在り」と「われ持つ」が持っていた、自己中心的な属性をこれが持っていないという点である。「われ…に属す」は、「われ在り」の安定し眠り込んだ「わたし」の固定的な一点も、その固定された点に流れ込む「われ持つ」とも、全く異なる性質をもっている。それは、これがもはや固定された「自己中心的な」中心軸をもたないという点である。「われ…に属す」は、完全な「作話」が転倒するところ、すなわち自閉した自己が、内的な中心を見出すことによって、その中心を逆転させ、世界に参入していく様態である。ここにおいては、他の二つのように、もはや地平を塞ぎ、流れを集中させる必要がない。流れは逆流し、「わたし」という点が世界に流れ込む。点としての個別者は、このとき完全に眠り込み、「安らぎ」（TV 120）を感じつつ、広い景色を見るという。「広大で豊かな生（la vie, vaste et ample）が、いまやわれわれの眼前に繰り広げられる」（TV 120）。

このように、四つの原理においては、第一章において一つの全体であると定義された「生成」が、１）分裂しながら展開し、２）分化した作品を残しながら、３）相互浸透し、４）世界の全体に満たされるまでの過程を追った。最後に、このような四つの原理と、臨床の場面との関係について確認したい。

第五節　分裂性と同調性

本章の最後にミンコフスキーが、こうした四つの原理における分裂と同調の交錯を、「精

神分裂病」の治療論と接続させているので、最後に、これについて確認したい。ミンコフスキーは、上で見た「分裂性」が担う「人格的躍動」と、「同調性」が担う「現実との生きられる接触」との関係性について、ブロイラーの「精神分裂病」論との関連から、次のように述べている。

> 彼〔ブロイラー〕は同時に、これらの本質的な症状の一般的な性格を浮き彫りにするために、精神分裂病という名前を導入した。本質的な症状の探求は、まったく自然な成り行きとして、幻覚や妄想のような、目立つ精神異常のしるしを副次的なものとしたのである。（TV 65）

オイゲン・ブロイラーは、それまで「早発性痴呆」と呼ばれていたグループの患者に、「精神分裂病」という名称を付与することによって、この病を明確化しようとした[16]。この結果、目立つ症状は医師の目にとってこの病の本質から遠ざかり、副次的なものになる。では、ブロイラーにとって、本質的な症状とは何だったのだろうか。ミンコフスキーは、次のように述べる。

> ブロイラーは、分裂病者と躁うつ病におかされた患者とのあいだに存在する相違を、由来有名となった一つの言い回しでもって表現した。われわれは前者との感情的接触（contact affectif）をもはや持たないが、後者とはこの接触が維持される、と彼は言った。この短い言い回しは、重大な帰結を孕んでいた。われわれはもはや、われわれの病人たちのあり方を評価するために、彼らの呈する症状を、「学者として」記述することで満足することはできず、われわれは、われわれの全個

[16] Eugen Bleuler, *Dementia præcox oder Gruppe der Schizophrenien*, München, Minerva, 1978, p. 5.（ブロイラー『早発性痴呆または精神分裂病群』飯田真、下坂幸三、保坂秀夫、安永浩訳、東京、医学書院、1974 年。）

人を投入して、彼らの反応の総体が感性的な面で示す特殊な症状と対面しなければならない、とこの公式は言うのである。単なる観察による診断法が、このようにして洞察＝浸透（pénétration）による診断法──これの有効範囲はとりわけビンスワンガーによって浮き彫りにされた──に歩みを譲ったのである。（TV 65-66）

ミンコフスキーによれば、ブロイラーはあるグループの患者を、躁うつ病との対比で「精神分裂病」と名付けたのだが、この過程においてブロイラーがもっとも重く見たのは、患者との「感情的接触（contact affectif）」である。しかしながら、ここでいう「感情」とは、「感情（sentiment）」であり、喜怒哀楽を示す「情緒的（émotionnel）」であることや感覚器官による「感覚的（sensoriel）」であることとは「全く別の特有の心的作用」（S 96）であることに注意したい。この「感情（sentiment）」を使った接触は医師の全個人を使用するものである。この感情の交通による診断は、ビンスワンガーによって「感情診断（Gefühlsdiagnose）」[17]と呼ばれ、ミンコフスキーによって「感情、むしろ洞察＝浸透による診断（le diagnostic par sentiment, ou mieux par pénétration）」（S 95）と呼ばれるが、ミンコフスキーは、「感情」という語が「主観的（purement subjectif）」であるため、むしろ「洞察＝浸透」（pénétration）という言葉を好んでいる（S 96 注 1）。そして、この診断方法と、「理性による診断（diagnostic par raison）」（S 95）を並立させることが重要であると主張している[18]。ミンコフスキーにとって「感情」とは、われわれと環境のあいだに浸透し、貫きながらこれらを満たすものであり、生成そのものである。ブロイラーの「精神分裂病」論は、こうした一つの感情が、分裂を示す地点を見定めようとする試みから始まり、クレッチマーの「気質論」と重なる部分を

[17] Ludwig Binwanger, « Welche Aufgaben ergeben sich für die Psychiatrie aus den Fortschritten der neueren Psychologie? », *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie,* December 1924, Volume 91, Issue 1, p. 402-436.（感情診断については p. 426.）

[18] この少し後ろ（S 99）でミンコフスキーは、パスカルの「われわれが真理を知るのは、推理によるだけでなく、また心情（cœur）によってである」という言葉を引用している。（*Pensées de Blaise Pascal* , éd. collationnée sur le manuscrit autographe et publiée avec une introduction et des notes par Léon Brunschvicg, Paris, Hachette, 1904, fg 282. 〔パスカル、『パンセ I』前田陽一、由木康訳、東京、中公公論新社、2001 年、断章 282。〕）

持った[19]。

> ブロイラーは、クレッチマーの研究を再び取り上げて、分裂性と同調性の概念に到達した。気質論の固有の領域をこえて、彼はそこに生命の基本原理の表現を見た。同調性は、周囲と一致して振動することを可能にする原理を意味し、他方、分裂性は、反対に、この同じ周囲から身を離す能力を意味する。（TV 67）

分裂性と同調性、すなわち離れることと一致しながら振動することは、生命の二つの基本原理である。ブロイラーとミンコフスキーの「精神分裂病」論は、この「離れる」運動に焦点を当てて行われるが、ミンコフスキーは同時に、この分離のなかに、病的なものとは全く別の創造的側面、すなわち人格的躍動を見出していた。一方、「現実との生きられる接触」は生きる個人に調和と安らぎを与えるものであり、これは分離とともに生命にとって欠くことのできないものである。これらの二つの原理こそが、ミンコフスキーの哲学において、分割されざる二元論の「錯綜（enchevêtrement）と相互浸透（interpénétration）」（TV 70）を形成する。

ミンコフスキーは、「精神分裂病」においても、「分裂性」と「同調性」のこうした錯綜を見定めることこそが、治療に繋がると考えていた。

> ブロイラーは全ての症例に対して、「精神分裂病かそうでなければ躁うつ病（la folie maniaque-dépressive）か」を問う古い言い回しの代わりに、「どの程度まで精神分裂病でその程度まで躁うつ病か」を問うのだが、ここでなおもわれわれは、死せるものを通り抜けて、生きたもの、なおも振動する（vibrer）ものに届こうとしている。（S 94-95）

---

[19] Kretschmer, *Körperbau und Charakter*, 2e édition, Springer, Berlin, 1922. なお、気質論については第四章において取り上げる。

このように、ミンコフスキーは、「精神分裂病」において、当時医師のすべきことは、二者択一の診断名や、単なる合併を示すことではなく、どの部分が分断されており、どの部分が繋がっているかを見定めることであると考えていた。このようにして個人の内部に分裂と同調の両方を見出すことによって、治療は開始される。「人間と人間、医師と患者に張られている、言葉によっては描くことのできない弦（des cordes）を忘れてはならない。直観は、いまだに切れていない弦（cordes）を発見し、不協和の弦を調律し、切れた弦をさえ継ごうとするだろう。」（S 281）

本章では、『生きられる時間』において提示される四つの原理を分析した。われわれは、第一の「展開の原理」において、生成が自らをおのおのの点として分解するにも関わらず、われわれの側から見られるときには、自身による行為としか見られ得ないことを確認した。第二の「結合の原理」においては、人格的躍動を中心に置きながら、人格的躍動が行う生成との接触が、生成に触れながらも分離することによって創造的行為を行うことを確認した。続く第三の「浸透あるいは分有の原理」においては、現実との生きられる接触が、創造的行為としての人格的躍動に対し「安息」を与える接触であることが明らかになった。第四の原理においては、分離と結合の結節としての自我が、広い展望に目を向けるまでの過程を分析した。これら四つの原理の中心は「第三の原理」であり、これは、分裂と同調の相互浸透そのものを示している。最後に、ミンコフスキーが「分裂性」と「同調性」について、これがどのような場合においても並存し、交錯しているのであり、この様態を「理性」と「直観」の両面から把握し、調律を行うことこそが臨床で行われるべき治療であり、またそれは可能であると考えていたことを明らかにした。

次の第二部においてわれわれは、ミンコフスキーがどのような様子が「分裂性」であり、また「同調性」であると考えているかについて、また、「死せるものを通り抜けて、生きたもの、なおも振動するものに届く」こと、すなわち内奥の同調とはどのようなものであるとみなしていたのかについて分析する。

第一章　　「精神分裂病」論における自閉概念

前章までに確認したようにミンコフスキーは、「分裂性」と「同調性」を二大基本原理としており、これらを相互的な関係にあると考え、これを四つの原理のなかで明らかにしようとした。本章では、ミンコフスキーにおける「自閉」概念を分析することによって、分断された部分をミンコフスキーがいかにして見出していたかについて確認する。これから検討する「自閉」概念は、ブロイラーによって提唱されたものである。ブロイラーの自閉概念の重要性について、パルナス（Parnas）とボヴェ（Bovet）は、以下のように述べている。

> 20 世紀前半において、自閉は精神分裂病の定義の重要な構成要素と考えられていたにも関わらず、明確な定義の欠如、したがって信頼性の欠如により、主要な診断体系において削除されてきた。例えば、ＤＳＭ-Ⅲ-Ｒにおいては、自閉概念にわずかに関係のある基準とは、「平坦かつ（もしくは）不適切な感情（flat and/or inappropriate affect）」のみである[20]。

「精神分裂病」論において自閉概念は、ブロイラーによって基本症状の一つとして提示され、その後も「精神分裂病」における重要な構成要素の一つとみなされてきた。しかしながらその重要性にも関わらず、今日ではそのようには扱われていないことを、二人はここで指摘する。ではなぜ、「自閉」概念はこのような現状に陥ってしまったのだろうか。われわれは、この問題を出発点としながら、「自閉」についての議論が図らずも開いてしまったのは、人間と世界の紐帯の次元であることを本章において示したい。

---

[20] Josef Parnas and Pierre Bovet, “Autism in Schizophrenia Revisited”, C*omprehentive psychiatry*, 32(1), 1991, p. 7.

第一節ではまず、ブロイラーの「自閉」概念を分析することによって、これが当時の精神医学において初めて「精神分裂病」の患者と環境の関係性について論じた画期的なものでありながらも、定義の曖昧さという問題を孕んでいたことを示す。続く第二節では、この問題を克服するために新たに提示されたミンコフスキーの「自閉的活動性」概念を分析し、これが「行為」における自閉という、自閉概念のそれまでとは異なる側面を提示したこと、しかしながら夢想の場合にも、活動性の場合にも、結局は治癒可能であるとした点の根拠について検討する。最後に第三節では、「現実との生きられる接触の喪失」と自閉の関係性を分析し、「自閉」の問題が開いたのは、「精神分裂病」の治癒可能性のみならず、その背後にある人間と世界全体との根底的な分かち難さであることを明らかにする。

第一節　ブロイラーの自閉概念

（1）基本症状としての自閉

1911 年、ブロイラーは『早発性痴呆または精神分裂病群』において以下のように述べ、「精神分裂病（Schizophrenie）」という新たな疾患名称を提唱する。

> わたしは自分の提唱した表現の弱点を知っているが、他にこれ以上よいものを知らない。まだ変動し続けている概念の場合には、まったく適切な表現を見出すことはそもそも不可能であるようにわたしには思える。わたしは早発性痴呆（Dementia Præcox）を精神分裂病（Schizophrenie）と呼ぶ。その理由は、さまざまな精神機能の分裂が最も重要な特性の一つだからである。そのことをわたしは示したい。便宜上この言葉をわたしは単数に用いたが、この群は恐らくかなりの数の疾患を包括するものであろう[21]。

[21] Eugen Bleuler, *Dementia præcox oder Gruppe der Schizophrenien,* München, Minerva, 1978, p. 5.（ブロイラー『早発性痴呆または精神分裂病群』飯田真、下坂幸三、保坂秀夫、安永浩訳、東京、医学書院、1974 年、6-7 頁。）以下で引用する際には、原語、邦訳の順に頁数を記載し、後者を括弧内に入れる。

ブロイラーはこのように、クレペリンの「早発性痴呆（Dementia Præcox）」を退け、その概念が変動し続けているために表現の弱点があると知りながらも、「さまざまな精神機能の分裂が最も重要な特性の一つ」であるからとして、「精神分裂病（群）」という新たな名称を示す。ブロイラーがこう述べた当時、「精神分裂病」の前名称である「早発性痴呆」という疾患単位を提唱したクレペリンは未だ健在であり、彼の編纂する『精神医学教科書』は、改訂を重ねられている只中にあった。このような状況のなかで、「精神分裂病」という名称は、ブロイラー自身が示したその「弱点」についての留意にも関わらず、以後普及することとなる[22]。

ここでブロイラーは、精神分裂病を次のよう定義する。「この精神病群を特徴づけるのは、思考や感情や外界に対する関係の特異な変化であって、この病気以外では出現することはない」[23]。しかしこの定義からは、ブロイラーにおける「精神分裂病」像の特異性は浮かび上がらない。したがって、ブロイラーが「精神分裂病」をいかなるものとして考えていたのかを明らかにするために、まずわれわれは、ブロイラーが示すこの病の症状を検討してみたい。

ブロイラーは「精神分裂病」の症状について、「基本症状（Grundsymptome）」と「副次的症状（akzessorische Symptome）」を区別し、さらにそれとは別に、「一次性症状（primäre Symptome）」と「二次性症状（sekundäre Symptome）」を区別しようとする。これはどういうことなのだろうか。まず、「一次性症状」と「二次性症状」について分析していこう。これらについてブロイラーは、次のように述べている。

> われわれは「疾患過程から直接に生じてくる症状」を、「何か内外の過程に対して患者の心性が二次的に反応して生ずる症状」と区別し得る時、身体的基盤のある精神病を把握したと言い得る。（中略）早発性痴呆の今日までに記述されてい

---

[22] 渡辺哲夫は、ブロイラーが言及する「精神分裂病」の命名における不安に着目し、精神分裂病中心主義としての 20 世紀の精神病理学史と関連付けてこれを検討している。（渡辺哲夫『20 世紀精神病理学史―病者の光学で見る 20 世紀思想史の一局面』東京、筑摩書房、2005 年、85-87 頁。）
[23] Bleuler, *Dementia præcox oder Gruppe der Schizophrenien*, p. 6.（8 頁。）

るほとんど全部の症状は二次性のもので、ある意味では偶然的なものである[24]。

ブロイラーにとって一次性症状とは、このように、「疾患過程から直接に生じてくる症状」であり、これが「何か内外の過程に対して患者の心性が二次的に反応して生ずる症状」すなわち二次性症状と区別されるときには、その症状によって考えられる疾患とは、身体的基盤のある精神病であるという。ここでは、「早発性痴呆」における「今日までに記述されているほとんど全部の症状は二次性のもの」であると述べているため、この疾患の一次性の症状を突き止めあぐねていることが分かる。

続けてブロイラーは次のように述べる。

> われわれは分裂病性脳障害の一次性症状として確実なものは何も知らない。なるほどわれわれは一群の単純な諸現象を、それらしきものとして数えることはできる。その中でまず、連合障害（Assoziationsstörungen）の一部がある。（中略）われわれは連合障害を、それが連合の親和性の低下あるいは平坦化という意味である限り、一次性症状と考える[25]。

ブロイラーはここで、「確実なものは何も知らない」としながらも、精神分裂病の一次性症状とは「連合障害」であると明言する。こうして、これが妥当するものかどうかは置くとして、この記述においてブロイラーが「精神分裂病」を、「身体的基盤ある精神病」、すなわち「身体的病変に直接基因する心理的異常」[26]とみなしていることが明らかとなる。

ではこれに対し、もう一方の基本症状と副次的症状との区別とはいかなるものなのだろうか。木村敏は、ブロイラーの一次性症状と二次性症状との区別が、「精神病理学的理論の見

---

[24] *Ibid.*, p. 284-285.（391-392 頁。）
[25] *Ibid.*, p. 285-286.（393 頁。）
[26] 木村敏「精神病の症状論」、横井晋、佐藤壱三、宮本忠雄編『精神分裂病』所収、東京、医学書院、1975 年、110 頁。

地」[27]からなされたものであるとしているが、これに対し、「基本症状」と「副次的症状」との区別については、「純粋に症状論的なもの」[28]であると述べている。木村によれば、後者の「副次的症状」とは、「病気の全過程にわたって存在することも、経過のある一時期だけに限られることもある」症状であり、幻覚や妄想などがこれに含まれるとされる。また、「基本症状」とは、「どの時期にもどの症例においても存在する」症状であり、精神分裂病に「特徴的なもの」[29]であるという。では、ブロイラー自身は、精神分裂病の「基本症状」について、どのように考えていたのだろうか。ブロイラーは、次のように述べている。

> 基本症状は連想と情動性の分裂病性障害と、自己のいだく幻想を現実よりも上位におき、現実から自己を隔絶する傾向（自閉 Autismes）とによって形成される。さらに他の疾患の場合には大きな役割を演じている症状、たとえば知覚、見当識、記憶力などの一次性障害が欠如していることを加えることができる[30]。

このようにブロイラーは、精神分裂病の基本症状が、「連想と情動性」の障害、また、「現実から自己を隔絶する傾向」、すなわち「自閉（Autismes）」、そして「知識、見当識、記憶力などの一次性障害の欠如」などから成ることを明らかにしている。このようにして、ブロイラーは自閉概念を提示するのだが、これが精神病理学の歴史において、非常に重要なものであったことを以下で確認したい。

（２）早発性痴呆における自閉

1911 年に出版されたブロイラーの『早発性痴呆または精神分裂病群』から二年後の 1913 年、クレペリンは『精神医学教科書 第８版 第３巻』を編纂する。これによるとクレペリン

---

[27] 木村敏「分裂病の診断をめぐって」、『自己・時間・あいだ』所収、東京、筑摩書房、2006 年、336 頁。
[28] 同上、335 頁。
[29] Bleuler, *Dementia præcox oder Gruppe der Schizophrenien*, p. 9.（13 頁。）
[30] *Ibid*., p. 10.（14 頁。）

は、「早発性痴呆」について、次のように定義している。

> 早発性痴呆というのは、一連の諸状態から成り、その共通の特徴をなすのは、精神的な人格の内部の関係が独特の破壊を受け、感情生活と意思の損傷が主をなすようなものである[31]。

このように、クレペリンは「早発性痴呆」を「精神的な人格の内部の関係」の「破壊」から規定する。クレペリンは、この破壊によって「感情生活と意思」が損傷を受けることが、「早発性痴呆」を構成するとみなすのである。

さらにクレペリンは、上のように記した後、次のように述べ、早発性痴呆の状態像を列挙しようとする。クレペリンが列挙する像は、まず項目が立てられ、次にその項目についての短い論述がなされる形で展開する。項目のうち精神症状とされるものは、「把握力」、「注意」、「妄覚」、「妄聴」、「思考化声」、「思考被影響」、「妄視」、「匂いと味」などについての記述が 71 項、次に「身体症状」とされるものについては、「頭痛」、「瞳孔」、「腱反射」、「筋運動障害」、「発作」、「歪顔」、「血管運動障害」、「血圧」などについての記述が 17 項あげられている[32]。ここにおいて着目したいのは、精神症状の項目の一つとしてブロイラーの「自閉」があげられている点である。この版は 1913 年に刊行されているために、クレペリンは 1911 年のブロイラーの著作を参照し、「精神症状」の項目に「自閉」を組み込むことが可能であったと考えられる。では、クレペリンは精神症状の一つとしての、「自閉」について、どのように記述していたのだろうか。

まず、自閉以外の精神症状の項目について、クレペリンがどのように述べているかについて確認しよう。クレペリンは次のように述べる。「ある患者は歩くときに足を『サラダの中

---

[31] Emil Kraepelin, *Psychiatrie : ein kurzes Lehrbuch für Studirende und Ärzte*, 8., vollständig umgearb. Aufl., Bd. 3, T. 2, Leipzig, J. A. Barth, 1923, p. 668.（クレペリン『精神分裂病』西丸四方、西丸甫夫訳、東京、みすず書房、1985 年、5 頁。）

[32] 野間俊一は、このようなクレペリンの項目列挙について、「百科事典的」であり、「日常から離れた自然科学的客観主義」の表れであると指摘している。（野間俊一「生の隔たり」、中村雄二郎、木村敏監修『講座 生命 vol.4, 2000』名古屋、河合文化教育研究所、2000 年、204 頁参照。）

をコウノトリが歩く』ように高く上げる」[33]、「患者はいつも同じ身振りをする」[34]、「ある患者は、『わたしは日付を知らない』というところを『わたしは日付について全然頭がない』という」[35]。これらから、自閉以外の項目についての記述において、クレペリンが自己を患者に対する観察者として位置付けていることが分かる。

これに対し、「自閉」の項目については、次のように述べる。「手を差し出しても拒否され」、「答えてくれず」、「話しかけても目をあげない」[36]。このように、これら「自閉」に関する記述においてクレペリンは、もはや一方的な観察者ではなく、患者に語りかけ、その答えを待つ者として表れている。患者の様子は、ここで、クレペリンの言動に対する反応としてのみ記述されるのである。したがってこの項目においては、クレペリン自身も患者の反応のなかに巻き込まれていることが分かるだろう。このように、クレペリンの『精神医学教科書』における「精神症状」の記述には、「自閉」とその他の項目とのあいだで、記述の立場についての明確な差異がある。さらにクレペリンは「自閉」について、次のように述べる。「ごく一般的な経験によると、早発性痴呆の患者は多少とも疎通性がなく外界に対して自己を遮断する」[37]。ここにも、他と明らかに差異のある記述、すなわち患者が対している「外界」と、クレペリン自身を同一化している視点があることが分かる。しかしながら、この項目の特異性については、言及するには至らなかった[38]。

一方、これから見るように、ブロイラーは自身が基本症状とする「自閉」について、問題を提起している。われわれはこうした視点こそが、ミンコフスキーに引き継がれ、この概念と「精神分裂病」という病の仕組みについての考察が深められていくとみなす。したがってブロイラーの記述に戻り、「自閉」概念の問題を明らかにしたい。

---

[33] Kraepelin, *Psychiatrie,* p. 716.（47 頁。）
[34] *Ibid*., p. 713.（45 頁。）
[35] *Ibid*., p. 743.（73 頁。）
[36] *Ibid*., p. 723.（51 頁。）
[37] *Ibid*., p. 723.（51 頁。）
[38] 加藤敏は、クレペリンに精神病理学者と自然科学者の二つの顔があったことを指摘し、「入院中心」から「外来中心」へと変化しつつある現代の治療場面の視点から、第三版以前のクレペリンの初期考察を再評価しようと試みているが、本論では、1911 年のブロイラーの著作との比較を行うため、第 8 版を使用した。（加藤敏『統合失調症の語りの傾聴―EBM から NBM へ』東京、金剛出版、2005 年参照。）

（3）自閉と全体

ブロイラーに戻ろう。ブロイラーは「自閉」について、次のように述べている。

> もはや外界との交流の全く無くなった最も重症な精神分裂病者は自己のためだけの世界に生きている。彼らは叶えられたと思っている願望や迫害されているという苦悩を携えて繭のなかに閉じこもり、外界との接触をできる限り制限している。内面生活の相対的、絶対的優位を伴う現実からの遊離のことをわれわれは自閉と呼ぶのである[39]。

このように、「最も重症な精神分裂病者」が、自己の繭のなかに閉じこもり、「内面生活の相対的、絶対的優位を伴う現実からの遊離」することこそを、ブロイラーは「自閉」と呼ぶ。したがって、ブロイラーは「自閉」を「精神分裂病」の最も基礎的な症状であると考えている点が、ここでも強調されているだろう。しかしこのような強調にも関わらず、「自閉」は、ブロイラー自身によって「精神分裂病」に特有のものではないとされ、「診断に利用できない」とされてしまうのである。すなわちブロイラーは、「自閉はヒステリーの夢幻状態においても現れる」し、「ある関連においては進行麻痺の妄想概念も占めうる」ため、「診断には利用できない」[40]と述べ、さらには、「現実に顧慮を払わず、感情の赴くところに従う、正常な自閉的思考」[41]もあるとし、その例として子供の遊びやお伽話、伝承、夢や夢想をあげるのである。このように、ブロイラーによって提示された「自閉」概念は、「精神分裂病」の基本症状であり、「精神分裂病」を特徴づける代表的な症状でありながら、他の正常な思考においても現れるために、診断には利用できないとブロイラー自身によって判断されるのである。

---

[39] *Ibid.,* p. 52.（73 頁。）
[40] *Ibid.*, p. 243.（344 頁。）
[41] *Ibid.*, p. 305.（418 頁。）

こうした点から、ブロイラーの「自閉」概念は、混乱が多いものであったことが分かるのだが、ではなぜ、「自閉」概念がこのように混乱の多いものであるにも関わらず、精神病理学において重要な転換点を記すことになったのだろうか。これについて明らかにするために、もう一度ブロイラーが「自閉」をどのようなものとしてみなしていたかについて確認したい。

すでに見たように、第一にブロイラーは、精神分裂病を一次性症状と二次性症状、さらに基本症状と副次的症状とに区別したが、これによると「自閉」は、症状学的には「精神分裂病」に特徴的なものであるから、基本症状に含められるのであり、「精神病理学的理論の見地」からは、連合障害以外はすべて二次性症状とされるため、二次性症状に含められた。すなわち、ブロイラーの「自閉」とは、症状としては「精神分裂病」に特徴的なものであるが、理論的には、連合障害に続く二次的なものである。第二に、上で述べたように、ブロイラーは自閉を「精神分裂病」における特徴的な症状であると述べていたにも関わらず、「精神分裂病」以外においても見られるため、これを診断に利用することができないとした。このような「自閉」をめぐるブロイラーの定義の複雑さは、どこから来ているのだろうか。われわれはここに、症状としての「自閉」をめぐる、根本的な問題が露呈しているとみなす。

すなわち、「自閉」がいかなる場合でも客観的に、「自閉的である」ということのできる症状であるといえるかについて、もう一度問わなければならないのである。こうした「自閉」における、部分としての症状と、それが連帯している「人格」全体、さらにはこの背景にある、ある人間と世界との「根底的な連帯」という考え方は、ミンコフスキーやブロイラーだけではなく、後の多くの精神医学者たちの指摘にも現れていると考えられる。

これについて、確認してみよう。症状としての自閉をめぐる問題について、精神医学者である小川豊昭は、次のように述べている。

> このように症状として提出された「自閉」は果たして症状といえるのだろうか。というのは、症状とは何か隠れたものの印であり、その隠れたものとは疾患であり、疾患と症状とは混同されてはならない。（中略）自閉という現象は、それ自

体へのみ回付される現象学の現象として価値をもち、人間全体の表現になっているということである[42]。

ここで小川は、当初から症状として提出された「自閉」が、そもそも症状であると言えるかを問おうとし、さらにある現象と「人間全体」が結合していることを指摘している。加えて、次のように述べる。

ブロイラーは、その当時の精神医学の疾病論や心理学の影響の下で、自閉を症状として提出したが、その実、彼は現象としての自閉をみていたといえる[43]。

このように小川は、「自閉」の裏には「隠れたもの」として一対一で対応するような「疾患」があり、それが「自閉」という印によって示されるという考えを否定し、「自閉」そのものが現象であり、人間という全体の現れであるとする。しかし、これはどういうことだろうか。この問いについての答えを急ぐ前に、他の精神医学者たちの見解も確認しなければならないだろう。

フランスの精神医学者であるタトシアンは、上で小川が言及した症状と現れについて、次のような見解を示している。

---

[42] 小川豊昭、「自閉」、木村敏、松下正明、岸本英爾編、『精神分裂病—基礎と臨床』所収、東京、朝倉書店、1990 年、395 頁。

[43] 同上、395 頁。また、小川がここで述べる「当時の影響」とは、ブロイラーの「自閉」が「フロイトが自体愛と呼んだものとほぼ同義」であり、ジャネが「否定形で現実機能の喪失と名づけたものを肯定形で述べたもの」である点を指す。ブロイラーは、フロイトの「自体愛（Autoerotismus）」がリビドーやエロティシズムなどはるかに広い概念につながっており、この言葉をここで用いる事は多くの誤解を招くことになるため、また、ジャネの「現実機能の喪失」は、現実感が精神分裂病に全面的に欠落しているわけではないため、「自閉」という概念を提示した。（Bleuler, *Dementia præcox oder Gruppe der Schizophrenien,* p. 52.〔73 頁〕参照。）さらに、このブロイラーの「自閉」概念の着想は、フロイトが「早発性痴呆」の包括的理解として「自体愛への撤退」という考えを述べたことを、ブロイラーがユングから伝えられたことによって得たとされる。後にフロイトは自体愛論をナルシシズム論へと展開していったのだが、ユングはフロイトのリビドー概念を脱性化させて「内向（Introversion）」という概念を提出したとされる。またジャネの概念は、後にミンコフスキーによって「現実との生命的接触の喪失」としてとらえ直される。（小川、前掲論文、394 頁参照。）

もし自閉が一種の症状、すなわち、人間存在ではなく、身体的ないし心理的な装置における単なる一過程の論理的指標あるいは因果関係の結果であるとすれば、自閉には特異性は少なく、役に立たないし、臨床医は「精神分裂病」という語の同義語を抽出するにすぎないことになる。しかし自閉は同時に現象でもある。たとえ自閉が精神分裂病の一側面にすぎないとしても、自閉がそこに含まれている全体性を示している限りにおいて、これは現象である[44]。

このようにタトシアンは、ブロイラーが「自閉」を診断には役立たないとした点を確認しているが、ここに、それが症状とみなされる限りでは、という留保を付そうとする。タトシアンも小川と同様に、「自閉」を症状ではなく現象としてみなすことこそが重要であるとするのである。さらにタトシアンは、「現象としての自閉は確かにおのれ自体しか示さず、おのれの傍らやその背後にあるものを示さない。しかしそれこそをまさに見るべきなのである」[45]と述べ、小川と同様に、「自閉」はその背後にある疾患を示すための印ではなく、それ自身において全体の現れであるという点を強調する。

さらに木村敏もまた、次のように述べている。

精神病の「症状」とは、もはや不可知の「疾患」が間接的に自らを告知している「媒介」でも、「原因的」な基礎的事態の表出でもなく、また現存在の自己表現に対して「隠蔽的性格」を有するものでもない。「症状」はそれ自体、現象として精神病が自らを端的に示すその示し方を意味することになる[46]。

ここで木村敏は、「自閉」のみならず、精神病の症状全てについて、隠蔽されている疾患を間接的に示すものではなく、それ自体で現象として精神病が自らを示す「示し方」であるみ

---

[44] Arthur Tatossian, *Phénoménologie des psychoses,* Paris, Masson, 1979, p. 39.
[45] *Ibid*., p. 39.（40 頁。）
[46] 木村、前掲論文（1975 年）、106 頁。

なしている。

このように、「自閉」とは隠れたものの症状であるというよりもむしろ、生きる主体の全体の現れであり、この背後に現れないものがあるというよりも、すでに関係性の変化が与えられ、現れているという視点の上に成り立っているものなのではないだろうか。そして、ここから帰結するのは、現れと人間全体、人間と世界全体の紐帯が存在するということなのではないだろうか。すなわちブロイラーによって提示された「自閉」は、症状としての利用とはまた別の次元を含み得る可能性が示唆されており、これがミンコフスキーにおいて深められることになるのである。

第二節　自閉的活動性

（1）自閉における夢や夢想

次に、ミンコフスキーの「自閉」についての記述を確認したい。ミンコフスキーは、1927年の著作『精神分裂病』において、ブロイラーの「自閉」概念について論じながら、次のようにその問題点を指摘している。

> このようにして自閉とは内省的傾向（*intériorisation*）の同義語となり、正常心理における夢や夢想は精神分裂病者の存在様態の原型となる。両者を比較するという考えは自閉という概念の歴史からも説明できる。フロイトが夢の分析において表明した思想が精神分裂病者の心理の研究の出発点となったからである。（中略）しかし次第に、このような見方があまりに一方的であることが分かってきた。第一にこのような説明は大きな誤解、すなわち精神分裂病者はその自由意志によって外界から遠ざかるかのような考えに導きやすい。しかし、もちろん精神分裂病者が病気になるのは不可抗力によるのであることは言うまでもない。〔しかしまた、〕この見方は問題の一面しか見ていない。実際には、精神分裂病者は受動的で、自己に沈潜し、目覚めながら夢想にひたっている者のみではない。彼らもま

た行動する。（S 172）

ミンコフスキーはまず、ブロイラーの「自閉」概念について、これがフロイトの考察を出発点としながら提唱された歴史と関係すること、また自閉と「内省的傾向（intériorisation）」が同義語となってしまった点について確認する[47]。さらに、そのような「自閉」と「内省的傾向」の同一視について、次の二つの問題点を指摘する。第一に、「精神分裂病」患者が不可抗力によってその状態にあるにも関わらず、「自閉」という概念は、あたかもその患者が自由意志によってそのような状態にあるように思わせる点である。第二に、「自閉」という言葉からは、何もせず、無為にただ自己に沈潜するような患者の状態のみが強調され、患者の「行為（acte）」の側面が反映されていないという点である。

さらに、上の引用の少し後にミンコフスキーは次のように述べ、ブロイラーの「自閉」について自身が指摘した問題点を克服しようとする。

> ここで、自閉という概念は自閉的感情および自閉的思考だけでは十分解決し得ず、さらに自閉的な活動性、原初的に自閉的な活動性をも考える必要があることが分かる。むしろ自閉的活動性（activité autiste）こそすべての精神分裂病の主要な症状だともいえる。これを問題にしなかったために、人々は自閉性を内省的傾向、受動的夢想の状態、複合観念や空想からなる内的生活への沈潜と同一視したのである。（S 176, 177）

このように、ミンコフスキーはブロイラーの「自閉」概念を、「活動性（activité）」、すなわち身体的行為の側面から補足する「自閉的活動性（activité autiste）」こそを、「精神分裂病」の主要な症状として捉えようとする。これによってミンコフスキーは、創造において必要となる「内省的傾向、受動的夢想の状態、複合観念や空想よりなる内的生活への沈潜」と、病

[47] 小川、前掲論文、394 頁。

的な「自閉」を区別することをとまずは試みるのである。

（2）行為における自閉

では、ミンコフスキーが考える「自閉的活動性」とは、どのようなものだったのだろうか。ミンコフスキーは「自閉的活動性」について、次のようにある勤め人の妻の例をあげる。

> 質素な家具しかない小さな家に、勤め人の家族が住んでいる。父親の給料は日々の生活にやっとである。母親はある日突然、以前子供たちが受けていた音楽のレッスンを続けてやるためにピアノを買いたいと主張する。父親は家計のことを持ち出して反対したが無駄である。彼女は裁縫の仕事を見つけ、幾夜も徹夜する。彼女はピアノのことは何も言わなくなったが、父親はある日勤め先から帰ってきて部屋に立派な新しいピアノが置かれているのを見て驚く。ピアノは他の道具や、彼らの生活とは全く調和せず、外国人のように、死人のように見える。このピアノを弾くのは最近精神分裂病の激しい発作から回復した長男である。彼は病気になる前は才能のある音楽家であったが、今では夜中でもピアノを弾きたがり、そのため隣人から文句を言われる。（S 174）

このように、このある勤め人の妻は、苦しい家計事情にも関わらず、ピアノを購入したという。しかしこの例を見ると、妻には何ら病的な点は見当たらない。しかしミンコフスキーは、この妻の行動の中に「自閉的活動性」を読み取るのである。

> このような条件においてピアノを買うという行為は、彼女の環境に対する特徴を明らかにする。しかし彼女の行為は決して内向的ではない。彼女は貴人や王女の出入りする立派な部屋にピアノを持っていると空想するだけでは満足しない。また彼女がピアノを弾くような常同的運動を繰り返すというわけでもない。また彼

女の願望が象徴的意味を有し、一定の複合観念、例えば以前の音楽教師に対する抑圧された感情によって動機づけられている考える必要もない。彼女のピアノが欲しいという願望には少しも不可解な点も病的な点もない。彼女は欲しいと思ったものを手に入れた。われわれはほとんど彼女の忍耐を賞賛したくなる位である。それにも関わらずその行為には何かが欠けている。いわば生が欠けている。ピアノは彼女の境遇においては邪魔者でしかなく、粗末な部屋とは全然調和しない。かくも粘り強くなされた行為には明日（lendemain）がなく、その過度の硬さのために死に瀕している。（S 175）

このように、ミンコフスキーもまた、この妻の「ピアノが欲しいという願望には少しも不可解な点も病的な点もない」ことを認めている。むしろ「われわれはほとんど彼女の忍耐を賞賛したくなる位である」とすら述べる。また、ミンコフスキーは彼女の願望を精神分析的に解釈する必要はないとわざわざ注意を促している。それにも関わらず、やはり彼女の「行為」には、何かが欠けているとミンコフスキーは分析するのである。では、彼女の行為には、何が欠けているというのだろうか。ミンコフスキーは、彼女においては、行為のなかにあるべき「生（vie)」が欠けていると考える。そして、これによって帰結としてもたらされるのは、「明日」のなさであり、「過度の硬さ」であるとする。

ここでさらに、ミンコフスキーがあげるもうひとつの「自閉的活動性」の例を参照したい。この妻の例に加えてミンコフスキーがあげるのは、ある 32 歳の男性小学校教師の患者の例である。ミンコフスキーは次のように述べる。

患者はアメリカでの二名の無政府主義者の死刑の判決に対して抗議しようとした。この判決は当時大きな反響を呼び、多くの国民がこれに反対の意を表明した。彼は抗議文を書き、自分の姓名を明記し、アメリカの大使館にも出かけて、抗議文を大使に手交することを依頼した。そのため、彼は意外にも警察に連行され、

彼の上司からも叱責された。この小学校教師の意見そのものは決して病的ではない。彼の意見は社会のある一部分の人々のそれと全く一致している。しかしこの意見に基づいて彼の取った行動は全く現実から離れており、著しく「自閉的」であると言わなければならない。（S 176）

この例においても、ミンコフスキーはこの「精神分裂病」である男性の意見を「決して病的ではない」ことを強調している点に注目したい。この患者と同意見であった者は当時のフランス社会において決して珍しいものではなかったはずである。それにも関わらず、この患者の「行為」にもまた、上の妻の例と同様に、「過度に硬化」し、「明日」が欠けている点があるとされるのである。したがって、このような二つの例から、「自閉的活動性」が、決して一見して非常に奇異であったり、病的なものではないことが分かる。それにも関わらず、これらの活動はどこか「何かが欠けた」ような感覚を相手に感じさせるようなものである。

さらに『精神分裂病』における「自閉的活動性」についての、ミンコフスキーの言葉を続けよう。ミンコフスキーは次のように述べている。

ここで「活動性（activité）」とはわれわれにとって何を意味するかを明らかにする必要がある。われわれはもちろんそれを随意的運動とは解しない。この概念は運動生理学においては基礎的な概念であるが、実は生理学の研究のために抽象化された産物に過ぎない。（中略）実際の生活ではわれわれは単に足をあげるためにのみ足をあげ、腕を曲げるためにのみ腕を曲げたりするような無意味な行動を意図することは決してない。また活動性とは伝統的心理学の意味での孤立した意志を指すのでもない。（中略）いま問題となるのは何よりも目的および行動が互いに関係する仕方、目的が具体化される方法であり、行動が機宜（opportunité）を得ていること、その遂行にあたっての柔軟性などである。一言にして言えばわれわれの研究の対象は生きた動力学における人格全体である。（S 180-181）

このようにミンコフスキーは、活動性と意志の問題とは、まったく関係を持たないとしている。ミンコフスキーは、活動性において問題となるのは、意志といったものではなく、「目的及び行動が互いに関係する仕方」であり、「目的が具体化される方法」、「行動が機宜を得ていること」、さらに「その遂行にあたっての柔軟性」であるとするのである。つまり、目的そのものではなく目的と達成方法の不調和が問題となるのだが、この視点から、パルナスとボヴェ、さらにビンスワンガーは、「自閉的活動性」についてさらなる分析を行っているので、これについて確認してみよう。

（３）自閉における境界

パルナスとボヴェは、ミンコフスキーの自閉的活動性における目的や方法の問題について、次のように述べている。

> ミンコフスキーは「自閉的活動性」という言葉を生み出したが、この概念の特徴はその内容にではなく、この内容が実行されるその方法にある。この自閉的活動性の様態は、不適応、状況の文脈との不和、適切な結果の欠如から特徴づけられる。（中略）〔これらは〕現実との生きられる接触の喪失というミンコフフスキーの自閉概念の結果から起こるものであり、言い換えれば、環境との調和の欠如（lack of attunement with the environment）である[48]。

このように、パルナスとボヴェは、自閉的活動性について、実行される方法にその特徴を見出す。この点については、上述のミンコフスキーの論述と一致しているといえる。しかし彼らは、さらに、適切な結果の欠如もまた、「自閉的活動性」を特徴づける重要な要素であると指摘するのである。「自閉的活動性」においては、その内容や目的においては何ら自閉的

[48] Josef Parnas and Pierre Bovet, *op. cit*., p. 14.

な面はないが、その目的に向かって実行される際の方法とその結果にこそ、自閉的な特徴が現れるとするのである。例えば、上述したピアノを購入した妻の例ならば、「ピアノを買うこと」という目的には何ら病的な点はなかった。しかし、ピアノを買うための方法とその結果とが合わさることによって、この行為は自閉的なものとなるという。

これに関して、ビンスワンガーは「自閉的活動性」によって生み出される事物の観点から考察を行っている。ビンスワンガーは、『思い上がり、ひねくれ、わざとらしさ』において、次のように述べる。

> 自閉的活動における不適応、矛盾、異様さを、ミンコフスキーは行為の成果ということに関連して特に明瞭に示している。夫の忠告にも関わらず、子どものために美しく、高価で高いピアノを購入したある職員の妻に関しては次のように述べられている。「ピアノがそこにあった。それは残りの家具とも、家庭生活の全体とも合わなかった。それはまさしく異物として、明日のない死んだものとしてそこにあった。」ここで著者〔ミンコフスキー〕は正当にも、ノエシス的領域からノエマ的領域に入り込んでいる。すなわち、行為の矛盾性から事物と合わないという矛盾、明日のない行為（*acte* sans lendemain）から明日のない事物（*chose* sans lendemain）が生じている。というのもまさに両者の領域はお互いに分離不可能であり、また叙述が明瞭性と正当性を獲得するのは、それが事物とか「世界」に依拠している場合のみであるからである[49]。

このように、ビンスワンガーは、自閉的活動性における成果、すなわち結果とは、明日のない行為から明日のない事物が生じることであるとし、これに特に注目している。ここで、ビンスワンガーが「ノエシス的領域からノエマ的領域に入り込む」とするのは、自閉的活動性

[49] Ludwig Binswanger, *Drei Formen missgluckten Daseins : Verstiegenheit, Verschrobenheit Manieriertheit*, p. 15-16.（24 頁。）

においては、その「願望」や「考え」[50]、また目的には何ら奇妙な点がないにも関わらず、それが実行され、結果として事物の領域に入り込んだ際に、すでに自閉的となっているということである。ビンスワンガーは、行為と事物の領域は「互いに分離不可能」であると考え、ミンコフスキーの提示した「自閉的活動性」の意義を、行為と事物の結びつきを明らかにしている点において評価しようとするのである。

では、ミンコフスキー自身は「活動性」におけるこのような行為と事物の結びつきについて、どのように考えていたのだろうか。ミンコフスキーは、次のように述べている。

> 行動する人間は本来外部に存する目的に向かって努力し、仕事の完成とともに彼は自身を超越する。かくして人間はいわば外界の一部を切り取って、これを自己の内に包摂するのである。人間は目的の設定とともに、その目的と一体となり、また目的達成のために彼は使用する外部の力とも一体となる。この場合、「自己」と「非-自己」との境界はもはや身体の表面ではなく、むしろこの表面を超え出る。（中略）しかし、この境界線も、やはり硬く不透明となり、人格をつつむ鎧のようなものに変化し得るのであり、こうして現実との接触の喪失が来るのである。（S 178-179）

ここでミンコフスキーは、目的が方法を経由し、その結果に向かう過程において、われわれは外部と「一体」となるとしていることに注目したい。すなわちミンコフスキーにとって何かを成し、実行することとは、自身が「自身を越え出る」ことであるとされるのである。ミンコフスキーによれば、このとき、われわれは境界線において、まさに外部の空間と「一体」となり、混ぜ合わせられる。しかし、この境界線が鎧のように硬化し、外部との混交を拒んだときには、「現実との接触の喪失（perte de contact vital avec la réalité）」に至るのである。すなわちミンコフスキーは、「行為」を実行する際にこれが外部の時間や空間と混交せず、

[50] 小川豊昭、前掲論文、396 頁。

その侵入を拒んだ際には、行為は自閉的となり、完成した仕事、すなわち結果もまた、自閉的となると考える。したがって、ミンコフスキーにおける「自閉的活動性」とは、行為や、その行為によって生み出された事物が環界と交流しなくなった状態を指したものであることが分かる。

このように、本論第二節では、ミンコフスキーの「自閉的活動性」概念について分析してきた。ミンコフスキーの「自閉的活動性」とは、ブロイラーの自閉概念が、「精神分裂病」以外のものにも当てはまることや、「精神分裂病」患者の活動的側面を含有できないことを克服するために考え出されたものであった。しかしながら、これらミンコフスキーによって「分裂」の例としてあげられたのは、夢想的な「自閉」であろうと、活動における「自閉」であろうと、ある程度までしか「病的」ではないという点なのではないだろうか。ミンコフスキーは、夢想と区別した「自閉」において、活動の「自閉」をあげるのだが、ここから帰結するのは、どちらの場合においてもやはり「分裂」した部分の傍らには、いまだに切れていない「弦（codes)」が無数にあるということであり、ミンコフスキーがどのような場合においても「弦」を調整し、繋ぎ直せるとした主張の正当性なのではないだろうか。われわれはここで、もう少しこの結論を急がず、ミンコフスキーが提示した「精神分裂病」の基本障害としての「生きられる接触」、これと夢想としての「自閉」、行為における「自閉」の関係性について検討したい。

第三節　現実との生きられる接触の喪失と回復

（1）制御の喪失

ミンコフスキーは、こうしてブロイラーの「自閉」概念を「精神分裂病」における「基本障害（trouble générateurs)」であると考え、「現実との生きられる接触の喪失」という新たな概念を提示する。これについて、詳しく見てみよう。「基本障害」とは、ミンコフスキーが精神の病を分析する際の重要な概念となるものであり、これについてミンコフスキーは、次のように述べている。

> 彼〔ブロイラー〕は現実との接触喪失（自閉 autisme）を説くけれども、この現実との接触喪失を、それから他のすべての症状を導き出すことを可能にする基本障害（trouble générateur）とは見ていない。ブロイラーにおいては、現実との生きられる接触は、いまだすべての精神機能の上位に立つ、生の本質的制御要因（un facteur régulateur essentiel de la vie）とは考えられていない。（S 109）

ここでミンコフスキーはブロイラーの「自閉」を、「接触喪失」と言い換え、これを「精神分裂病」の「基本障害」であり、かつ「生の本質的制御」の「喪失」であるとする。では、基本障害という概念は、ミンコフスキーにおいて、どのようなものだったのだろうか。また、なぜここでミンコフスキーは、「自閉」ではなく、新たに「現実との生きられる接触の喪失」という概念を提示しようとしたのだろうか。

基本障害について、ミンコフスキーは次のように述べている。

> この基本障害は通常の臨床症状、例えば幻覚、妄想、緊張病性症状、興奮状態、抑うつ状態などのなかに求めることはできない。これらの諸症状は不定であり、早発性痴呆に特有のものではないからである。これらの諸症状にとって共通の基礎であるべき基本障害は、当然これらの諸症状のなかにはあり得ない。それはこれらの諸症状の外に、すなわち別の平面において求められなければならない。（中略）一個または数個の機能が侵されるのではなく、障害はむしろ機能と機能の間、すなわち間質（espace interstitiel）に存するといい得るだろう。（S 102）

このように、基本障害とは「興奮状態」、「抑うつ状態」などの諸症状の「基礎」であり、これらの個々の症状とは別の平面、すなわちこれらの「間」にあるものであるとされる。そして、前の引用にあるように、ミンコフスキーは、ブロイラーが機能と機能の間の「統御

（régulateur）」（S 109）の平面に着目しなかった問題点を指摘する。

（２）全体の変容の表現

さらに、ここまで分析してきた『精神分裂病』の三年後に出版された『生きられる時間』においてミンコフスキーは、この基本障害についての考察を深めていく。ミンコフスキーは『生きられる時間』において、次のように述べる。

> 精神医学においては、症状の背後に、症候群の背後には尚更、いつでも生きた人格全体（*personnalité vivante* tout entière）が存在する。そして症状を通じてこの生きた人格性にまで浸透し、認識のただ一つの努力によってこの存在様式全体をとらえる必要はきわめて緊要なものであって、病的な領域においても正常な領域においても、それを避けることは不可能であろう。（TV 208-209）

このように、ミンコフスキーは、症状を客観的に分析することでは限界に突き当たるとし、「生きた人格性全体」から患者の精神状態を考えようとする。ミンコフスキーは個々の部分としての症状をいくら並べ立てても、決して患者全体にはならないと考えるのである。こうして、ミンコフスキーは「人格全体に特徴的な深い変容の表現（*expression d'une modification profonde et caractéristique de la personnalité humaine tout entière*）」（TV 211）としての基本障害という概念を提示しようとする。

では、なぜミンコフスキーは「精神分裂病」の「基本障害」を「自閉」とせず、新たに「現実と生きられる接触の喪失」と呼んだのだろうか。これについてミンコフスキーは、『精神分裂病』において、次のように述べている。

> 「現実」は決して「外界」の同義語ではなく、したがって現実との接触の喪失を内省的傾向と同一視するのは誤りであると思われる。（TV 208-209）

ここでミンコフスキーは、「現実」との接触を喪失することと、「外界」との接触を喪失することとを、区別して考えようとする。すなわち、ブロイラーが述べる外界からの「自閉」と、ミンコフスキーが考える現実との接触の喪失とは、異なるものであるという。われわれは、しばしば「内省的傾向」によって外界との接触を断ち、自閉するが、ミンコフスキーによれば、これは現実との接触を失ったことにはならない。こうしてミンコフスキーは、自閉における内省的傾向と、病的な自閉とのあいだに線を引き、前者をわれわれの生活において必要不可欠なものとして救い出そうとする。

このように、ミンコフスキーは基本障害としての現実との生きられる接触という概念を新たな提示することによって、ブロイラーの自閉から内省的傾向や幼児の遊びや夢想といった、精神分裂病以外において現れる「正常」な自閉を救おうとする一方で、自閉的活動性という概念を提示することによって、ブロイラーの自閉が含まなかった行為における自閉という領野について語ろうとした。

さらに、こうしたミンコフスキーの指摘する行動における自閉について、小川は次のように述べている。

> Minkowski は、活動の原因となっている願望や考えは現実的で社会的にも受け入れられるものであるのに、その活動は自閉的である場合があることを示している。彼の患者の技師や、病的合理主義である教師は、いずれもまったく正常なことを望んでいる。（中略）しかし、彼らがそれを実行に移したその行為は、まったく他者からの期待から遊離していて、しかもその行為が自閉であるのは、決して彼らの心的体験から二次的にそうなっているのではなかった[51]。

ここで小川は、ミンコフスキーの「自閉的活動性」の原因となる願望や考えが現実的なもの

[51] 小川豊昭、前掲論文、396 頁。

であり、社会的にも許容される「正常」なものであることを確認する。この点についてわれわれは、前節においてすでに、「自閉的活動性」が目的ではなく方法や結果の問題と結びつくという点を検討し、明らかにした。さらに小川は、行為における「自閉」について、それが内的な状態から二次的にやって来るのではなく、直接的に行為そのものにおいて自閉的であることに注目している。すなわち、先に自閉的で内面に沈潜するような自己があり、その後で行為が生まれるのではなく、直接的で自閉的な行為そのものがまずあるとするのである。さらに小川は、上の引用に続けて次のように述べる。

> それゆえもし、行為もまた心的体験と同様に、直接的に自閉でありうるということは、自閉というものは、精神とか生体よりももっと深いレベル、それらに先立ち、基礎づけるもののレベルから来ているということがわかる[52]。

このように小川は、「自閉」が、「精神とか生体よりももっと深いレベル、それらに先立ち、基礎づけるもののレベル」から来ていると考える。ここで、ミンコフスキーが「自閉的活動性」を示すとする人々には「生」が「欠けている」と述べていた点を思い起こしたい。小川が述べる、「精神とか生体よりももっと深いレベル、それらに先立ち、基礎づけるもののレベル」とは、ミンコフスキーが「生」と呼ぶものだったと考えられるのだが、ミンコフスキーの「自閉的活動性」概念は、ここで、このような、われわれの「精神や生体」に先立ち、これを基礎付けるような生と呼ばれるものと、われわれの活動性とが不可分に結びついていることを明らかにしているのではないだろうか。すなわち、ミンコフスキーは、夢想における「自閉」と、行為における「自閉」を、確かに区別し、「内省的傾向」として前者を救い出そうとしていたのだが、行為における「自閉」においても、結局は小川が「精神とか生体よりももっと深いレベル、それらに先立ち、基礎づけるもののレベル」と呼ぶような内奥の次元が現れているのであり、どちらの自閉においても、この内奥が決して失われることはな

[52] 同上、396 頁。

いことが示されているのではないだろうか。したがって、夢想的な「自閉」においても、行為の上の「自閉」においても、両方の場合において、ある機能そのものが侵され、失われているのではないのであるから、治療において目指されるのは、残り続ける紐帯に働きかけることであり、機能と機能、個体と個体の間の「間質（espace interstitiel）」（S 102）を繋ぎ直すことである。

（3）自己自身との一致

さらにミンコフスキーは、活動とはそもそも、「自閉的要素」を含み得ることを示唆している。ミンコフスキーは、次のように述べている。

> われわれは時々、環境から遠ざかって、唯一人でいたいという要求を感じる。そして自己自身の中から活動と制作の力を汲み出そうとする。（S 129）

ここでミンコフスキーは、環境から一人遠ざかることによって、すなわち自閉することによってのみ、活動と制作を行い得るとする。ここから、活動性と自閉とは根源的に結びついたものであることが分かる。このように、「自閉的活動性」においては、活動が自閉的であるということが「生」を欠くものとして否定的にとらえられたのだが、しかし他方では、創造的な活動性とは本来的に自閉的なものであると捉えられ、その積極的側面もまた考察される。

この矛盾についてミンコフスキーは、上の引用に続けて次のように述べている。

> このようにわれわれは自己自身の中に人格の最高の表現の源泉を見出すのであるが、しかし、だからといって、われわれは外部からの影響をことごとく丹念に排除しようとするだろうか。われわれは外界の要素を自己の内生活の坩堝のなかに溶かし込んで、しかる後それを人格活動の素材とするのである。このように、われわれは環境から自己を引き離すとはいいながら、環境との接触を保っている

のである。（S 129）

ここでミンコフスキーは、周囲の環境からの離反と周囲の環境への接近とを慎重に語る。まずミンコフスキーは、環境からの分離について述べ、われわれが活動性において環境から遠ざかる場合があることを認める。しかし続けてミンコフスキーは、われわれは環境からの影響を完全に排除するわけではなく、「外界の要素を自己の内生活の坩堝のなかに溶かし込んで、しかるのちそれを人格活動の素材とする」と述べ、環境への接近について語るのである。すなわちミンコフスキーによれば、われわれは「環境から自己を引き離す」一方で、同時に、「環境との接触を保っている」。さらにミンコフスキーは、次のように述べる。

> けれどもわれわれは単に一方的に環境の作用を受けるのではない。もしそうだとすれば、われわれは単なる模倣者に過ぎないだろう。（S 120）

ここでミンコフスキーは、再び、周囲の環境からの分離と自己の能動性について語る。そして何度も周囲の環境からの分離と環境への接近とのあいだを揺れ動いた後に、次のように結論付ける。

> ならば、一方どこまで外的影響を自己の上に働かせ、他方自己の独創性を保全するために、どこまで環境との接触を押し進めるべきかという問題が起こる。しかしこれに対して明確な解答を答えることは困難である。精神衛生のいかなる規則もこれを解くことはできない。生活体を統御する本質的要素は概念化し得ないからである。この難問を解くのは生の非合理的因子であって、これを生との調和感（sentiment d’harmonie avec la vie）と名づけることができる。この問いは各個人個人において解かれなければならない。これを解くにあたっては、論理との一致ではなく、自己自身との一致、生との一致が求められなければならない。（S 129）

このように、ミンコフスキーは環境からの離反と接近の間に横たわる葛藤を認める。そして、この問いへの明確な答えを提出することが困難であることを認めながらも、この答えとは、自己自身が感じる「生の調和感」のなかにあるとする。この葛藤の問題は、どんなときもあらかじめ排除されるべきであるというよりも、葛藤を続けるなかで、自己自身や「生」と一致することによって解くことができるとするのである。

本節においては、まずミンコフスキーにおける基本障害としての「現実との生きられる接触の喪失」について分析した。これによって、ミンコフスキーが、まずはブロイラーの「自閉」から内省的傾向という「正常」な活動を救い出そうとしていたことが明らかとなった。また、ミンコフスキーが「自閉的活動性」について語る際に、これを「生」を失ったものとしてとらえているにも関わらず、一方では、われわれの活動性とはそもそも自閉的性質と結びついたものであると考えていることが明らかになった。したがって、「自閉」における「分裂性」とは、ミンコフスキーにおいて積極的なものである。

このようにして、ミンコフスキーは「精神分裂病」における基本障害という病の核として「自閉」概念について考察して来た。ここから分かるのは、ミンコフスキーが「精神分裂病」と、この中心としての「自閉」について研究を行うなかで、「自閉」における活動性や、前章において論じた躍動する創造性、さらにはこの内奥にある深い結びつきの次元を見出しているという点である。自己と世界とは、離れている一方で、奥深くで結びついている。すなわちわれわれは、本章で論じた「自閉」や、第一章の最後に見たように閉じた「作話」の内奥で、他の主体や世界との構造的連帯の次元に出会う。

第二章　　現代の精神医学と接触の精神医学の交叉

本章では、人間と世界との根底の連帯の次元について、１）精神医学における因果関係の問題、２）ロールシャッハ・テスト研究における知覚の問題、という二点から分析する。

ミンコフスキーは、ロールシャッハ・テストにおける染みの「形態（forme）」の知覚的読み取りについての研究を、妻であるフランソワーズ・ミンコフスカ（Françoise Minkowska 1882-1950）の研究から引用し、これを参照する。本章ではまず、１）ミンコフスキーが精神医学における因果関係の探求を続けるべきであると考えていたことを確認した後で、２）ミンコフスカのロールシャッハ・テスト研究を取り上げ、「染み」についての知覚の言語による明確化のなかに、結合の次元があることを示していく。

ここから明らかになるのは、ミンコフスキーとミンコフスカが、「現代的」と定義される精神医学と、それ以前の精神医学との両方の分野に跨っていたこと、また、医学と哲学、より正確に言えば科学的因果律と哲学が分かち難く結びついていた点である。序論で指摘したように、ミンコフスキーは 1930 年代、メイエルソンやダンデューの思想に接近しながら、「同一性（identité）」の問題を深めていったのだが[53]、主体内部の、さらには人間と世界との同一な空間は、知覚においても現れる。

この点を明らかにするために、われわれは本論において以下の手続きを取る。第一節と第二節において、ミンコフスキーの 1927 年の『旧版 精神分裂病』における気質論を分析し、ミンコフスキーが現代の精神医学と接触の精神医学の両方の方向を並存させることを目指していたことを確認する。さらに第三節において、ミンコフスキーが接触の精神医学を強調しながら、第三の型としての「癲癇気質」を論じていることを確認する。これによって、１）経験の「同一性」の問題が、科学的因果律の追求の先にこそ垣間見ることができること、２）

[53] Frédéric Fruteau De Laclos, « Métamorphoses de l'identité entre culture et personnalité », in *Archives de Philosophie*, t. 70, 2007, Université Paris I Panthéon-Sorbonne, p. 403-419.

これがロールシャッハ・テスト論における染みの言語化に現れることを示していく。

第一節　　気質論における連続的な視点

（1）気質論における同調性と分裂性

ミンコフスキーは、「分裂性」と「同調性」の「分割できない二元論」の立場を取り、世界を構成する原理が二元的でありながらも、分かち難く結びついているという立場を取った。また、前章までに明らかになったのは、「同調性」とは、喜怒哀楽を引き起こす情緒のようなものではなく、「分裂性」を土台から支えるものであり、最も深い次元において、いかなる場合も残り続ける次元の存在を指していたという可能性である。本節ではまず、同調性」と「分裂性」を、「気質論」から確認した後で、因果律の先にある「同調」の問題について検討する。

1927 年に発表されたミンコフスキーの最初の著作である『精神分裂病』の第一章は、「分裂性と同調性」から始まる。後に見るように、ミンコフスキーはこの二大原理に、1953 年に出版した『新版　精神分裂病』において、ミンコフスカの研究した「癲癇性」を、三番目の性質として加えるのだが、われわれは、「癲癇性」とは、「同調性」の結合の次元の過剰であるとみなす。そもそも、人間を類型化する視点、すなわちタイプ論は、われわれが A と B どちらかのグループに所属している、という単純な考え方に立っていたわけではない。タイプ論とは、A か B かを選択することではなく、われわれが混合的な様態を生きており、どちらか一方のものには決して属し得ないことを示すものである。そして、混合的であるとは、これまで論じてきたように、われわれがどのようなときも「同調性」と同時に「分裂性」を持つのであり、さらには、「正常」と「異常」の区別もまた、混合され得るということである。後ろの点について、少しずつ確認しよう。

1927 年の『精神分裂病』の冒頭でミンコフスキーが引用するのは、精神病理学者モレルの言葉である。ベネディクト・モレル（Bénédict Morel 1809-1873）は、「精神分裂病」の旧

名称である「早発性痴呆」を、クレペリンよりも早く使用したことで知られる[54]。ミンコフスキーは、モレルの次のような言葉の引用によって、気質論について論じている[55]。

> 「気質（tempérament）は狂気の素因（cause prédisposante）である」とモレルはその概論で述べる。このような気質の存在は、モレルによれば、すべての医師の認めるところである。〔モレルは次のように述べる。〕「苦痛を感じやすく、道徳的感性の領域（la sphère de la sensibilité morale）や知的機能においてきわめて著しい異常のある神経質は、多くは、遺伝の結果または悪しき教育や習慣の激変の結果である。」（S 36）

「気質（temperament）」という概念は、クレッチマーの性格論のもととなり[56]、古代ギリシャの医学まで源泉を遡ることができる、古い概念である。ヒポクラテスやガレノスにおいては、黒胆汁、黄胆汁、血液、粘液といった四つの体液の「均衡」こそが目指されるべきであるとされた[57]。ミンコフスキーは、モレルの言葉のなかに、「現代の精神医学（la psychiatrie contempopraine）における、病的体質、病的性格に関する考え方の萌芽」（S 36）を見る。

これはどういうことだろうか。ここで注意したいのは、ここでミンコフスキーが「現代精

---

[54] 確かにモレルは、クレペリンの「早発性痴呆（dementia praecox）」を、クレペリンが提唱する 1899 年よりも前の 1860 年に、フランス語で 「早発性痴呆« démence précoce »」と記述していた。しかし、この語の使用についてベリオス、ルケ、ヴィラグランの三人は共同論文のなかで、ミンコフスキーの論文を引用しながら注意を促している。なぜなら、モレルの「早発性痴呆« démence précoce »」とクレペリンの「早発性痴呆（dementia praecox）」の間には、断絶があるとミンコフスキーは指摘していたからである。ベリオスらもまた、ミンコフスキーの視点に与し、ブロイラーにおいて強く収束するように見える「精神分裂病」という病のグループが、単一の源泉をもつものではないと主張する。（Eugène Minkowski, « La Géneése de la notion de schizophrénie et ses caractères essentiels », *L'Évolution Psychiatrique*, t. 1, 1925, p. 193-236. および German E. Berrios, Rogelio Luque, José M. Villagrán, « Schizophrenia : A Conceptual History », *International Journal of Psychology and Psychological Therapy*, vol. 3, no. 2, 2003, p. 111-140.）

[55] 以下は、Bénédict Morel, *Traité des maladie mentales,* Paris, Libraire victor masson, 1860, p. 122. からの引用である。

[56] Ernst Kretschmer, *Körperbau und Charakter*, 1921, Berlin, Springer, 1921.

[57] フーコーは、ガレノスらの体液論について、『臨床医学の誕生』第九章「不可視なる可視」において興味深い指摘をしている。フーコーは、古代の体液論（humorisme）対固体病理論（solidisme）、また生気論対機械論の論争が、ビシャにおいては、同じ対比構造にある点を指摘する。（Michel Foucault, *Naissance de la clinique*, Paris, PUF, 1963, p. 157.）

神医学における考え方」を否定しているわけではないという点である。「現代精神医学」を批判したいのではなく、むしろミンコフスキーは、モレルが開始した「現代精神医学」の萌芽を提示することを通じて、これを自身が引き継いでいることを示そうとする。しかしながら問題となるのは、ミンコフスキーが「現代の精神医学」であると考えるものの内容である。ここでミンコフスキーは、「現代の精神医学」とは、すなわち、正常であるところの「気質」と異常であるところの「狂気」が連続するという考え方を開始させたものであるとみなすのである。

この視点によって引き起こされるのは、次の疑問である。この連続は、一方向にしか進まないものなのだろうか。あるいは、ここで示されているのは、われわれは正常から病に向かう方向のみならず、同時に、病から正常に向かうような道を、どのようなときにも持ち続けているということなのではないだろうか。正常と病が連続しているという視点は、確かに、正常の側から見れば、不安を喚起させるものである。しかしながら他方では、ここにおいて、われわれが序論において指摘した、ミンコフスキーにおける「治癒可能性」という概念が浮かび上がる。この概念は、現代の精神医学が開始させた腑分けの視点によってこそ増殖されるものである。

このように、正常と病の連続性の問題と、治癒可能性は表裏一体のものである。どちらか一方しかないとは、決して言うことができない。なぜならここでモレルによって、異常の「原因」とされたものは、「遺伝、悪しき教育、習慣の変化」であったが、これら異常の「原因」とされるものを明らかにしようとすればするほど、それまで正常とされて来たもののなかに、新しい異常の萌芽が見出されるのであり、しかし同時に、このようにして原因の探求によって開かれた領域のなかにこそ、「精神分裂病」の「治癒可能性」が開始されるからである。

（２）性格の分類

しかしながら、ミンコフスキーの最初の著作である『精神分裂病』においてまず強調されるのは、「分類」の追求である。ミンコフスキーは、「現代の精神医学」の試みが目指す、「性

格」に関係する研究領域の拡大について、次のように述べる。

> 要約して、われわれは次のように言うことができる。臨床精神医学（la psychiatrie clinique）を出発点とする一つの遠心的運動が、次第に異常性格の膨大な領野に浸透して行きつつある。この運動は臨床によって練り上げられた疾病学の枠組みを〔この領野に〕移動させ、性格の分類にこれを適用させることを求める。（S 46）

現代の臨床精神医学は、より遠くへいこうとする遠心的運動を行う。ミンコフスキーによれば、臨床で練り上げられた「疾病学」の追求、すなわち正常と病を区別しようとする現代精神医学の運動は、これが本来対象として来なかったはずの空間に、すなわち「性格」の分類にまで広がろうとしている。

しかし一方でミンコフスキーは、次のようにも述べる。

> この運動は、正常者と異常者を分かつ柵──これは人為的なものではあるが──の前で、休んでいる。けれどもこの運動を導く原理は、この障碍の突破を長らく甘んじて受けるにはあまりにも強力である。この流れは遅かれ早かれこのこの障碍を必ず突破するだろう。（S 46）

ミンコフスキーはここで、疾病学を個人の「性格」の分類にまで至らせ、異常なものを「治療」しようとする現代の臨床精神医学の拡大が、「正常者と異常者を分かつ柵」の前で休んでいるとする。これはすなわち、正常と異常の分類が未だ完全ではないこと、そしてさらに、この正常と病を分け隔てる「人為的な」柵がその徹底によってこそやがて突破されることを意味する。この柵が突破されるということは、「性格の分類」がやがて病との関連において完全に解き明かされるということではない。そうではなく、正常と異常のあいだの柵がなくなるということは、同時に、正常と異常のあいだにある連続や交錯がますます濃くなり、こ

れらの分類が不可能になるということでもあるのではないだろうか。すなわちミンコフスキーはここで、現代の精神医学における分類の試みと、この試みのさらなる徹底が引き起こすことになる正常と異常の境の突破の到来を予告しているのである。

第二節　モレルとブロイラーの差異

（1）モレルにおける変化と同一性

このように、気質論において論じられた正常な性格と異常な病との柵は、徹底されることによって、やがて突破されることを準備している。そのことを前提として、モレルとブロイラーの差異を確認しよう。この差異を検討することには、重要な意義がある。なぜなら、ミンコフスキーによってモレルが開始したとみなされた「現代の精神医学」は、ブロイラーにおいて、また別の区切りを迎えるからである。すなわちブロイラーにおいて精神医学は、分類を徹底しようとする運動を保ちながらも、別の精神医学へと接近している[58]。さっそく、ミンコフスキーが見定めたモレルとブロイラーの差異を確認してみたい。

ミンコフスキーは、モレルから開始されたと自身がみなす現代的な精神医学が立脚する理論について、次のように述べる。

> 精神病の基本的特徴を精神病発現以前の個体の過去のなかに投影する、つまり臨床像の相違を、類似する病者の気質の相違に帰する。このような方向は、認識論的な観点から、きわめて確固たる基礎を持つ。（S 37-38）

ここで指摘される、認識論的な「基礎」に注目したい。モレルは性格研究において、臨床上に観察されるある患者の病と別の患者の病の差を、「精神病の基本的特徴を精神病発現以前の個体の過去のなかに投入」し、これらを彼らの「性格」の差異に還元する。モレルの立つ

[58] 本論第三章で確認したように、例えば、ブロイラーとミンコフスキーによる統合失調症論における「自閉」概念においても、この痕跡は示されている。

このような理論について、ミンコフスキーは次のように述べる。

> 一般に思惟は観察された諸事象間に関係を立てようとするものであるが、事物の存続と先在（le persistance et la préexistence）を発見することによって、変異（les variations）と変化（les changements）を最小限に留めようというのが、この方向である。（S 38）

モレルの精神医学の方向は、変化を「最小限」にとどめようとする。すなわち、正常であったころの「性格」と、異常となった「病」のあいだの差異を小さくし、これらの連続を保証しようとするのである。こうした病と性格の連続性は、ミンコフスキーにとって「事物の存続と先在」の関係、すなわち事物と事物の間にある因果の関係として、精神医学の基礎を保証している。ミンコフスキーは、モレル以降の精神医学が、この上に立脚する基礎であるとし、「事物の存続と先在」の関係を重視するのである。

ミンコフスキーは、モレルの立脚するこうした「科学的な因果律」について、次のように述べている。

> このように、この方法は後件と前件との同質性（équivalence）（性質の上からみて）を求めようとするものであって、これは科学的因果律の要請するところに他ならない。われわれの精神はその本性に従って、無限の変化を通じて時間における同一性（*l'identité dans le temps*）を常に新たに求める。観念を明確化するということは、われわれにとっての一つの説明的な価値を持つ。なぜなら、一つの現象を説明するということは、その現象の先在を認識することに他ならないからである。（S 38）

ミンコフスキーがモレルのなかに見出すのは、われわれの精神が、「無限の変化」を通過し

ながら、一方で「同一性を求める」視点である。事物と事物、現象と現象、経験と経験の間の結びつきは、自明のものではない。むしろわれわれは、科学的な因果関係を見出そうとする意図に従いながら、これらを同一のものとして結びつける。このような変化と同一を同時に「求める」視点にこそ、モレルの現代精神医学が前提とするところの「科学的因果律」が設ける「秩序」があると、ミンコフスキーは述べる。

> 精神医学は、従来漠然と精神病質とか異常性格とか変わった人とかいう名をもって呼ばれていた個体の一群の中に、精神病そのものの分類を投入し、この広大な領域に秩序を設けようと努めるのである。（S 39）

ミンコフスキーはこのように、精神医学が「秩序」や分類の柵を求める試みの上にしか成立し得ないとみなす。分類は、「疾病学の枠組み」を性格にまで適用させることを求めている（S 46）のであり、この「秩序」の設立の模索の上にこそ、現代の精神医学の領域が打ち立てられていく。

（2）ブロイラーと誤謬

ここまで確認したように、ミンコフスキーは、「科学的因果律」の延長に、精神医学の試みが立っているとする。しかし一方で、ブロイラーの「精神分裂病」の精神病理学は、これを覆してしまうような立場もまた準備しているとミンコフスキーは考える。では、ブロイラーの精神医学について、ミンコフスキーはどのように検討しているのだろうか。

われわれは第三章において、ブロイラーがクレペリンの「早発性痴呆」を踏まえながら自身の「精神分裂病」を提唱する際に、環境からの「自閉」を見出したこと、さらにこの概念がミンコフスキーのなかでさらに深められていったことを確認した。「自閉」とは、環境からの隔たりであり、医師はこの隔たりについて、「感情」による「浸透＝洞察」によって診断する。しかしながらこのようなブロイラーの立場は、現代の精神医学に、「誤診の危険」

を増大させたという。ミンコフスキーは、次のように述べる。

> 分裂性、同調性の概念はいまや臨床において役立つに至った。ブロイラーによって当初精神分裂病に与えられた桁外れの拡張は、場違いな印象を人々に与えたのであったが、分裂性、同調性の概念は、少なくともこの不安を一部分ぬぐうものである。分裂病の拡張については、ブロイラーに対して激しい批判が加えられたのであった。どの症例に対しても皆一様に分裂病の診断を下すことによって、誤診の危険を冒すこともほとんどなく、努力も、また知識さえもなしに、よい精神科医として通用する機会を得ることができるであろうと人々は非難した。（S 89）

ブロイラーが提唱した「精神分裂病」は、この想定される「病」に対して、明解な解決をもたらすものではなかった。提唱は完全ではなく、ここに誤謬の可能性が生まれる。分裂性と同調性という性格に関わる概念が提示されることによって、この批判は多少和らげられたのであるが、根本的な解決には至らなかった。なぜなら、新しい名称は、それまで名付けられなかったかもしれないものにまで与えられ、拡大されていったからである。ブロイラーの述べる「分裂」とは何か。環境から「自閉」するとは何か。明確な答えからはますます離れ、ブロイラーは、明確に目に見える「科学的因果律」に基づく医学とは反対のものの開始を宣言したとミンコフスキーはみなす。

> ブロイラーは、──われわれもまったく同意見であるのだが──、この要素を他起源の嵌め込み（incrustation）とし、〔精神分裂病と自身が呼ぶ人たちを〕混合性または連合性精神病（une *psychose mixte ou associée*）と捉える。（S 91）

ブロイラーは、「精神分裂病」の起源を求める。しかしこの起源は常に別の起源への「嵌め込み」を持ち、この病を混合態（mixte）にさせる。個人のなかでその瞬間ごとに生起する

症状の結晶を、われわれは完全な形で摘出することができない。この不純な不透明の「病」を、ブロイラーは「混合性または連合性精神病」と名付け、われわれが「自閉」を環境全体と結合した形でしか認識し得ないことを示す。ミンコフスキーは、この不純化をブロイラー自身が認識していたとする。

> しなしながらブロイラー自身も、精神分裂病を除外し得る否定的鑑別徴候（*signe pathognomonique d'ordre négatif*）がないことを認めざるを得なかった。すなわち分裂病性ではあり得ないところのものを明確に規定することは至難と考えられた。このことはわれわれをして、精神分裂病の概念はまったく明瞭であり正確であるにもかかわらず明確なる限界をもたないと主張せしめたのである。理論はいまだ確固たる基礎を欠いていた。（S 89）

ブロイラーの混合という視点は、「確固たる基礎」を欠いているという。この視点においては、常に、あるものとあるものが連帯し、くっつき、混濁する。あるものはあるものへとどこまでも結びつけられてしまうだろう。しかしブロイラーとミンコフスキーは、このような視点を廃棄しない。やがてこの指摘は、自己ではない他者にまで向かう。

> 家系研究はしばしば「非定型的」精神病の出現に対する説明を与えてくれる。家系研究に基づいてわれわれは非定型的精神病をその因子に分解し、各構成要素が別個に病者に存在することを示すことができる。もしそれができない場合にはわれわれはさらに研究を続行すべく促されるだけである。欺瞞的で正確でしかないレッテルよりも、われわれは、むしろ不確かであることを、一時的な「私は知らない」選ぶのであって、これによってわれわれは、新しい問題を提出し、さらに探求を進めることができる。（S 92）

ここでミンコフスキーは、ブロイラーのあいまいさをさらに拡大させ、「遺伝」という考え方にまで至る。「遺伝」は、自己と自己に似た他者をどこまでも結びつける。自己を組織しているはずの構成要素は、どこまでいっても分解しきることができない。進めば進むほど、「わたしは知らない」ということを、自己は言うことをやめることができなくなる。構成要素の分解の作業を、構成している諸要素に対して向ければ向けるほど、自己は他者と似ていく。やがて、一人の人間と似ていない人間は存在しなくなる。

（３）われわれに固有の感情の領域

しかしこの遠心的運動は、「わたしは知らない」の極で、見知ったものに遭遇する。それは、この運動の沈黙する支えであり、自らが運動の土台であると告げたことがないものである。この支えは、「われわれに固有の感情の領域（notre propre sphère affective）」、「われわれに固有の人格性（notre propre personnalité）」（S 93）と呼ばれる。これについて確認してみよう。ミンコフスキーは、自身の医学が「遺伝」についての考え方に立つと述べたあと、その土台となる方法論について、次のように述べる。

> われわれは、患者の前に立つときに、どのようにして精神症状の分裂性あるいは同調性を決定することができるのかという問題を考察してみなければならない。すでにわれわれが知っているように、分裂性および同調性は、個体の環境に対する態度に関する概念であり、環境と一つになって振動し、現実との接触を保つ個体の能力に関する概念である。したがってそれはとりわけ主体の感情や活動性（l'affectivité et l'activité du sujet）に関わる。さてわれわれは、これを評価するための的確な手段をわれわれ自らのなかに所有している。われわれに固有の感情の領域（notre propre sphère affective）、われわれに固有の人格性（notre propre personnalité）である。（S 93-94）

上でミンコフスキーは、「精神分裂病」という病が含む誤謬の可能性について、この病の「起源」が決定不可能であり、これが他の「起源」へと嵌め込まれているためだとしていた。それにもかかわらずここでミンコフスキーは、ここから一挙に確かさへと向かう。これが、「個体の情動と活動性」である。しかしここで重要なのは、「現実との接触」を保ち、感情の確かさに浸透されるときに、「理性」が捨て去られるわけではない点である。目の前の患者は「ひとびとが考えるほど理性を失っていない」（S 99）ため、「理性」による診断は依然として必要とされる。すなわち、「接触」と「理性」による診断は共存させられるべきものである。この点についてミンコフスキーは、次のように述べている。

> われわれがわれわれに似た者たち（semblales）を評価しようとする場合、彼らの反応を列挙し、もっぱらわれわれの理性に照らして分析し分類するだけではわれわれは満足することができない。まったく同様に、直観によって、他者の人格を浸透する（pénétrer la personnalité d'autrui）ことを求める。あるいは、われわれがその現前を体験しているところの、冷たさやあたたかさの感覚によって、さらに、われわれの感覚や反応を形成し、音域（diapason）を合わせるわれわれの能力によって。あるいは、「感情的」というよりむしろ非合理的な意味で他人を「了解（comprendre）」する能力によって。（S 93-94）

ミンコフスキーとブロイラーは、モレルから渡された際限のない分離の試みの奥でこそ、「感情」の「浸透＝洞察」による診断という支えに至った。このとき、ブロイラーは「精神分裂病」という新しい名称を、分類の不確かさにおいて提示し、他方では、この病に感情の「接触」による診断の可能性もまた示した。すなわち、理性による分析や分類と平行し、「直観」による浸透、あるいは冷たさやあたたかさの感覚と、相手の音域に合わせる能力によって、患者の診断を行われたことを記している。

ミンコフスキーはさらに、この二つの理論を、別々に保持しながら、「精神分裂病」にお

いて失われている「接触」を明確化しつつ、この病が分類においていまだ不確かさを残していることのなかに、「治癒可能性」とともに、この病の定義における変容の可能性を提示している。そして、こうした定義の変容の問題を見定めつつ、さらに、生におけるある現象と、それが連帯する全体について問い直すような領野が開かれる。

第三節　『ロールシャッハ』における生きられるものの型

（1）「展望」の章

ミンコフスキーは、モレルとブロイラーにおける病の「原因」についての論点から、現代の精神医学と接触の精神医学の分離と混合を見出すのだが、こうした分裂と結合の関係性は、ミンコフスキーが引用するミンコフスカのロールシャッハ･テスト研究における個人の知覚の問題に現れているので、これについて確認してみよう。

ミンコフスキーは、1953 年の『新版　精神分裂病』（初版 1927 年）に、新章として「展望」の章を付け加える。この新章の主題は、ミンコフスキーの妻であるフランソワーズ・ミンコフスカ（フラニア・ブロックマン）が研究した、ロールシャッハ・テストにおける「形態（forme）」の問題であった[59]。ミンコフスカは、『精神分裂病』の再版が実現される前の、1950 年に亡くなっているのだが、ミンコフスキー自身にとって、重大な出来事となるミンコフスカの死とこの新章のつながりについて、ミンコフスキーは次のように述べている。

> 「展望」の章は、―読者はこのことに不満を抱かれないと思うが―この亡妻の業績―に基礎を置いている。これは人間的宿命によって決定されたことである。しかし、このような事情のために、本章の客観性が失われたとは思わない。F・ミンコフスカの仕事は、それがわたしの亡妻の仕事であるからというよりも、むし

[59] ロールシャッハについては、Hermann Rorschach, *Psychodiagnostik : Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungsdiagnostischen Experiments (Deutenlassen von Zufallsformen),* Bern, Hans Huber, 1932. (1ère édition, 1921)、『新・完訳精神診断学』鈴木睦夫訳、東京、金子書房、1998 年、およびに『標準ロールシャッハ図版』東京、東京ロールシャッハ研究会、1958 年を参照した。

ろそれが人間という神秘的な存在の研究を目的とする学問の一般的方向と深く関係しており、またある程度までその方向づけの基礎を与えているがゆえに、本章に取り入れられたのである。（SN Ⅶ）

ここでミンコフスキーは、一見すると客観性を欠くような「学問の一般的方向性」について述べている。ミンコフスカという生きた具体的な個人が残した仕事と、別の主体である自己の仕事とを「完全に分離することができない」（SN Ⅶ）とするのである。そして、一人の「人間」が亡くなるとき、その個人が遺す仕事は、以前よりももっと「明確な輪郭を持って」存在すると述べる。すなわち、世界において、分離し難いものとして存在している作品と作品、経験と経験、個人と個人は、互いに切迫したものでありつつも、なおも、「輪郭」や、そこから遠いと思われる「客観性」を持ち続けるという。なぜなら、「分離」と「結合」の問題は、ミンコフスキーとミンコフスカのロールシャッハ研究から確認していくように、われわれの生の「方向」を指し示していたからである[60]。

まずは、ミンコフスキーが述べる精神病理学におけるロールシャッハ・テストの役割について、確認してみよう。

〔人間は〕与えられたさまざまの活動領域のなかで不得意な分野をもっているとともに、また、彼の得意とする領域をもっている。（SN 210）

われわれはある具体的な領域の上に立ち、活動している。ある生物がそれぞれの傾向をもっていることと、それらが、他の生物たちのもつ諸傾向や環境とうまく適合するかどうかは、各々の生物によって、結果が異なるという。個別の生やそのときどきの出来事において、接

[60] 現在、ロールシャッハ・テストについては、その「過剰病理化」の傾向があるために慎重に扱われるべきであるという批判が存在する点については、もちろん、われわれも注意を払わなければならない。（James M. Wood, M. Teresa Nezworski, *Scott O. Lilienfeld, Howard N. Garb, What's Wrong with the Rorschach : Science Confronts the Controversial Inkblot Test*, San Francisco, Jossey-Bass, 2003.）

続がスムーズでない場合には、ある分野の熟練者がその接続の仕方を確認するために呼ばれるのだが、ここで、その仕方を把握するための道具としてロールシャッハ・テストを使用する場合があるとミンコフスキーは考える[61]。

（2）反応性、内的共鳴と固有の方法

では具体的には、このテストはどのようにして機能するのだろうか。ロールシャッハ・テストは、ヘルマン・ロールシャッハによっておおもとが作られた。ヘルマン・ロールシャッハは、ミンコフスキーと同様に、ブロイラーの下で学んだ精神医学者であり、ブロイラーの下で、1912 年に博士論文「反射幻覚とその類似現象について」[62] を提出している。この論文のなかでロールシャッハは、自身の見た夢の内容についての疑問を軸としながら、人間の生についての問題を投げかける。

ロールシャッハは、どのような夢を見たのだろうか。彼は、学生時代に死体の病理解剖に立ち会うのだが、このとき、「自分の脳が切られて切片になるのを感じる」夢を見る。すなわち彼は、自分自身にとって、生理学的、あるいは現実の世界においては絶対にあり得ないような感覚を持ったのである。ロールシャッハは、それが夢という非現実の世界であるにせよ、そのような仕方で人間がある空間を経験できるのはなぜか、という疑問を持つ。彼自身は、この論文の発表から 9 年後の 1921 年、初の著書『精神診断学』を発表した 9 か月後に 37 歳で亡くなる。ここでミンコフスカとミンコフスキーは、この研究の方向性を引き継ごうとする[63]。

---

[61] ロールシャッハ・テストがその道具としての有効性を発揮する場合については、中野明徳はその歴史的背景を踏まえながら、「ロールシャッハ法は診断検査から離れて、事例研究のように個人の理解とその援助に活用するとき」であると述べている。（中野明徳「ロールシャッハ法の解釈の歴史―法則定立的か個性記述的か―」『福島大学総合教育研究センター紀要』13 号、2012 年、p. 29-38.）

[62] Hermann Rorschach, « Über „Reflexhalluzinationen“ und verwandte Erscheinungen », *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie,* 13, 1912, p. 357-400.（ヘルマン・ロールシャッハ「反射幻覚とその類似現象について」『ロールシャッハ精神医学研究』所収、K. W. バァッシュ編、空井健三、鈴木睦夫訳、東京、みすず書房、1986 年。）また、ロールシャッハの見た夢の内容については、エランベルジェ（エレンベルガー）による同書の序文「H・ロールシャッハの生涯と業績」を参照した。

[63] ミンコフスキーは、ロールシャッハについて次の論文で直接言及している。（Minkowski, Eugène, « Problèmes pathographiques : À propos de la récente traduction française de l’ouvrage de Karl Jaspers : Srindberg et Van Gogh, Hœlderlin et Svendenborg », *Revue d’esthétique*, vol. 7, 1954, p. 257-276. 〔＝in

ロールシャッハ・テストにおける「染み」の知覚のなかで起こっていることとは、何か。「染み」を見ることは、視覚をきっかけとしながらも身体を染みの流れに貫かせる「触覚」的な行為であり、この「接触」は、言語化の努力によってのみ実現される。ミンコフスカは、ロールシャッハ・テストにおいてそれぞれの個体における諸出来事を貫くものについて、ロールシャッハの次のような言葉を、1949 年のチューリッヒにおける発表「形を読み解く試み（Formdeutversuch）としてのロールシャッハ──癲癇、癲癇気質、感覚型の問題へのその適用」のなかで引用している。ミンコフスカによる、この発表を確認してみよう。

> ロールシャッハは、次のように強調します。「規律化された思考（la pensée disciplinée）」は、後天的な因子（un facteur *acquis*）による、と。一方、内向型もしくは外向型の契機とは、原初的に与えられた契機（des moments *donnés primitif*）です。これらの原初的な所与の契機は「「体験型 « Erlebnistypen » 」と呼ばれる」、と。（R 248）

ミンコフスカによれば、ロールシャッハは、言語による分析が基づく土台を「規律化された思考」と呼び、「原初的に与えられた契機」と、これを分けたという。しかしここで注意したいのは、ロールシャッハとこれを引用するミンコフスカが、言語による分析を否定しているわけではないという点である。むしろこれが機能するためにこそ、言語の介入に時間がかかるが、連帯している部分を、ミンコフスカはロールシャッハの「原初的な所与の契機」の体験として提示する。

ミンコフスカは、ロールシャッハのこの「原初的に与えられた契機」としての「体験型（Erlebnistypen）」と呼ばれるものの、フランス語への翻訳の難しさに関して、次のように

Écrits cliniques, Ramonville Saint-Agne, Éditions érès 2002, p. 185-200.〕）また、ヘルマン・ロールシャッハの妻であるオルガは、フランソワーズ（フラニア）と同様にロシアのカザン出身であり、これによってもチューリヒで二人は親交を深めたことをミンコフスキーとミンコフスカの娘は述べている。（Jaen Garrabé, *op. cit.*, p. 510.）。

述べる。

> この言葉は、フランス語に翻訳することが困難です。「反応性の型（type de réactivité）」（ルースリ−ウステリ夫人による）でもなく、ましてや「内的共鳴の型（type de résonance intime）」（オンブルダーヌ氏による）でもありません。また、われわれが提示した「生きられた諸経験の型（types d'expériences vécues）」も、忠実な翻訳には至ってはいません。体験（Erlebnis）のなかには、「体験する（erleben）」があるのですが、これはすなわち、生の出来事を体験し、生きる固有の方法（la façon particulière d'éprouver et vivre les événement）です。この「どのように« comment »」とは、ある原初的所与です。わたしはこの意味について語るために、「生きられるものの型 « type du vécu »」を提示します。（R 248-249）

ミンコフスカは、ロールシャッハのドイツ語による「体験型」を、フランス語では、「生きられたものの型」と翻訳する。「体験型」という「内的共鳴」は、諸生物にとって、多くの出来事を通して、むしろ出来事を通してしか経験されることがない。したがって、それは、それぞれの生物の出来事における、「固有の方法」としか呼びようがない。これを通り越して生命の流れそのものを思考したり、語ったりすることはできないのである。このとき、それぞれの個体の生きる方法、すなわち「どのように」は、その生物に起こった出来事たちの固有の凹みであることを経てのみ、たった一つの流れについての表現となる。これをミンコフスカは、「生きられるものの型」と呼ぶ。

このようなミンコフスカによる孤立した出来事と一つの生命の流れが結ぶ関係ついての考え方は、ミンコフスキーと共通していたと言える。なぜなら第一章で見たように、ミンコフスキーは諸生成と生成一般の概念を経て「生きられる接触」を提示するのだが、この一つの流れのそれぞれの個体における分有こそを、ミンコフスキーとミンコフスカは「生きられる（vécu）」と呼ぶ。すなわち、「生きられる」とは、それぞれに孤立した諸出来事が、その

有限な形を介して、一つのものを分有する様態を指す。

（３）狭められた「接触」

このように、個別のものと一つのものについてのロールシャッハ、ミンコフスカ、ブロイラーの思考を経て、ミンコフスキーは、二つの極を対比させるようになる。すなわち、「分裂」と「同調」という対比から、「分裂」と「結合」という対比を考察することによって、二つの原理の対を、より明確に提示する。

ここで、ミンコフスキーが参照するミンコフスカによる結合の領域、すなわち「癲癇（éplilepsie）」についての論述を確認したい。

> 癲癇の、あるいは癲癇気質、感覚的な型（le type sensoriel）の問題。わたしがまずあなた方の注意を引きたいのは、ロールシャッハ自身が癲癇の主題について述べていたことです。彼は癲癇による錯乱者におけるような、大いなるキネステジーに惹かれていました。彼は、その観察についてのたぐいまれなる精神のおかげで、一連の運動が与えられた諸反応に伴っていることによく気づき、〔この運動に〕接近しました。つまり、彼は二次的である（*secondaire*）キネステジーの例について語ったのです。これこそ、この模倣する（*mimer*）傾向にこだわりながら、わたしが繰り返し指摘して来た点です。（R 249）

「癲癇性」における特徴の一つである「模倣」を、ミンコフスカは、「共働的（synergique）傾向」（R 111）と呼び、離れていく「分裂性」の傾向と対比する。ロールシャッハは、「癲癇」を起こし易い型を「感覚的な型」として分類し、こうした特徴について、いくつかの記述を行っていることをミンコフスカは指摘するのである。このとき、原初的な流れとしての「体験型」と、二次的に引き起こされた流れとしての「一連の運動」は分けられ、前者への「同調」と、後者への距離のない「接触」は区別される。

ロールシャッハは、「癲癇」においては「大いなるキネステジー」が見られるとするのだが、これはどういうことだろうか。これについてミンコフスカは、次のように記述している。

> 人格的な（*personnel*）要素が現実との接触（*contact* avec la réalité）を狭め、この接触を、正確な使命の前に奉仕させようとします。（R 243）

「体験型」という現実との「接触」は、「癲癇性」の強い場合においては、狭められ、ミンコフスキーが『生きられる時間』で記述した「休息」としての距離を持った「接触」とはならず、この支えに到達するために実現すべき「使命」へと駆り立てられていく。こうした使命を持った人物とは、例えば、次章において確認するように、画家であるファン・ゴッホなのだが、彼らは、すでに与えられているわれわれと世界との「紐帯（lien）」（R 251）を表現することを希求する。すなわち、「分裂性」において分離の過剰が指摘されたように、「癲癇性」においては、結合の過剰な希求が示されるのである。しかしながら、やはり「癲癇性」も「分裂性」と同じく、こうした傾向そのものが批判されているのではないことに注意しなければならない。これらの傾向は、「生きられた」生命の強いしるしであるからである。

（4）色彩と像の連結

このように、「癲癇性」においては結合が希求されるのだが、この希求は、あるものとあるものの連関や、あるものごとへの直接的な類似の反応において現れるという。例えば、ミンコフスカは、ロールシャッハの指摘する「癲癇性」の強い場合における色彩への反応を、次のように紹介している。

> ロールシャッハは、一次的な色彩反応について、ほとんど特異的といえるようなある特性を強調しています。つまり彼は、赤や黒といった、色彩を名付けること（*nommer*）という事実に、照準を定めます。彼はこれらの色が諸反応に対する類

似（analogue）であるということによって、二次的なキネステジーの諸反応に接近します。（R 249）

分裂性の強い場合には、「しばしば色彩が不在であったり、あせたりする」（R 223）一方で、癲癇性の強い場合においては、「染み」の言語化は、「色彩の名付けによって開始され」るし、その色彩は「像（*image*）に打たれ（frapper）、直接的に像を生み出す運動に結びつけられる」（R 222）という。例えばミンコフスカは、26 歳の男性の被験者による第一のカードの読み取りについて、次のように記述している。

二つの側面。きれいな同一の生産物。わたしのデッサンのような。黒と白。翼の生えたコウモリの運動する腕に違いありません。彼は次のように述べ、終える。『翼のある神（Dieu avec ailes）』。（中心にある形象について神であるとする）（R 221）

第一のカードは、ロールシャッハ・テストの開始のカードであるのだが、このカードの中心から線対称に構成される「染み」は、彼には、左右一つずつにある同じものに見えるという。ミンコフスカが特に注意を払うのは、彼の、最後の「翼のある神（Dieu avec ailes）」という言葉である。なぜなら、彼においては像と黒い色彩、形の見え方は連関しており、切り離されたものではなくなっているからである。このようなとき、「染み」は、ある特定の世界に紐づけられ、特に、「宗教的」（R 222）な雰囲気を帯びるという[64]。

（５）沈殿と変容

ミンコフスカはこのように、カードを読み取る行為、すなわちその「染み」を視覚的に捉

[64] ロールシャッハの妻オルガは、彼が神話や隠されたもの、民間伝承に強い興味を抱いていたことを証言していることを、ミンコフスカは指摘している。（R 213）

え、またそれについて告白することが、個体としての生と、流れとしての生を結合させることの上にしか成り立ち得ないという立場に立ち、これをミンコフスキーは支持する。しかしながら、ここにおいて流れと呼ばれる、原初的な共同性は、これを、二次的に完成させようと駆り立てられるようなときには、それが決して当人の意志からではないとしても、強すぎる様相になってしまうと二人は考える。「同調」や「生きられる接触」とは、「休息」の感情を中心とした、「距離」をもった一致であり、こうした苛烈な連帯とは分けられて考えられていたのである。

ここで、ミンコフスキーにおける「生きられる接触」における分離と結合について、再検討したい。この二種の働きは、もちろん、ロールシャッハ・テストのみに現れるものではない。二つの働きそのものは、第二章で分析したように、ミンコフスキーにおいては、世界と人間のあいだにある基本原理であり、あらゆるもののなかで起こると考えられていた。すなわちミンコフスキーによれば、あらゆるものは、さまざまな状況において、環境を強く被りながらも、そこから隔たることができるのである。この分有の原理は、ロールシャッハ・テストの例においては、「作品」の創造の定義そのものの拡大可能性も孕んでいる。なぜなら、「染み」を例とすることによって、無為であるかのようにも見える、あらゆる行為が創造的であり得ることを、ミンコフスキーとミンコフスカは示しているからである。すなわち、われわれに生起するあらゆる知覚、聞き取り、言語化、あるいは言語化されないままに留まるような想起が、「作品」であり、かつこれらの各々が、一つの流れであるところの「生成」を受け取り、表現するとともに、これに影響を与える可能性を持っているのである。ミンコフスキーは、「作品」について、『生きられる時間』において次のように述べる。

> 躍動は（言葉のもっとも広い意味において）作品に達する。そして作品は、それがどんなに革命的なものに見えようと、それがいくらかの価値を持つかぎり、常に誰かに差し向けられていて、現実に組み入れられようとする。作品は、われわれから分離することで（en se détachant de nous）、周囲の生成（le devenir ambiant）

に多かれ少なかれ深い変調（perturbation）を生み出すことができる。（TV 70）

このように、ミンコフスキーにおいて、「作品」は、「いくらかの価値を持つ」限りにおいて、常に「誰かに差し向けられ」、「現実に組み入れられる」という。ここで、「価値を持つ」ことは、明確に定義されていない。これは、何らかの仕方で、時間的にも空間的にも遠く隔たった誰かに目撃されることであるかもしれないし、あるいは自己自身にとって、誰にも知られないままに密やかに蓄積させるということかもしれない。このようにして生み出された「作品」は、芸術作品のことのみならず、本節で見たように、テストにおける「染み」の知覚や、あるいは、見かけたものを名指し、自身のなかに集積させるような日常的な行為にも含まれるのではないだろうか。こうした「作品」たちは、ただ儚く消えていくのではなく、自己自身と、あるいは自身を超えたものと「結合」し、「沈殿」されていくような領野を開いている。

こうした分離と結合の動きを踏まえれば、ミンコフスキーによる「生きられる接触」を回復させるための模索もまた、周囲に「深い変調」を生じさせ、ときにこれを混乱や動揺としつつも、やがて沈殿し、もう一度何かが分離される「広大で豊かな生（la vie, vaste et ample）」（TV 120）のなかに、自己と世界を賭け直す試みであったと言える。こうした試みのなかには、病の概念そのものの沈殿と変容の可能性も含まれる。次章以降で見るように、このようにして、概念と知覚の問題は、根源的に、人間と世界の紐帯の問題に連結されているのである。

第三部　コスモロジー

第一章　　諸経験間の移行の問題

「分裂性」と「同調性」という二大原理は、人間と人間、人間と環境の間だけではなく、一人の人間の内的な経験の移行にも関わっている。内的な経験の移行は、病的な状態にのみ発生するのではなく、いかなるときも機能し、われわれに奥行きを与え続けているからである。本章では、病の回復と日常的な経験の移行について、「明るい空間」と「暗い空間」のあいだの「移行（transition）」や「往来（passage）」の問題から論じていく。

われわれは、世界との同調が失われてしまったと感じられるとき、いかにしてこれを取り戻すことができるのだろうか。われわれは、何らかの感覚を記述したり、表現したり、あるいは無言のままにそれを取っておくことを通して、いかなる場合においても、世界との「接触」を、そのたびごとに環境に相応しい新しいものにしようと、困難な模索を続けているのではないだろうか。ここでは、日常的な場面から、「精神分裂病」における喪失と回復の問題について検討してみたい。

ミンコフスキーにおいては、明るい空間と暗い空間、昼の世界と夜の世界は、いかなるときにも常に結ばれており、この結合は、明るい／暗い、見える／見えないといった「視覚的」な移行をもたらしている。「視覚」とは、ミンコフスキーにおいて自己と非-自己の合一の感覚として定義され、この合一は、ときに切迫した恐怖として経験される。しかしながら、この切迫は、時間的経過を経て必ず「生きられる距離」を含むようになるのであり、経験が絶えず生まれ直すような、接触や反響によって生が広がる空間へと、後に繋がっていくものである。

第一節　　明るい空間と暗い空間

（１）明るい空間

ミンコフスキーは、われわれの生において共に欠かすことのできないものである明るい空間と暗い空間の関係性について、通常の状態においては、暗い空間が明るい空間を取り囲む状態にあるとするのだが、この関係性は、病理の経験において変容し、「重なり合う」ようになると考える。この構造の変化について検討する前に、まず、ミンコフスキーにおける明るい空間と暗い空間の定義について、それぞれ確認していきたい。ミンコフスキーにとって明るい空間とは、以下に見るように、何よりも「公共的」な空間である。

> わたしはこうしていわば「一平卒の位に下る（rentre dans le rang）」。われわれすべてを組み入れる空間は、こうして平均化（*nivellement*）の働きをするのである。こうしてこの空間は、わたしが言ったように「公共的領域（domaine public）」となり、わたしはそこにあるすべてのものとこの空間を分かち合う。（TV 393）

ミンコフスキーはこのように、明るい空間とは、自らが他の人々と似たものであり、かつ世界を共同で構成する一部であることを、客観的に眺める空間であると定義する。ミンコフスキーによれば、このとき、一人称の「わたし」は、「距離（distance）」、「延長（étendue）」、「広がり（ampleur）」といった厚みによって空間を占める。すなわち、ミンコフスキーにとって自己とは、「公共的」という意味での「明るさ」によって客観的に認識されるものであり、かつ、この認識された自己は、すでに身体の厚みを持っている。このようにしてミンコフスキーは、明るい空間を、他者たちと自己が同一のものを分かち合うのを「見る」視覚的な空間としてとらえる。

さらにミンコフスキーは、「明るい空間」について次のように述べる。

> わたしがそこで占めるのは、ほんの小さな場でしかない。わたしが、わたしに似たものたち（mes semblables）がわたしのように見つめ（regarder）、動き、振舞い、生きるのを見る（*voir*）のもまた、この空間においてである。（TV 393）

ミンコフスキーはここで、わたしが占めている場そのものの「小ささ」に注目する。この「小さい」という感覚は、ほかでもない「わたしに似たものたち」とわたしの類似からやってくる感覚であり、自己による似たものたちを「見る」という行為は、そのままわたしに向かって投げ返され、わたしを小さくしていく。明るい空間において、彼らは、わたしのように、まなざし、動き、振る舞い、生活する。ここで、この明るい空間そのものには、疎外する機能はなく、むしろ「わたし」のまなざしの往来を担保する場であるだろう。

（２）暗い空間

明るい空間と暗い空間、これら二つの空間は、どちらか一方が他方に対し優位性を持つようなものではなく、あくまでも相互的な関係にある。明るい空間は「わたし」とわたしに似たほかの者たちとの連続性を保証し、「そこにあるすべてのもの」を「わたし」が分かち合えることを可能にする。一方で暗い空間は、このような連続性を、「縁取る」（TV 372）のだが、このような暗い空間の分節的機能は、通常の状態においては、「わたし」を傷つけるようなものではなく、むしろ「包み込む」ような形で成されている。

では、このような暗い空間の記述について、確認していこう。ミンコフスキーは、暗い空間について次のように述べている。

> 今度は、何も見えないほど暗い、黒い夜を想像してみよう。（中略）この闇（obscurité）は、単なる光の欠如ではなく、何か非常に積極的なものを持っている。闇は、そこにある対象の物質性（matérialité des objets）の前ではいわば影が薄れるような明るい空間よりも、もっと物質的で、もっと「内容の詰まった」ものであるように思われる。（TV 393）

ミンコフスキーにとって暗い空間は、明るい空間に対し、単純に光が失われたものでもなけ

れば、これより下に置かれるものでもない。むしろ明るい空間よりも内容の詰まった、豊かなものとして記述される。明るい空間は、そのなかにある個々の対象の物質性によって、その空間そのものの影を薄れさせてしまうのに対し、暗い空間は、この空間そのものが「物質的」で豊かなものであるとされるのである。

では、この暗い空間と自己とは、通常の状態においては、どのような関係にあるのだろうか。ミンコフスキーは、次のように述べる。

> 闇は、わたしの前に広がるのではなく、直接わたしに触れ、わたしを包み、わたしを抱きしめ、わたしのなかに入り込み、全体に浸透し、わたしを介して通過する。したがって、自己は闇に対しては透過的（perméable）であるが、光に対してはそうではないと言いたいくらいである。自己はこのように、闇に対しては自らを主張せず、これと混ざり合い（confondre）、一つのものとなる。（TV 393）

暗い空間に対し自己は、明るい空間のときのように、一つの場を占めることによって、自らを打ち立てたりはしない。自己は、闇に対して「透過性」を持つため、闇を受け入れ、「混ざり合い」、「一つ」になるからである。

さらにミンコフスキーは、暗い空間を感受することについて、次のように述べている。

> 一つの光、一条の閃光が、そこに生じ、消え去るために流星のように闇をよぎることがある。囁き、響き、声が、そこであがる。氷のような風がそこを通り抜ける。ときおり、囁きや物音で満たされ、いっぱいになることもある。（TV 394）

ミンコフスキーは、明るい空間を「視覚」の空間として、また暗い空間を「聴覚」の空間として提示するのだが（TV 373）、それにも関わらず、ここでミンコフスキーは、暗い空間を「囁き」や「音」などの聴覚的なもののみならず、「光」や「風」など、それ以外の感覚に

よって感受されるものによっても記述する。なぜならミンコフスキーにとって暗い空間は、「見る」こと、すなわち反省によって覆われた明るい空間に対し、反省としてではない視覚やそれ以外の感覚によって描かれる「内容の詰まった」空間だからである。

しかしここには、一つの逆説がある。ミンコフスキーは、自己が暗い空間に対して自己を主張せず、これと一つになると述べた。だがそのような自己は、果たして暗い空間の経験を、豊かなものとして持ち帰り、記述したり、表現したりすることができるのだろうか。われわれは暗い空間が、光や「風」や「囁き」といった、さまざまな感覚によって感受されるものであることを確認したばかりであるが、ミンコフスキーは、さらに次のようにも述べている。

> 暗い空間は完全にわたしを包み込み、明るい空間よりもはるかによくわたしの内に浸透するのであるから、内部と外部の区別や、したがってまた外的知覚に向けられたものとしての感覚器官（les organs des sens）は、ここではまったく目立たない役割しか担わない。（TV 396）

ミンコフスキーはこのように、暗い空間における「光」や「風」や「囁き」を描いたあとで、暗い空間における「外的知覚に向けられたものとしての感覚器官」の役割を、ほとんど切り捨ててしまう。ミンコフスキーによれば、われわれは、「感覚器官」を使用せずに暗い空間を感受しているからである。それでは、われわれは、いかにして暗い空間について感受し、経験し、記述することができるのだろうか。また、暗い空間の経験において働く「外的知覚に向けられたものとしての感覚器官」によらない感受とは、具体的にはいかなるものなのだろうか。ミンコフスキーは、明るい空間と暗い空間を描いた後、この問いに応えるかのように、病的状態における空間の構造の変化を論じようとする。

（3）　二つの空間の重なり

二つの空間は、通常の状態と病的状態それぞれにおいて、どのような関係を結んでいるの

だろうか。ミンコフスキーは、明るい空間と暗い空間とが、通常の生においては、非常にうまく調和し合っており、病的な性質は、これらの関係の乱れによってのみ成り立つと考える。まず、二つの空間によって形成される通常の空間の構造について確認してみよう。

> 空間を生きる二つの仕方の間の関係は、明るい空間が暗い空間によって縁取られているとか、そのなかにはめ込まれているとか言うことによって、最もふさわしく表現されるのではないだろうか。（TV 397）

ミンコフスキーは、通常の生においては明るい空間と暗い空間とが、前者が後者によって包摂され、額縁のように「縁取られている」とする。われわれはこれらの空間の両方を必要とするのだが、前述したように、暗い空間を生きるとき、この経験のなかでわれわれの「自己」は消え去ってしまうため、この空間の経験を経験として記述することはできない。通常の生において、暗い空間はわれわれにとってどこまでも「暗い」ものに留まるのである。しかし、それにも関わらず、ミンコフスキーは暗い空間について記述する。これは、どういうことだろうか。

この問いを検討するために、ミンコフスキーが「通常の生」の形式に続いて描写する、「病的な生」について追っていきたい。ミンコフスキーは、「病的な状態」における二つの空間の構造について、精神医学者フランツ・フィッシャーが上げる「精神分裂病」の患者の例を引きながら、次のように述べる[65]。

> 「わたしはまだ覚えているのですが」とこの患者は話した。「秋の景色が（彼はそれを目の前にしていた）、場所を変えないのに、もう一つ別の、非常に繊細で目に見えない、ほとんど確かめられないような空間に浸透されていました。この

[65] Franz Fischer, « Zeitstruktur und Schizophrenie » *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*. Vol. 121, 1929, p. 544-574. Et « Raum-Zeit-Struktur und Denkstörung in der Schizophrenie », *Ibid*., vol.124,1930, p. 241-256.

第二の空間は、暗く、あるいは空虚で、あるいは恐ろしいものでした。これらの表現のどれが一番真実に近いかを言うのは難しいです。あるときはある空間が動くように思われ、また、あるときはそれらは互いに貫き合いました。それらは、交叉し合い（s'entrecouper）ました。」（TV 397）

フィッシャーの患者は、ここで、ある空間への別の空間による浸透と交叉について述べる。日常的な「秋の景色」に浸入した「第二の空間」は、「繊細」で、「目に見えず」、「確かめられない」ものであり、また、「暗く」、「空虚」で「恐ろしいもの」である。さらに別の箇所でミンコフスキーは、患者たちが経験しているであろう空間構造について、次のように結論づける。

彼〔患者〕は、互いに解離（dissocié）し、重ねられた（superposé）二つの世界として、空間を存在している。（TV 388）

ミンコフスキーは、われわれの「通常の生」においては、明るい空間が暗い空間によって縁取られ、裏打ちされているのに対し、患者においては、これらの空間が「解離」[66]した上で、「重ねられる」と考える。さらに、ミンコフスキーはこのような空間の「解離」と「重なり」を、空間が「二分する（se dédoubler）」（TV 389）ことや、「重なり合い（*chevauchement*）」（TV 397）といった語によって言い換えている。このように、「病的な生」においては、「明るい空間」を裏地として支えていた「暗い空間」は、引き離され、この上に折り重なって来るのである。

---

66 野間俊一は、「否定の身体―現代精神医学におけるメルロ＝ポンティの可能性―」において、「解離症」を、「意味の意識」とそれを裏打ちする「生きられる意識」のあいだに解離が生じたものとして論じている。（野間俊一「否定の身体―現代精神医学におけるメルロ＝ポンティの可能性―」、『思想』No. 1015、2008 年第 11 号、p. 200-213 参照。）幻覚は統合失調症においても「解離症」においても起こるものであるが、これらは似ているようで全く違うものであるとされる。ここでフィッシャーやミンコフスキーが論じた患者について、診断の問題が残されているのだが、この点について詳しくは後述する。

ここまで、ミンコフスキーによって分析された「通常の生」と「病的な生」における明るい空間と暗い空間の構造についてそれぞれ確認してきたが、これらの比較によって、ミンコフスキーは何を示そうとしているのだろうか。われわれは上で、暗い空間を記述することの矛盾について指摘した。しかしミンコフスキーはここで、患者の言葉を借りることによって、暗い空間を記述しようとする。われわれは確かに、暗い空間を豊かな暗い空間そのものとして経験し、これを持ち帰ることができないだろう。この持ち帰るという経験には、後述するように、経験の奥行きや、通路の問題が含まれているのだが、このとき注目したいのは、患者にとって、この「暗い空間」を経験することが、あくまで「恐ろしい」（TV 397）ものであり、「虚無」（TV 397）に開かれているように感じられているという点である。すなわち、このとき患者にとって、包み込むことによって「わたし」と外との分節を可能にするはずであった「暗い空間」は、二つ目の世界として、確かな感触を持ちながら「わたし」の前に現れている。ざわめきに満ちた暗い空間から、明るい空間の折り重なりを見ること、また、逆に明るい空間の側に戻り、ここから暗い空間を見ること、こうした往復の問題が、『生きられる時間』の第二編の最終章から『コスモロジー』において焦点化されていく。

第二節　眺望の可逆

（1）明るい空間の名残

ミンコフスキーは、フィッシャーの患者においては、明るい空間が暗い空間によって侵入され、重ねられているのではないかとする。共通世界としての「明るい空間」に「暗い空間」が侵入することは、「恐ろしい」経験であり、この二つの空間の重なりにおいて、二つの空間の構造は変容してしまう。しかしながら、こうしたミンコフスキーの「明るい空間と暗い空間」論を引用し、これによって生のさらなる変貌の可能性を論じたのが、メルロ＝ポンティである。したがって本節では、メルロ＝ポンティによるこれら二つの空間についての論点を確認したあと、ミンコフスキーにおける空間の移行の問題に戻りたい。

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』（1945 年）の空間論の最終部分において、ビンスワ

ンガーやフィッシャーといったミンコフスキーと同時代の精神病理学者を参照しつつ、ミンコフスキーの『生きられる時間』における空間論を取り上げる。ここでメルロ＝ポンティは、幾何学的空間と人間学的空間、明るい空間と暗い空間をそれぞれ対比させつつ、人間学的空間に属するものとして、夢の空間、神話的空間、分裂病者の空間といったさまざまな空間について列挙し、並行して検討する。メルロ＝ポンティがここで論じた、暗い空間と明るい空間の関係性について確認してみよう。

メルロ＝ポンティは、ミンコフスキーの暗い空間と明るい空間の関係性について、次のように述べる。

> 暗い空間は、明るい空間と結びつくことによってしか、空間として正当化されもしないし、空間性の資格を満たすこともできない。（PP 334）

メルロ＝ポンティによれば、暗い空間の側から明るい空間との関係を見るときには、このように、暗い空間が空間として意識されるために明るい空間は不可欠なものであり、明るい空間なしには、暗い空間は「空間」という資格を得ることもできない。つまり、暗い空間は明るい空間の明るさを介したときに、経験されるのである。メルロ＝ポンティはさらに、次のようにも述べる。

> 彼〔患者〕は幻影を祓い、共通の世界に戻る手段をつねに明るい空間とともに保持している。幻影は明るい空間の名残（débris du monde clair）であり、それらが持ちうる威力のすべては、明るい空間から得ているものである。（PP 334）

メルロ＝ポンティはここで、通常ならば暗い空間による明るい空間への侵入の表現であると考えられる「幻影」を、逆向きにとらえ直す。すなわちメルロ＝ポンティにおいては、「幻影」こそが暗い空間における明るい空間の痕跡であり、むしろ共通世界との道を保持する証

とすらなる。これは、以下で確認するように、メルロ＝ポンティの哲学とミンコフスキーの精神病理学が繋がる、最も重要な論点である。これは、どういうことだろうか。

メルロ＝ポンティは、どのような場合においてもわれわれが、共通の世界としての明るい空間を保持していると主張するのだが、こうした視点は、ミンコフスキーにおいても、明確に示されている。こうした両者の論点の共通性は、人間と世界の構造的連帯が存在するとみなす点からやって来るものであり、ミンコフスキーの主張する「治癒可能性」の根拠となるものであると考えられるため、われわれはメルロ＝ポンティを本章において参照するのである。

幻影の侵入は、確かに現実の知覚と幻影のずれであると言えるのだが、このずれは、われわれと世界のあいだにある「何を」差し示しているのだろうか。幻影はわれわれに対し、われわれと世界のあいだにある「どのような」課題に応えようとしているのだろうか。この問題を考察するために、幻影の側、すなわち暗い空間にすっかり覆われてしまったように見えるときに、明るい空間が、どのように機能しているかを検討しなければならない。

ミンコフスキーは、次のように述べ、明るい空間の残存説について論じようとする。

> 科学がわれわれに強制する厳密な方法から逃れ、十分な根拠付けが与えられていない二、三の考察を論議の対象にしたいという欲求に抵抗しがたい場合がある。この欲求に譲歩すると、一体どのような危険を冒すのだろうか。せいぜい一つの思い違いをするだけであろう。もちろん、とりわけ、思い違いを過ち（faute）と同一視するならば、事は重大に見えるかもしれない。だがいつでも本質的に謀反者である自己にとって、絶対的に慎重な態度を取るために課せられなければならない制限に甘んじることは、難しい。自己は、後になって過ちを犯したことを認めなければならなくなることを承知の上で、思い違いを渇望することが、しばしばある。したがって、しばしば科学的知識だとしてわれわれに提示される区々たる心理の細片よりも、もっと価値のある思い違いというものが実際にはあるので

はないだろうか。（TV 382）

ミンコフスキーは、なぜここまで慎重に前置きした後で、明るい空間の残存説を論じるのだろうか。われわれはここに、回復や可逆の視点があるとみなす。すなわちここでミンコフスキーは、例えそれが思い違いであるとしても、幻覚を見てしまう患者が保持している「共通世界」を強調する。

> 脱社会化は、知覚される現実の全体にまで及ぶことはない。それはとうてい全般的なものとは言えない。幻覚現象のために、患者が自分の知覚の現実を疑ったり、知覚を彼の幻覚的世界のなかに取り込んだりすることはない。彼は従来通り、自分の眼の前にあるものを見、また話しかけられることを聴いている。彼は事物に思慮を払うことができる。このことは、彼がしばしば会話中に、「ちょっと待ってください。わたしたちが話している最中に、わたしにこれこれしかじかのことを語っています。どこからこんなことがやって来るのでしょう」と叫ぶとき、この上なくはっきりするのである。このように、幻覚は現実の知覚に重なり合っている。（TV 387）

これから見るように、この患者は確かに「脱社会化」されているとされるのだが、それは彼の「現実の全体」にまでは及ばない。なぜなら、彼は常に「知覚の現実」と、「幻覚的世界」という二つの空間を持ち、幻覚の現象によって、知覚されている現実の側を損なったりはしていないからである。彼において、現実としての明るい空間は、幻覚的世界に対し、残存したまま折り重なっているだけである。

（２）幻覚──三十八歳の画家

病理における現実との紐帯の残存について検討するために、ミンコフスキーがここであげ

ている患者の例を確認してみよう。

三十八歳の才能ある画家。慎ましやかな境遇に育ち、彼の作品に期待を寄せる実業家から、支給される給費で、パリで生活していた。彼は熱心に仕事に打ち込み、ものになると思われていた。ところが二年前に、行き詰まり、奇矯な態度を取るために、友人たちの注意を引くようになった。しばらくして、友人たちはわたしに患者を診察するように依頼して来た。わたしは何回も彼と面接した。以下は、彼が自分の状態についてわたしに話したことである。

1928 年 1 月 29 日。－それが始まったのは 1926 年の 7 月である。その頃彼は部屋を変えたが、突然話し合う声を耳にした。それ以来ずっと、間断なくそれを聞いている。これらの会話には、まるで誰かが針でも刺すような痛みがつきまとう。（中略）声は彼に自殺をそそのかし、拳銃のことを話す。また鼻から特殊な分泌物が出る。同時に、それは血であると声が言う。声は、「剃刀を取って、お前の苦しみにけりをつけろ」と言う。（中略）

2 月 8 日。（中略）彼が便所に行かなければならないことを、皆がどうして知り得るのか（笑う）。なんと馬鹿げたことか。彼が為すこと、考えることを、どうして皆は知っているのだろうか。（中略）声は彼に「おまえはもう自由を見出せないだろう」と言う。彼が床につくと、光が現れる。赤みがかった微光である。手の力が抜けるのを感じ、胸に灼熱感を覚える。声は言う。「あなたが N 街に住んでいたとき、わたしは 100 回も死にかけた。」彼は声を聴くと同時に、嘔吐をもよおし、胸に錘のようなものを感じる。「わたしは人々を絶滅させたい」と声は言う。

2 月 18 日。－一番つらいのは自由の剥奪である。光の現象は引き続き起こっている。昼間は、絶え間なく二つの点が見え、夕方には、プロジェクターの光のように、窓から寝床まで走る空色の光が見える。それは電灯が消えたときにも見

える。（中略）そして誰かが言う。「わたしはあなたにひびが入るまで、あなたを押しますよ。」声はまた言う。「もしあなたが手術を受けるなら、死を招くであろう。」言葉は、枕に頭をうずめているときでも、直接入ってくる。（中略）彼の周りには、四、五人の男がいる。彼は彼らを見るのだが、実在の人物を見るのとは少し様子が違う。彼らは一枚の面の上に見えるのであって、本当の身体のようには見えない。（中略）おそらく最も良い案は、警察に訴えて、この陰謀を止めさせることだろう。（TV 382-384）

この 38 歳の画家には、思考の伝播や幻聴、幻覚の症状等が現れているのだが、ここでミンコフスキーは、この患者の症状や病名の診断について、議論したいのではないことに注意を促す。

わたしはここで症状を類別したり、診断を論じたりはしない。われわれが関心を持つのは、全く別の側面である。わたしの患者と相対して座りながら、わたしは自分自身の思考を追い、よく知られた諸症状を書き留めるだけでは満足せず、わたし自身の心的活動を通して、これらの症状を了解しようと努力した。わたしは、患者を前にしてわたしが感じるものを観察し、われわれ二人の心的活動のあいだに存在すると思われた不一致を取り除こうと試みた。そしてそのときわたしは、各瞬間ごとに、生きている心理学（psychologie vivante）に裏付けられた精神病理学という、このーあえてそう言うならばー複式簿記（comptabilité double）のおかげで、さまざまの問題が眼前に提起されるのを見た。（TV 385）

ここでミンコフスキーは、この患者に対峙しながら、「精神病理学」全体の試みについて、問い直そうとしている。「精神病理学」の試みとは、「複式簿記」的な試み、すなわち常に二つの側面から起きていることを経験し直し、記述し直そうとすることであると定義されるの

である。すなわちミンコフスキーにとって、「精神病理学」とは、ある人間に「相対して座りながら、わたしは自分自身の思考を追い、よく知られた諸症状を書き留めるだけでは満足せず、わたし自身の心的活動を通して、これらの症状を了解しようと努力する」試みであり、彼の症状を書き留めると同時に、その症状に対する自身の「心的活動」を観察することの上に構成される。この相手への注意と自身の観察という「複式」（double）の試みは、観察されるものとされるもののあいだにある「接触」を、どのようなときにも形成しているのであり、このとき、「了解しようと努力する」試みは、互いのあいだに形成される接触面そのものであり、さらに、「了解しよう」とされた患者も、それを望んでいようが望んでいまいが、この試みに巻き込まれている。

この患者に対するミンコフスキーの見解について、さらに追ってみよう。ミンコフスキーは、続けて次のように述べる。

> 患者はわたしに、彼は外部から来る声を聴くと言う。わたしは彼を「了解しよう」として、彼を信頼するが、しかし彼が聴くと主張することが本当だとは信じない。それは幻覚だと思う。この考えは全く自然に起こるのである。いっときと言えども、わたしは自分自身の知覚の確かさについて躊躇することはないし、第三者に訴えて、どちらが正しいかを決めてもらおうとも思わない。（中略）確かに、彼は一度、彼の友人たちが彼と同じ声を聴いているのだから、それが聴こえているという仮定を述べたことがある。しかし彼はこの仮定の根拠を、友人たちの微笑に求めたのであり、自分がこれを聴いているのだがから、それが聴こえるところにいる他のひとたちも皆、彼と同様にそれを聴いているはずだということを、絶対的に確実で当然なこととして、認めたのでは決してなかった。わたしも同じようにそれを聴いているはずだと言って、わたしを説得しようとするような考えは、彼には思いつきもしなかった。（TV 386）

ミンコフスキーは、彼を「信頼」する一方で、彼が聴く声や、見る光について、「本当だと信じない」。ミンコフスキーが彼自身を信頼することと、彼が経験する幻覚を否定することは、並行して起こっている。そして、「自分自身の知覚の確かさについて躊躇することはないし、第三者に訴えて、どちらが正しいかを決めてもらおうとも思わない」と述べる。なぜなら、患者は自分に囁きかける声について、他の人もまた聴いていると考えたことは確かにあるが、それを「絶対的に確実で当然なこととして、認めたのでは決してなかった」からである。むしろ彼は常に、自分自身の見る幻影について、それが現実ではなく、幻であるとすることを、ミンコフスキーからの問いかけに巻き込まれながら、準備している。ミンコフスキーはさらに、次のように述べる。

> こうして、わたしの患者を前にしていると、彼においては、何ものも本質的に変化を受け入れたり乱されたりしないのであるから、病的な世界が形成されても健常な世界は何の損傷も受けない、という印象をわたしは受けるのである。(TV 387)

このようにしてミンコフスキーは、この患者には、幻覚と幻覚のない現実とが、オーバーラップしているという見解に至る。すなわち、患者においては、「明るい空間」と「暗い空間」の関係性が完全に変容しつつも、この変容においては、「明るい空間」が常に残存していると考えるのである。

「明るい空間」が残り続けるとは、どういうことだろうか。これは、患者がいつの日にか幻影を祓う機会を準備しているということなのではないだろうか。あるいは、患者が「明るい空間」を保持し続けているということは、この患者がそもそも「精神分裂病」ではなく、「解離性障害」(trouble *dissociatif*)(TV 387)であったということなのだろうか。診断名については議論しないとしつつも、ミンコフスキーは、この点についても、ここで確かに示唆している。では、ミンコフスキーが慎重に述べた「思い違い」の可能性とは、「精神分裂病」と「解離性障害」の診断のあいだで起こる、医師の誤診の可能性のことだったのだろうか。

そうであるならば、こうした誤謬の可能性とは、「精神病理学」の領域において、何を準備していたのだろうか。この問いを検証するために、もう一つ別の例を確認したい。

（3）進行麻痺―医師 L・M 氏

ミンコフスキーは、『生きられる時間』の第二編において、明るい空間と暗い空間についての「空間の精神病理学」について論じる前に、「進行麻痺」（paralytique général）の症例について検討している。「進行麻痺」は、真正細菌の一種によって引き起こされる器質的な疾患であり、それゆえ、一度侵された脳や神経といった器質は、物質面においては取り戻し得ないはずのものである。このような「進行麻痺」の患者に対し、ミンコフスキーは、マラリアによる発熱を利用する治療が有効でなかったことが判明した後に、患者と次のような会話を行う。

> 〔患者は〕マラリア療法が無効に終わった後、急速に大きな記憶障害を伴う完全な痴呆状態に陥り、時間的にも空間的にも全くのを見当識を失い、もはや人物の識別もできず、日常生活のごく些細な事柄すら留めることができないほどになった。（中略）これらの症状は患者がまず自己同一性を否定し、さらには自分の人間性を否定することから成り立っている。医師を職とする彼は一貫して自分は医師 L・M（姓名）ではないこと、人間ではないこと、一つの機械、あるいはむしろ全く何ものでもないことを断固として主張する。たとえ彼の不意をついたり、彼を混乱させたりしようとしても、彼につじつまの合わない面を作ることは決してできない。（TV 355-356）

L・M 氏において、マラリア療法は有効性を発揮せず、彼はやがて、自分がいつどこにいるのかに関する見当識を失い、さらに、自らが「機械である」と主張するようになる。このような状況の患者に、質問が行われる。

19.. 年 6 月 30 日…（こんにちは、L さん……）

わたしは L ではありません。人間ではありません。いいですか、わたしは地主でもなければ、人間でもない。全く人間ではありません。

（ではあなたは何ですか。）

何ものでもありません。何か一つの機械です。

（いつから機械なのですか。）

わたしは未だかつて人間であったことがないのです。L 氏はいました。彼は人間でした。しかし、今どこにいるのかわたしは何も知りません。わたしは L 氏がどこにいるか知らないのです。菩提樹の樹（患者の所有地）がどうなっているのか、知りません。どうなっているのか、わたしは全く知らないのです。誰かが一人の人間を抹殺したかどうか、菩提樹を取り除いたかどうか、わたしは知りません。いずれにしても、わたしは人間ではありません。

（いつからですか。）

わたしはいつも自分が人間ではないと言って来ました。どうしてここに入れられたのか、分かりません。わたしは人間ではないのですから。もし人間だったら、ここにはいないでしょう。菩提樹の庭は、L 家のものでした。しかしわたしは、人間ではありません。菩提樹の庭のことに関わる権利はありません。（TV 357）

ミンコフスキーの質問に対し、L・M 氏は、自分が人間ではなく機械であるとを主張し続け、毎日同じやり取りが繰り返される。さらに L・M 氏は、自分だけでなく、周囲の人たちもまた機械であると主張するようになる。

わたし〔ミンコフスキー〕に対し、わたしの腕と看護人の腕に触るように促してから、患者はわれわれが、患者と同様に機械仕掛けだと断言する。

「わたしたち三人は皆同じ種類のものです。機械工ならここに三つの機械仕掛けの人間がいる、と言うでしょう。」

別なときには、庭に腰掛けていた彼は、彼の向かいに座っている三人の老婦人患者たちを指差して、「あれはおばあさんたちですが、実はそうではないと思います。偽物の婦人たちの集まりなのです。」

（それでは、何なのですか。）

「婦人ではありません。端役たち（figurantes）です。わたしと同じように。」（TV 358）

このようにして、L・M 氏は少しずつ、「人間でない」と主張するものの範囲を、自分以外のものにまで広げていく。これをミンコフスキーは、『生きられる時間』第一編第四章において論じた「箱入れの原理」であるとする。L・M 氏は、もはや「人間ではない」のは自分だけではなく、また、ミンコフスキーや看護士、周囲にいる患者だけではなく、人間すべてであると述べるようになる。

いえ、それはもう L・M 氏ではありません。わたしにはもうフランス人としての意見もイギリス人としての意見もありません。わたしにはもはや祖国というものが全くありません。（中略）鉄道も何もかも終わりました。もう人間はいないのです。以前には発電機がありましたが、いまではほとんど全部破壊されています。L・M 氏は死亡しました。すべてのものは存在しません。フランスには、あらゆるもの、発電機、鉄道、エッフェル搭が作られました。しかし人間たちは、根絶やしにされました。

（わたしは彼に向かいの家を指差す。）

いえ、それは何でもありません。もう何の役にも立ちません。中に入れるものはもう何もありません。以前は客車がありました。ですが、もう中に入れるべき人

間がいないのです。以前には電気がありました。しかしもう、明かりを灯す必要はありません。もう何もないのです。（TV 359）

L・M 氏はこのように、人間の消滅を主張し続け、人間だけではなく、発電機、鉄道、エッフェル搭といった、フランスにおいて人間が作り上げてきた、あらゆるものがなくなってしまったとする。しかしながら、一方で過去においては、それらが「かつてあった」ことにも言及するようになる。

あの頃には少しは何でもありました。（中略）
（それはいつですか。）
それはみな L・M 氏が生きていたときのことです。そういったものが何でもありました。
（いつのことですか。）
1870 年代以降です。彼はそれらすべてを利用しました。彼は狩りに行き、アルプスに登り、書物や小説、何でも享受しました。いまは何もありません。ライチョウや兎がいました。通常の生活がありました。金貨があり、紙幣がありました。
（いつまでですか。）
彼は 50 代でした。1875 と 50（計算する）、1925 年までです。彼は埋葬されたにちがいありません。すべては終わったのです。世界の終末が来たのです。（TV 361, 362）

ミンコフスキーが何度も尋ねる短い質問に対し、L・M 氏は、すでに「世界は終わってしまった」と繰り返し続ける。しかしながら、すべては終わってしまったのであるにせよ、「かつてあったもの」についても、詳細に論述するようになっていく。

わたしは少しは本を読みました。わたしは小さな歴史書を何冊か持っていました。本を読むことを少しは楽しみました。

（L 氏には患者がいましたか。）

患者はいません。わたしは医師がどんな役割を果たしてきたのかを少しは考えました。わたしは数冊に分かれた古い歴史書をもっています。医者の役割について、少しはその本で読みました。それはフランスの歴史です。しかし、いいですか、このいま、彼らは無政府主義者になっています。大変なことになります。この歴史が危機に瀕しているのです。（TV 362）

ここで L・M 氏は自分のことを「わたし」と述べ、機械ではなく人間の L・M 氏であるかのように応答している。L・M 氏は、医師としてその役割について、歴史書から考え、かつ、今や医師たちが「無政府主義者」になったために、「大変なこと」が起きているという見解を述べる。

フランスには音楽がありました。フランスには電気がありました。フランスには針金がありました。フランスには科学がありました。フランスには水銀がありました。フランスには金がありました。これらのものがみんなありました。無価値ではなかったのです。フランスの役割は何だったのか、ローマ人の役割は何だったのかを、人々は論じています。

（では現在は？）

以前にはそれらのものがみんなありました。いまはわずかの金、わずかの水銀などが残っているだけです。人間が科学を持ち、電気などをもったという証拠は残っています。

（現在は？）

もうほとんど残っていません。しかし以前にはありました。（TV 363）

ミンコフスキーは、相変わらずL・M氏に短い質問を繰り返す。L・M氏はこれに対し、「いまはまったく何もない」状態になってしまったものの、以前には、フランスに音楽、電気、針金、科学、水銀、金、などの価値があるものがあったと主張し始める。これと並行して、少しずつ、それらのものが完全に「なくなった」のではなく、「ほとんど」残っていない、という述べ方に変化していく。ミンコフスキーは、このようなL・M氏に対して、次のような見解を持ち、さらに彼に質問を続ける。

> ところでわたしはもう一つ次のことに触れずにこの分析を終えることはでいない。わたしはすでにわれわれの患者においては否定念慮（les idées de négation）が首尾一貫した並外れた執拗さをもって持続することを述べた。全体としてはその通りである。（中略）しかしながら二度の違った機会に、慣用的な用語を用いると、妄想の訂正に当たる患者の態度をわたしは目撃した。次にこの二つの訂正を報告しよう。（TV 364）

L・M氏の使用する時制表現は、変化し、自らの年齢や名前について述べ始める。

> 「わたしは少し歩きました。多少疲れました。わたしは病院にいました。具合はよくありません。昨日熱が出ました。
>
> （もう少し話してください。）
>
> いまのところわたしは何も知りません。わたしは疲れています。それから……。
>
> （話が中断する。）
>
> わたしはその前から疲れています。治らないのが分かると憂鬱です。いつも何もできないというのは憂鬱です。わたしはいいところが何もないためにうんざりするのです。

（いつからですか。）

しょっちゅう憂鬱です。わたしは何かをしたいのです。いつも存在していたいのです。

（何をしたいですか。）

このままではいたくありません。

（年齢は？）

50 といくつかのはずです。（当たっている。）

でも自分に何もいいところがないというのは憂鬱です。52 歳か、53 歳、50 といくつかのはずです。わたしは 18…年 1 月 9 日に生まれました。もう思い出せません。70 歳ではありません、違います。（苦笑する）50 歳あまりです。

わたしは 1875 年に生まれました。いえ、わたしは 70 歳ではありません。

（あなたの名前は？）

L・M です。（TV 364）

このようにミンコフスキーは、患者において持続し続ける「わたしは人間ではない」、「フランスには何もない」といった否定念慮と並行して、L・M 氏がこれらを訂正し、自分の生まれや年齢、自分の名前について告白する場面を、鮮明に書き留める。

（あなたは誰ですか。）

（非常に断定的に）わたしは L・M で、菩提樹の庭の所有者です。そして C 家の人たち（彼の妻の家族）は卑劣な人々です。彼らは L・M がルイーズに梅毒をうつしたと言いました。菩提樹の庭は荒らされました。そして権利証書は焼き捨てられました。もしそれが二度、三度と重なると、L・M は復讐するでしょう。パリの家は完全に破壊されました。すべての借家人には予告していました。L・M は C 家の人たちを破滅させました。L・M はルイーズを破滅させました。（TV 364,

365）

このようにして、ここでL・M氏が最初の会話において、「菩提樹の樹がどうなっているのか知りません。どうなっているのかわたしは全く知らないのです」と繰り返していた理由が明らかになる。L・M氏は、自分の所有する菩提樹のある土地を巡って、妻であるルイーズの家族と争っていたのであり、この出来事に憤りを感じるとともに、彼女に梅毒をうつしたことに対し、何らかの感情を持っている。これは、ミンコフスキーによれば、L・M氏がルイーズとの婚姻関係そのものを否定していた点と比較しすると、「興味深い」（TV 365）点であるという。

ミンコフスキーはこうして、「進行麻痺」のL・M氏が保持している、過去の記憶や、否定という形で表される「社会的で生きられた性格」（TV 360）の残存に着目し、「機械である」などの彼が持っている観念を否定することなく、繰り返し短い質問を続け、また、「何もない」というときには、目の前にある建物を指し示して、彼に対して働きかける。こうしたやり取りの結果、L・M氏が、自分の言葉を訂正したり、自分の名前を告げたりする場面に立ち会うのである。

したがって、ミンコフスキーの臨床においては、ここでも、共通世界としての「明るい空間」の名残に関わろうという首尾一貫した仕方が示されていると言える。しかしながら、この途中には、ミンコフスキーが、「進行麻痺」であるL・M氏の保存された「社会的」なものに対し、これを「精神分裂病」の患者の言葉と比較する場面が挿入される。L・M氏が社会性を保有し続けるのに対し、ミンコフスキーによれば、「精神分裂病」の患者は、次のように述べるために、社会性をもはや保持していないという。「全世界に対して、アフリカに対して、オーストラリアに対しても同じように憐れみをもたなければなりません。」（TV 360）こうした「精神分裂病」の患者の言葉においては、要素の「隣接と並列（contiguité et juxtaposition）の関係」（TV 360）しかもはやないのであり、全世界とアフリカとオーストラリアがすべて等しい並列の関係性に圧縮される場合と、L・M 氏が示した「発電機、鉄道、

エッフェル搭」（TV 359）の順番に拡大される関係性とでは、全く異なる世界を生きているとミンコフスキーは述べる。

これについて、どのように考えればよいのだろうか。確かに、先に見た画家の例が「精神分裂病」ではなく「解離性障害」であり、L・M 氏の「進行麻痺」と「解離性障害」においては「明るい空間」が保持されている一方で、「精神分裂病」においては保持されていない、と考えれば、「精神分裂病」とそれ以外の病のあいだにある区別は強固になり、つじつまが合うかもしれない。しかしながら、それでは、ミンコフスキー自身が慎重に示した「過ち（faute）」の可能性とは、この程度のものだったのだろうか。そうではなく、ここには、われわれが本論第四章で検討したように、「精神分裂病」の区別についての医師たちの絶え間ない検討の上に積み重ねられてきた、「精神分裂病」そのものの変容の可能性が示されていたのではないだろうか。ここにはミンコフスキーが、診断や症状における誤謬の可能性を、明るい空間の残存の可能性とともに示すとき、ある「病」そのものが、やがて到来する未来において解体し、軽症化したり、あるいは消滅したり、別の新たな「病」の名前と混合していく可能性が示されているのではないだろうか。ミンコフスキーが渇望した「思い違い」とは、ある「病」が未来において、新たに問い直され、新たな形態を獲得するような、変容の到来だったのではないだろうか。われわれの世界においては、「病」を含むさまざまな形態が、どのような小さな単位であろうと、自らを新たに更新し直そうとして、模索を続けているのではないだろうか。

（4）昼の世界と夜の世界の往来

こうした可能性を問うためには、そもそも「病」という生における「否定性」の問題が、どのようにしてわれわれの生に現れるかについて、検討する必要がある。メルロ＝ポンティは、コレージュ・ドゥ・フランスの 1954 年から 1955 年度の講義において、主体における「障碍」や世界の「否定性」の問題について触れているので、これを参照したい。「受動性の問

題―眠り、無意識、記憶」[67]と題された講義の冒頭において、メルロ＝ポンティは、次のように問う。

> 主体がいつか障碍に出会うということを、どう考えればよいのであろうか。（RC 66）

この問いについて、メルロ＝ポンティは次のように答える。

> 睡眠中に行われる世界の否定は、やはり世界を維持する一つの仕方なのであり、したがって眠れる意識はまったくの無への退行ではなく、それは過去と現在の名残（débris）に満ちており、それと戯れているのである。（RC 68）

メルロ＝ポンティは、主体の障碍、すなわち幻影などの精神疾患といった世界の否定性は、世界を維持するための一つの方法であると考える。つまり、明るさの側から見れば否定としての暗さこそが、世界が立ち上がるための軸となっているのであり、それだけではなく、夢の側から見れば、そこには明るさの名残が満ちているともするのである。つまり、夢の世界もまた明るさを軸に構成されているのであり、われわれは両方の世界を行き来している。

では、ミンコフスキーにおいては、このような経験の可逆的なとらえ直しは、どのように論じられるのだろうか。ミンコフスキーは、『コスモロジー』の第 14 節「ランプに灯をともす」において、夕暮れにおける、昼間の世界から夜の世界への移行と、夜の世界から昼間の世界への移行について、順番に考察を行っている。

> われわれが検討したいのは、ある世界から別な世界へのこの往来（passage）で

[67] Maurice Merleau-Ponty, *Résumés de cours (Collège de France 1952-1960)*, Paris, Gallimard, 1968. 以下、引用の際には RC と略記し、その後ろに当該ページを記す。

ある。（VC 156）

この夜の世界から昼間の世界への移行における経験の往来について、さらにミンコフスキーは、次のように述べる。

> 暗さが明るさに代わるとき、問題となるのは、以前からそこにあったのに見なかった物を、光がその環境で見えるようにするということではない。そうではなくて、世界全体が局面を変え、新しい法則に従って、さまざまな移行の放つ閃光のなかで、ただ明るさの世界に固有な有形性の意味が明らかとなる。この移行（transition）の瞬間に、物体がわれわれの眼前で、いわゆる発生状態のなかで結晶する（se cristalliser）その有様を示すには、「具体化する（prendre corps）」という表現はこの上なく好都合に思われる。（VC 157）

ミンコフスキーはこのように、夜から昼間への移行の瞬間においては、「形をなす」ことが問題となるとする。また、この「移行」とは、「見-ないことから見ることへの往来（passage du non-voir au voir）」（VC 154）であるとも表現される。

（５）目でものを見るのか

では、夜の世界から見える昼の世界の様子について確認してみよう。『コスモロジーへ』の 12 節に、ミンコフスキーは、「われわれは目でものを見るのか（Voyons-vous avec les yeux?）」という一見すると、奇妙なタイトルを付す。ここでミンコフスキーは、夜の生の側から昼間の生を透かし見ようとするのであるが、この「われわれは目でものを見るのか」という問いは、『生きられる時間』の最後に描き出そうとした、暗い空間における「外的知覚に向けられたものとしての感覚器官」（TV 396）によらない感受と連結するものである。さっそく、この「われわれは目でものを見るのか」という節について、検討してみよう。

ミンコフスキーは第 12 節において、「生理的でない視覚」という、一見するとただ観念的な空想にすぎないような感覚を、すぐには語らない。ミンコフスキーは「生理的でない視覚」について記述するために、「生物学的な領域」（VC 133）及びに、そこにおける「恐怖（terreur）」（VC 133）や「動物的」（VC 133）なものを経由しようとする。なぜ、闇の空間における「生理的でない視覚」を語るために「生物学的な領域」についての検討が必要となるのだろうか。ミンコフスキーは、この節の冒頭で、見えることと見えないこと、及び視覚と非視覚の関係性についてしばし観念的に考察した後で、次のように結論づける。

> 肯定性（affirmation）と否定性（négation）の結びつき（union）はより親密なものに見えてくる。（中略）しかし、このような結びつきの特徴はどこからやってくるのだろうか。この問いに答えるために必要なのは、意識的に目を閉じて、いわば冷静に、かつ科学的な実験の名の下に事実の確認に頼ることではない。むしろ、失明もあり得るという考えがわれわれに吹き込む恐怖に照らし合わせることである。（VC 132）

ミンコフスキーはこのように、「視覚」の経験における「肯定」と「否定」の結びつきを検討するために、見える／見えない、視覚／非視覚の二項対立を、今見えているものが見えなくなると想定した瞬間に立ち上がる、「動物的」な「恐怖」の次元まで下ろそうとする。この「恐怖」を感じるとき、われわれは、われわれの生に「否定性」が切迫していることを確認するのである。このようにしてミンコフスキーは、物が見える状態と見えない状態、すなわち「肯定性」と「否定性」の親密な結びつきが、観念的に理解されるものではなく、「恐怖」を介して直接的に「感じられる」ものである点に着目するようになる。

さらにミンコフスキーは、「否定性」について次のように述べる。

> われわれの有機体（notre organisme）が一言で言えば傷つき得るといったような

事実が、日頃、身体的な自己（le moi corporel）と呼ばれているものの意識の基礎を成している。（中略）不在の意識（la conscience de l'absence）、すなわち否定が生の生物学的な諸条件に関するあらゆる経験の構成要素となっている。（VC 134）

ここでミンコフスキーは、われわれが「傷つき得る」という事実が、「身体的な自己」の「意識の基礎」となっているとする。この可傷性は、身体的な自己の意識において、「不在」や「否定」として、常にまとわりつき、切迫している。観念的実験によってはたどり着くことのできなかった「肯定性」と「否定性」の「結びつき」は、「恐怖」や「可傷性」という身体的・生物学的なものを通して示されるのである。

こうしてミンコフスキーは、「明るい空間」と「暗い空間」や、「肯定性」と「否定性」とによって結ばれ、編まれる一枚の織地を、人間的なもののみならず、動物的なものの領域まで拡大する。

人間にも動物にも同じく固有なものであるこの恐怖には、まぎれもなく「動物的な」何か（quelque chose « d'animal »）がある。この動物的な何かは、恐怖に「生物学的」な事象の性質をただちに与えるものであり、また、（中略）われわれの生（vie）を構成している諸現象の総体の内において場を割り当てられるものである。（VC 133）

「動物的」なものとしての「恐怖」は、このように、われわれの生において場を割り当てられ、これを構成する。このようにして、『生きられる時間』において、明るい空間すなわち「社会化された空間」との対比を通して描き出された「暗い空間」は、『コスモロジー』においては、「生物学的領域」を介して「否定性」として描かれ、よりわれわれに原初的に張り付くようになる。われわれがわれわれに似たものだけではなく、他の生物たちとも結ばれていることを、われわれは「恐怖」を通して省みることができるのであり、これによって、他者や

生物たち以外の「何か」にまで明るい空間と暗い空間の成す織地が拡大され得る可能性が、密かに示されるのである。

（6）視覚による経験の合一

「目でものを見るのか」という問いにおいてミンコフスキーは、『生きられる時間』で取った手続きとは異なる手続きを取りながら、暗い空間を描こうとする。『生きられる時間』においては、暗い空間の考察の前に明るい空間の考察が経由されたのであり、ここで両者は、対称関係を成しながらわれわれの「生」においてはめ込みの構造を持っていることが描かれた。一方、『コスモロジーへ』においては、まず「生物学的領域」の記述が介される。この領域は「肯定」と「否定」、われわれの「生」における暗い空間と明るい空間がせめぎ合う領域であり、ここでは、『生きられる時間』で取り上げた患者の「病的世界」における、二つの空間による「オーバーラップ」（TV 397）が、まさに生起しつつあるところで押し止められている。しかしながらこの切迫は、恐怖とは全く異なる暗い空間の「豊かさ」に、いままさに繋がろうともしている。ミンコフスキーは、次のように述べる。

> そこには目に見えるものがあるのだから、たとえ器官や特殊な装置が問題にならなくとも、わたしにそれが見えるということはまったく自然なことに思われる。もちろん、この「わたし」とは特殊な身体組織と結びついた自己のことではない。自己がそこにある限り、すぐさまその無尽蔵な豊かさを探り出してくれる生そのものに関わる自己だけを指している。（VC 140）

このように、われわれが「器官や特殊な装置が問題にならない」仕方で「見る」ときには、「自己」は「無尽蔵な豊かさ」に繋がろうとする。なぜなら、「暗い空間」に切迫された「自己」は、その切迫を受けながら、感覚によらない「見える」ことの豊かさを探り出そうと模索することを、まるでそれが「自然なこと」であるかのように、止めることができないから

である。

ミンコフスキーは、こうした感覚によらない視覚によって成し遂げられる、世界と自己との「コミュニオン（communion）」について、次のように述べる。

> いまや、世界は、いかなる点においてもわれわれに働きかける（affecter）ことはない。しかし、世界がわれわれに現前するように、また、われわれが世界にわれわれを現前させるように、われわれは対等に世界と合体する（communier）。（VC 139）

見ることのできない「見る」において、世界は、「コミュニオン」すなわち、「いかなる点においても働きかけない」形式によって到来する。ここには、世界への無能、麻痺によってこそ繋がる、広い空間がある。

このような麻痺におけるコミュニオンについて、メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』において、「感覚」という語を用いながら次のように述べている。

> 感覚は、文字通りコミュニオンに他ならない。（中略）反省はそれに先行する非反省的なものを明らかにし、自らを始まりして自身が理解し得る可能性を示さなければならない。（中略）われわれが感覚を共存としてあるいはコミュニオンとして定義することによってなしているのは、そういうことである。（中略）感覚は十分な明瞭さによって構成されるのではなく、潜在的なままにとどまる一種の知によって再構成されもしくは取り戻される。（PP 246-247）

メルロ＝ポンティはこのように、「感覚」を「反省」とそれに先行する「非反省的なもの」の「コミュニオン」として定義する。すなわちメルロ＝ポンティは、反省が反省されないままに留まっているものを取り上げようとする試みにおいて、「暗い空間」と「明るい空間」

との浸透し合う「コミュニオン」を成すとみなすのである。

さらにメルロ＝ポンティはこの「コミュニオン」について、『知覚の現象学』において次のようにも述べる。

> あらゆる感覚は、夢（rêve）や離人症（dépersonalisation）の萌芽を含んでおり、これをわれわれは、それにすっかり身をゆだねるときに陥るような種類の麻痺（stupeur）を通して体験する。（PP 249）

このようにメルロ＝ポンティは、あらゆる「感覚」のなかに、「麻痺」としての明るい空間と暗い空間の交叉、すなわち明るい空間における「夢」や「離人症」の萌芽を読み取る。この萌芽は、暗い空間によって培われる、醒めながら見る夢の萌芽である。こうして、二つの空間における自己と自己のずれや交叉は、われわれに目覚めたままで夢を見させ、麻痺によって世界を感じることを実現させる。ミンコフスキーとメルロ＝ポンティは、この麻痺を、「コミュニオン」における世界への無為として記述した。これこそが明るさと暗さの「視覚」的結合がやがてもたらす世界の展望であり、これから論じるように、視覚を問題にした際に現れるわれわれと世界の紐帯でもある。

第三節　明るさ、透明性、闇

（1）ランプに灯をともす

ここまで、明るい空間と暗い空間という、二つの空間の移行の問題が、常に切迫した恐怖を経由した先に広がることが示された[68]。すなわち、経験と経験は、これらを結びつけた先

[68] 霜山徳爾は、ミンコフスキーが、『コスモロジー』を書き上げた戦間期において、ナチズムの興隆を間のあたりにしながら、逮捕されることへの「不安」を常に抱え続けていた点を指摘している。（霜山徳爾「ミンコフスキーへのオマージュ―「精神のコスモロジーへ」補講」、『霜山徳爾著作集３　現存在分析と現象学』所収、学樹書院、2001 年、248 頁）。また、ナチズムへのミンコフスキー自身による言及については、次のものがある。Eugène Minkowski, « Les conséquences psychologiques et psychopathologiques de la guerre et du nazisme », *Archives suisses de neurologie et de psychiatrie,* LXI, 1948, p. 279-302.

で瓦解し、新たな眺望を開き始める。ここでわれわれは、「移行」が長い時間の堆積の上に結実する出来事のみならず、ごく些細な日常の経験のなかでも起こることを確認したい。すなわち、メルロ＝ポンティが存在論において示した「諸経験間における、一つの経験から、もう一つ別の経験への移行（transition）、あるいは変貌（métamorphose）」（VI 192）という内奥の変容可能性は、長い時間をかけた「病」の概念の上での出来事のみならず、些細なものの上にも与えられているのである。

ミンコフスキーは、明るい空間から暗い空間へと移行することの困難について、次のように述べる。

> 暗い空間から明るい空間への往来（passage）を、たった一言で表すことはできない。それはおそらく、日常言語（langage courant）が行動（l'action）や明るい空間を表現するのに適していてはいても、この移行を端的に表現するのに適していないことに基づいている。（VC 159）

ミンコフスキーは、「移行」の問題について、これが日常言語によって取り上げることが適していない点に注意を払いつつも、それでもなお、日常的な出来事を例に取りながら、取り上げ直そうとする。また、ミンコフスキーにとって日常言語が「行動」とともに、「明るい空間」に属するものである、としている点についても注目したい。後に見るように、「日常言語」は暗い空間を直接的に言い表すことはできないし、また、これから確認する、もう一つの明るい空間についても、そのまま言い表すことができない。しかしながら、二つの空間は共働して、日常的な経験をもたらすのである。

ここでミンコフスキーが取り上げる例は、夕暮れどきという日々われわれが経験する時間である。

> 夕暮れどきの薄暗がりがわたしの仕事部屋を包むころになると、わたしは腰を上

げ、ランプに灯をともし、それからまた執筆を続ける。（中略）光は欠かせない。（中略）その点、闇は困惑でしかない。ただし、この困惑はランプに灯をともせば解消される。（VC 154）

ミンコフスキーはここで、経験間の移行の問題を、「夕暮れ」という時間のなかで考察する。ミンコフスキーによれば、われわれは、日々、昼間の生から夜間の生への移行を経験している。しかしこの移行は、ランプに灯をともすことを通じて、昼間の空間に再帰する。これはどういうことなのだろうか。この「往復」について、ミンコフスキーはさらに次のように述べている。

たまたま何かの事情で、日常的生の現実に呼び戻されてランプに灯をともしても、自分の仕事をするための好都合な条件をとり戻すことや、明白で正確な知覚を表象にとって代わらせること、一言でいえば、ものを見ることは、わたしにはもはやどうでもよくなるだろう。むしろ、それよりも重要なのは、ある世界から別な世界へ移ること（*passer d'un monde dans un autre*）である。（VC 155）

灯りがともされた瞬間、ランプは、「自分の仕事をするための好都合な条件をとり戻す」という目的のもとに従事していたはずである。しかしここでミンコフスキーは、昼間の条件の「取り戻し」という、このランプが従事していたはずの目的を留保してしまう。すなわちここで重要なのは、かつての状態の「取り戻し」、すなわち完全に遡行するような回復ではなく、「移ること（passer）」そのものであるとする。

われわれが明るい空間から暗い空間へ移り、そこで再び灯りをともすとき、もはや、かつての光の空間において、「ものを見ること」を完全に回復することは問題とはならない。ミンコフスキーはここで、ランプの灯を灯す時間を、かつてあったはずの空間の十全な復元ではなく、取り戻しつつも何かが移り変わっているという、ずれの経験のなかでとらえ直そう

とする。ミンコフスキーは、このずれについて、次のように記述する。

> 移ること、それはつまり、夜の特有な性格すべてと夜のうちにある積極的なものすべてをもって夜の世界から抜け出し、光の世界のうちにある積極的なものすべてと同時におそらくは否定的なものすべて—もっとはっきり言えば、光の世界の限定されたものすべて—をともなって光の世界に戻るということである。（VC 155）

ミンコフスキーはここで、「移ること」とは、「夜の世界から抜け出す」ことであり、かつ、その際に「夜の世界」における「積極的なもの」すべてを持ち帰って来ることであるとする。さらにここで重要なのは、後半部分である。ミンコフスキーは、自己の経験の移行において、ランプに灯をともしながら暗い世界から明るい世界に戻る際に、「光の世界」に戻るにも関わらず、「光の世界」から持ち帰ったものを携えながら、「光の世界」に戻るとしているのである。これはどういうことなのだろうか。ミンコフスキーによれば、灯を灯す際に、再び経験されるはずの「光の世界」は、かつてのものとは、ずれたものである。なぜなら、この移行においては、「夜の世界」から「光の世界」への移行のみならず、「光の世界」から別の「光の世界」への移行という、多層的な移行があるからである。すなわち、ここで述べられている「光の世界」には、第一のものと、第二のものがあるというのである。

ミンコフスキーは、上の引用に続けて次のように述べる。

> 光の世界は、あらゆるものの尺度（mesure）として現れてくるどころか、何よりも行為の遂行を中心としているので、われわれにとっておそらく無数にある生命の局面のなかのたった一つの局面に過ぎなくなる。（VC 155）

かつて、『生きられる時間』において豊穣かつ固有な自己の暗い空間に対比され、他の主体

と自己とが共有する空間として描き出された明るい空間は、ここでは、「光の世界」という、より広々とした語によって表現される。さらに、この明るい空間は、二層化する。第一の「光の世界」は、ありとあらゆるものの「尺度」の世界である。そして、第二の光の世界は「行為の遂行を中心」とした、輝かしい世界である。しかし、これらはそれでも、「無数にある生命の局面のなかのたった一つの局面」に過ぎない。なぜなら、ここではまだ見えないが、暗がりの世界が残っているからである。

（２）透明な世界と形の世界

ここで、ものの「尺度」としての、第一の明るい空間について確認したい。ミンコフスキーは、透明な世界について、次のように述べている。

> 〔暗い空間の〕この特殊な濃密さ（compacité）は、明るい空間で形をなすすべてのものにその対象を移そうと、明るい空間へ移行するときに消えてしまう。そして、空間それ自体はより澄んで（limpide）、透明に（clair）なるが、それだけ触知（palpable）し得なくなる。空間は、そのなかで形をなすものの前では消え去り、ただその支え（viatique）となってしまうようだ。しかし同時に、生の特有な現れに見られる豊饒さをすべて包含することで、展開し、その周囲に広がり、そして、たっぷりとしたものになり、広々とし、地平的になって、それ自身のうちに展望を持つ。（VC 160）

第一の明るい空間は、第二の明るい空間にあったはずの、個別の「形」が消え去り、これらが見えなくなってしまうような空間である。かつこの第一の明るい空間は、「澄み切って」、「透明であり」、「触知」することができない。そして、この触知し得ない第一の空間は、輪郭を持つ第二の空間の「支え」となって、われわれの世界を裏側から支える。ミンコフスキーの言葉にそのまま従えば、形の「現れ」のすべてを、「地平」として包み込み、「展望」を

形成するのを助けるのである。

ここには確かに、『生きられる時間』には書かれなかった、ミンコフスキーの存在論がある。ミンコフスキーは、『生きられる時間』においては、不透明でざわめきに満ちた何かを、「暗い空間」とし、これに対する公共的空間として、「明るい空間」を対置させていた。しかし『コスモロジー』においてミンコフスキーは、「明るい空間」をさらに二つに分け、第一の明るい空間を、透明な層とし、第二の明るい空間を、輪郭を持つ空間とする。

（３）理念の透明性

では、このようなミンコフスキーによる明るい世界の二層化は、彼のコスモロジーにおいてどのような意義を持つのだろうか。この点を明らかにするために、われわれは再びメルロ＝ポンティを参照したい。明るさの二層化の視点から、再びメルロ＝ポンティの存在論を見返すとき、浮かび上がって来るのは、ミンコフスキーとメルロ＝ポンティによって共有されていた世界の内的紐帯の問題である。われわれはまずミンコフスキーにおける内的紐帯について確認し、再びミンコフスキーのコスモロジーへこの問題を投げ返す。

メルロ＝ポンティは、『見えるものと見えないもの』において、次のように述べる。

> われわれはここで最も困難な問題に触れる。すわなち、肉と理念の紐帯（lien de la chair et de l’idée）、見えるものと内的骨組の紐帯（du visible et de l’armature intérieure）の問題である。見えるものにおいて紐帯は現れ、また、隠れる。（VI 193）

メルロ＝ポンティは、ここで、最も困難な問題として、現れながら隠れる、「肉と理念の紐帯」と、「見えるものと内的骨組の紐帯」について示唆する。

> 見えるものと見えないものとの諸関係を見定め、感覚的なものと対立するのではなく、その裏地（doublure）であり奥行（profondeur）であるような理念を記述す

るという点で、プルーストほど徹底した人はいなかった。（VI 193）

この引用部分からは、見えるものと見えないものの結ぶ関係が、肉と理念、見えるものとその内的な骨組み、感覚的なものとその裏地や奥行としての理念、という、二つの互いに引っ張り合う関係性によって構築されているという点が示されている。しかしながら、もちろん、問題はそう単純ではない。メルロ＝ポンティは、次のようにも述べているからである。

> 「小楽節」や光の理念は、「知性の理念」と同様、その現れによって汲みつくされはしないし、ただ肉的経験のなかでわれわれに理念として与えられうるだけである。それは単に、われわれが肉的経験のうちにそれらの理念を考える機会を見出すだけのことではない。それは、それらの理念が、その権威と、魅惑的（fascinante）で破壊不可能な（indestructible）力について、まさしくそれらが感覚的なものの背後ないし中心に透けて見えていることから得ているということなのだ。（VI 194）

メルロ＝ポンティはここで、プルーストの『失われたときを求めて』で登場するヴァントゥイユのソナタの小楽節について引用する。理念はわれわれに対して、上方から下方へと、ただ一方的に与えられ、押し付けられるようなものではない。小楽節の理念は、「肉的経験」としてわれわれに経験されるとき、その汲みつくし得ない力を垣間見せてくれるものであり、かつわれわれにその理念の経験をもたらすために、見えるもの、すなわち「感覚的なもの」を求めている。なぜなら、見えない理念は、見えるものの側から活気づけられているからである。

> 理念とは、この水準、この次元なのであり、したがってある対象の後ろに隠れた対象のように事実上見えないものでも、また見えるものと何の関係もない絶対的

> に見えないものでもなく、この世界の見えないもの、つまりこの世界に住みつき、それを支え、それを見えるものにする見えないもの、この世界の内的で固有な可能性であり、この存在者の＜存在＞なのである。（VI 196）

理念はこうして、同一性の反復を保障する水準となり、見えるもののなかに、＜存在＞として住みつくようになる。理念の世界への住みつきは、無限なものの有限なものへの受肉であるともいえるが、もはやメルロ＝ポンティにおいて、有限なものなき自律的な無限性という審級は存在しない。見えないものは、見えるものの牢にとらわれているわけではなく、これを糧にして「生きている（elle en vit）」（VI 198）からである。

（４）暗い塊

しかし、この見えるものと見えないもの、理念と感覚されるものとが取り結ぶ、一見すると完全な関係性を、おびやかし、かつ、密やかに取りもっているものがある。「肉」である。われわれは、ひとまずこれを、メルロ＝ポンティにしたがって、「塊（マス）」と呼びたい。

> われわれが肉と呼んでいるもの、内側から細工されたこの塊（マス）は、いかなる哲学でも、名前を与えられてはいない。客観と主観との形成媒体（milieu formateur）としてのこの塊（マス）は、存在のアトム、つまりある特定の地点と時点とに位置する堅固な即自ではない。（中略）肉は、エレメント（élément）として、一般的存在様式の具体的シンボル（emblème concret）として考えられなければならない。（VI 191）

肉と呼ばれているもの、すなわち塊（マス）は、われわれがかつて哲学史のなかで見かけたことのなかったものである。肉は、理念と対置されてきた「質料（matière）」でもなく、「精神（esprit）」や、ましてや「物質（substance）」でもない（VI 181）。この塊は、確かに、理念と客観、すなわち理念的客観性と、個別の主観的光景たちの間を取り持つような、「媒体（milieu）」で

あるだろう。しかし、正確な意味では、決して媒体ではない。なぜなら、この塊は、確かに理念と個別の存在者の関係を結んでいるが、この結び目そのものは、前の引用で見たように、感覚的なもののなかにしかないからである。すなわち、肉は、二つの層の結び目を、理念といっしょになって、感覚的なものにもたらすような働きをしている。肉とは、見えるもの側から、見えないものを透かし見たときに、見えないものを引き込んでいる後ろむきの力そのもののように振る舞っているものであり、その性質上、力というよりは、「無能（impuisssance）」や、「絶え間ない後ずさり（dérobade incessante）」（VI 192）としてしか証言され得ない。肉は、見えるものに対し、見えないものを引き込む奥行をつくってやる「絶え間ない重力（l'interminable gravitation）」（VI 191）であると言える。したがって、肉とは、見えるものの重みであり、理念が「見えない」こととは、まったく別の類の「見えない」に属する。ここでわれわれは、一旦、このような肉の不可視性を、理念が「透明」であることに対し、蠢く暗がりとして設定してみよう[69]。

（５）記憶の闇

この、肉の動的な闇について、確認してみよう。例えばメルロ＝ポンティが引用しているように、『失われたときを求めて』において、スワンはヴァントゥイユのソナタの美しさに魅了されるが、スワンがこのソナタから受け取ったのは、「神秘的な実体（la mystériuuse entité）」[70]であった。このソナタの小楽節は、五つの音符で記譜することができるのだが、もちろん、小楽節そのものは、楽譜に記すことができるような五つの音符には、還元され得ない[71]。しかしメルロ＝ポンティが注目するのは、それでもなお、この小楽節の記号が、ま

[69] ルノー・バルバラスは、肉の持つ運動性に着目し、「欲望の運動（le mouvement du désir）」の現象学を展開している。欲望の運動は、「実現不可能なものの実現（réalisation d'un irréalisation）」として、生そのものを未完の動的総体として活気づけるだろう（Renaud Barbaras, *Introduction à une phénoménologie de la vie*, Paris, Vrin, 2008. ）。しかしながら、われわれはここで、肉の運動が、透明性とは異なる見えないものを含んだ蠢きであることを強調するために、この蠢きの「暗さ」を強調したい。

[70] Marcel Proust, *À la recherche du temps perd II*, Paris, Gallimard, 1954, p. 189.

[71] 「ヴァントゥイユのソナタの小楽節」は、モデルとして、フォーレ、サン＝サーンス、フランクのヴァイオリン・ソナタや、あるいは、フォーレのバラードなどソナタ以外の楽曲が、草稿や献辞の研究からあげられている。（Jean-Jacques Nattiez, *Proust Musicien*, Paris, Christian Bourgois, 1984. およびに

ったく「無益なもの（inutile）」（VI 198）ではないという点である。五つの音符は、無益であるどころか、記号と記号、すなわち光と光の間の、すき間にある「裂開（déhiscence）」（VI 199）へとわれわれを導く。

> 理念はそこに、音の後ろあるいはそれらの間に、光の後ろあるいはそれらの間にあり、しかもそれらの後ろに隠れつねに特殊で独自なそれぞれの流儀によってそれと知られるようにしながら、それらの後ろに立てこもっている。（VI 195）

このように、五つの音符が指し示す、ソナタの小楽節の普遍性は、音と光の世界から見れば、後ろに立てこもる理念のように見えるだろう。しかし、実は、ソナタはいつでもどこでも、時間も空間も超越したものとして存在し続けているわけではない。なぜなら、ソナタの理念は、音と光の側から見返されるときにはいつでも、肉といっしょになってわれわれに戻って来るからである。この点についてメルロ＝ポンティは、この少し前で、もう少し詳しく、次のように述べている。

> 理念の肉的な組成（texture charnelle）は、すべての肉に欠けている組成をわれわれに見せている。それは、不思議にもわれわれの眼下に、線引きする者もなしに引かれる航路であり、ある種のくぼみ、ある種の内部、ある種の不在、何ものでもないような否定性なのだ。（VI 195）

結び目の側から見返すわれわれにとって、透明な理念は、いつでも、肉的な経験のもとにもたらされる。理念のほうに目を凝らせば、それは、肉の持つたくさんの穴のなかに詰まっているようにも見えるし、肉のほうに目を凝らせば、理念は透明で、見えなくなり、欠けた穴

Anne Penesco, *Proust et le violon interieur*, Paris, Les Editions du Cerf, 2011. 参照。）これらの研究から、プルーストは特定の一曲からというよりも、複合的な楽曲のイメージから「ヴァントゥイユのソナタ」を作り上げたと考えられる。

だけが肉に対し、空いているように見える。このような、「多孔性の（poreuse）」[72]の肉は、プルーストにおいては、「精神」をたっぷりと含み、自己の経験を、記憶という名で保存してくれる媒体である。これらのたくさんの穴は、線の引いたもののいない「航路」であり、「くぼみ」であり、ある種の「内部」や「不在」、すなわち「否定性」として、自らの退きによってのみ、われわれに、ものの汲みつくしえない力を見せてくれる。

再び、本節の冒頭の引用に戻れば、われわれは、紐帯をもっている。一つ目に、闇としての肉と理念の結んでいる紐帯である。この紐帯は、見えるものや感じているもの、すなわち、個別のわれわれ自身のなかにある。もう一つは、見えるものとその内的骨組の結ぶ紐帯である。ここで、内的骨組みとは、見えるもののなかに結実する、理念の透明性と、肉の闇の交叉の仕組みそのものである。見えるものは、理念と肉という見えないものたちに対し、自らを捧げ、その結び目となることによって、それらが結ばれてあることを示してやるという約束を取り交わしている。

（6）生きられる三幅対

ここで、われわれはようやくミンコフスキーに戻ることができる。まず、問題を振り返りたい。ミンコフスキーは、昼間から夜へ、さらにまたランプによる光の空間に移るという経験のなかで、明るい空間を二つに分化させた。すなわち、個別の形の世界と、透明な支えの世界である。

ここで注目したいのは、この移行という時間の経過にともなって、空間の層が分化し、膨らんでいくという点である。まず、昼間の生は、闇を知らなかった。疲れを知らず、闇の重みも知らない。しかし、夜になると、昼間可能であった活動が制限される。このなかで動きまわろうとすれば、「わたし」は、身体をどこかに打ち付けたり、文字を読んだりすることをあきらめざるを得なくなるだろう。夜の時間に、「わたし」は昼間のことを思い返したり、あるいは、夜の声に聴き入ったりする。夜の経験は、昼間から折り返され、夜の経験に再帰

72 Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu III*, Paris, Gallimard, 1954, p. 887.

し、これを厚くする。そして、「わたし」は、夜の時間を抜け出す目的のもと、とうとうランプに灯をともすが、このとき、自己は、明るい空間に再び折り返されるように見えて、少しだけずらされている。もはや、「わたし」は、夜の時間を知らなかった昼間の「わたし」とも、ランプをつける以前の夜の時間の「わたし」とも、異なる経験を持つことになる。

このようにして、経験の移行に従って、「わたし」そのものが組み直され、全体が厚くなっていくことが分かる。いまや自己は、少し以前の時間の「わたし」とは、まったく異なるものになってしまう。

ミンコフスキーは、明るい空間と暗い空間の間にある移行の問題について考察したこの項において、最後に、「普遍性」を検討するために、「三幅対」に言及している。ミンコフスキーは、次のように述べる。

> われわれの考察は、ここで、心理的な三幅対（triade）の問題のなかで、この三幅対と空間の生きられる三次元性（tridimensionalité vécue）との関係を明らかにした際に、普遍性の可能的象徴として、「三である（être tois）」について述べたことに結びつく。この「三である」は、「一」と「三」の間に加えられる「二」を必ずしも想定しなくても、それとして認められるような普遍性の象徴なのである。（VC 161）

このように、層が三つであることは、ミンコフスキーにとって「普遍性の象徴」である。三元性は、「わたし」のみならず、これが組み込まれている世界を組み立てる仕組みであり、明るい空間で輪郭をもつ「わたし」が、暗がりの豊かな力と、ものの尺度としての透明な普遍性の力を得ながら、見えるものとしてあるためには、「わたし」を含めた三幅の対が必要なのである。

ここで強調されるのが、特に、普遍性としての、「透明な」明るい空間である。

明るい空間が、今度はそのなかで形をなすあらゆる特殊な事象を含み、その豊かさと普遍性として現れくる。画一性はいまやそれぞれ固有な価値をもつ多くのものに価値を譲る。この多様性こそが明るい空間にあるすべてのものを包含する能力であり、闇の深さに対比される、豊かさ、普遍性なのである。とはいえ、この普遍性は、二つの空間の質をいちいち検討した上で、明るい空間のほうに数多くの異なる質があると確認されたところから出てきたものではない。そうではなくて、容易にそれと認められるものであり、いかなる計算方法とも無関係である。（VC 161）

「透明な」明るい空間は、このように、暗い空間の豊かさとは異なる豊かさを持った空間である。『コスモロジー』で論じられる普遍性は、『生きられる時間』の明るい空間の性質で強調されたような、われわれを「一兵卒」に下らせるような、画一性の空間としては、もはや語られない。ここで普遍性は、貧しいものとしての画一性ではなく、見えるものが属する、第二の明るい空間のなかに結実されている、固有なものたちの豊かさを開いているのである。固有なものたちは、異なる質をそれぞれもつと同時に、そのなかでのみ普遍性の透明な力を透かしている。

ミンコフスキーが生涯を通して治療者であったことを鑑みれば、ミンコフスキーが示そうとして来たのは、やはり、「共通世界」との紐帯である。しかしながら、ここで言う「共通世界」とは、一面的なものではなく、暗い空間の厚みに伴われた「明るい空間」として編まれているものであり、ここに再帰してくる主体は、もはやただ何かを取り戻したものではなく、変容し、別の展望を見るものとなる。

第二章　「精神の哲学」としてのコスモロジー

前章において、臨床場面においてミンコフスキーが、「共通世界」との紐帯を、短い会話や、指し示しによって提示しようとしていたことが明らかとなった。この「共通世界」とは、透明な理念だけでなるものでも、わたしたちの形の類似性からのみなるものでも、共有不可能な暗がりからのみなるものでもない。言わば「共通世界」とは、これらが協働して形成している仕組みそのものである。ミンコフスキーによれば、われわれは、このような内的な仕組みや紐帯を、どのようなときも完全に失うことがないのであり、失ったとしか経験されられないときにも、それは部分に過ぎず、必ずこれを回復することができるという。ミンコフスキーは、この紐帯について、「コスモロジー」という語によって、より具体的に探求しようとしているので、本章では、この点について確認する。

ミンコフスキーは、分裂したものや切り離されたものが、ずっと奥の方では、共鳴している考え方を、「コスモロジー」という語によって表現している。この痕跡は、1936 年に出版された『コスモロジーに向けて』や 1948 年の口頭発表を下にした 1950 年の論文「人間的な接触」において示されている。こうした「コスモロジー」は、ミンコフスキーにとって、単なる一つの世界観ではなく、感覚と感情の連帯を示す隠喩表現や、日常の知覚から歴史上に残る絵画までを含む広い意味での作品概念のなかに、明確に現れるものであった。

本章では、まず、『コスモロジーに向けて』と「人間的な接触」において提示される、この「コスモロジー」の考え方について確認する。次いで、第四章において取り上げた、「癲癇性」について再び検討する。なぜなら、「癲癇性」とは、ミンコフスキーにとって、「癲癇」を特徴づける性質である以上に、個物と個物が激しく接触し、弾け飛び、新たなものが生まれ出る瞬間の名前であり、この瞬間こそが葛藤と呼ばれるからである。この葛藤は、その度ごとに、世界への新しい傷を記すのであるが、この痕跡は、やがて生きられる距離を伴ったものに変容し、調性を形成していく。この調性は、ゴッホの絵画において、われわれに問い

かけられた、一つの謎である。最後に、新しい傷として生まれた個体たちが、固有性を持ちながら共振し、世界を調和的な旋律で満たす様態を、ミンコフスキーによる「聴覚」についての記述から確認する。

第一節　同じもの

（1）精神の哲学

ミンコフスキーは、『コスモロジー』をルイ・ラヴェルの支援によって出版する。ラヴェルは、ミンコフスキーが自費出版をせざるをえなかった『生きられる時間』についての、特別に勇気づけられる書評を *Le Temps* 紙に寄せたという。これをきっかけに両者は交流を始め、ミンコフスキーは『コスモロジー』をルイ・ラヴェルとル・センヌによる「精神の哲学」叢書（la collection « Philosophie de l'Esprit »）[73]に持ち込む。ミンコフスキーはこれら二つの叢書が属する「精神の哲学」という潮流と、「スピリチュアリスム」、そして当時の精神病理学が属した「人間学」の潮流のそれぞれを、絡み合わせつつも、選り分けているので、まずは、ミンコフスキーによるこれらの分解を確認してみよう（VC 1, 2）。

ミンコフスキーは、フッサールの現象学と精神医学、さらに文学をも含み込んだ人間についての諸科学全体を統合するところの「人間学」を、自身の学問の全体を包括する広い分野とみなしていた。また、ミンコフスキーによれば、「人間学」のなかには「スピリアチュアリスム」が奥深くに吸収されている（imprégnér）という（VC 2）。さらにミンコフスキーは、「スピリチュアリスム」という名の立場よりも、ラヴェルとル・センヌによる「精神の哲学」

[73] ドゥボーによるこの叢書についての研究によれば、思想面においては、ラヴェルとル・センヌは、それぞれ「形而上学的絶対者（l'Absolu）」についての探究を、ラヴェルは「存在（l'Être）」概念、ル・センヌは「価値（Valeur）」概念という、それぞれ形象も名称も異なるもののなかに結実させていくことになる。André A. Devaux, « Nessance etessor de la collection « Philosophie de l'Esprit » (1934-1984) », in *Revue de l'Institut catholiquede*, Paris, N°18, Avril 1986. また、1966 年にミンコフスキーは『精神病理学概論』を執筆するが、このシリーズの発案者もまた、ラヴェルとル・センヌであった。ロゴス叢書は、ラヴェルとル・センヌによって創設され、ガストン・ベルジェによって監督されつつ PUF から刊行された。ロゴス叢書については、この一部に収められた *Manuel de bibliographie philosophique* の著者であるジルベール・ヴァレが次のように述べ、シリーズへの賛同を示している。「われわれはこのシリーズの二人の創設者〔ラヴェルとル・センヌ〕と一人の編者〔ガルトン・ベルジェ〕の方針と意向に忠実であり続けたいと考えている。」（Gilbert Varet, *Manuel de bibliographie philosophique*, Tome. 1, PUF, Coll. Logos, 1956, VII. ）

という立場に立ちたいとする[74]。なぜなら、ミンコフスキーにとって「精神の哲学」とは、「いつの時代にも存在してきた」(VC 3) 広い意味での形而上学のことであったからである。まずは、この点について確認してみよう。この形而上学であるところの「精神の哲学」について、ミンコフスキーは、次のように述べている。

> おそらく、精神の哲学はルイ・ラヴェルとルネ・ル・センヌによる叢書創設期に始まったわけではないだろう。それは生き続けるものとして、いつの時代にも存在していた。ただ、時折、外の諸々の布置（constellations）の影響によって、われわれの視界から逃れ、地下の道をたどり、身を隠すように見える。だが、それもほんの一時のことに過ぎない。そのトンネルから出れば、輝かしい姿で白日のもとに現れる。そこから、精神の哲学の永遠の復活がもたらされる。(VC 2, 3)

ミンコフスキーは、医学と哲学の二元性を「人間学」という名称において、「分割できない」ものとして、包括的にとらえられていた。この内的な基礎となっていたのは、特定の時代の哲学の潮流に還元されない、形而上学としての「精神の哲学」である。すなわちミンコフスキーは、「スピリチュアリスム」という名の流れも、もっと広い意味での「精神の形而上学」に接続されるという考え方をしている[75]。これは、ミンコフスキーが「スピリチュアリスム」を最も広い意味に解釈し、さらには、古代から続く形而上学との連続からとらえようとしたからである。

---

[74] ミンコフスキーは、1939 年刊行の *Revue internationale de Philosophique* の誌面上においても、ラヴェルとル・センヌの「精神の哲学（Philosophie de l'Esprit）」への賛同を表明している。この誌面には、ミンコフスキーの他に、エメ・フォレ、ウラジミール・ジャンケレヴィッチ、ガブリエル・マルセルの名が連ねられている。（Luis Lavelle et René Le Senne, « Avant-propos », in *Revue internationale de Philosophique*, N°5, 15 octobre 1939, p. 3-6. ）

[75] 杉山直樹は、フランス・スピリチュアリスムの系譜を詳細に分析し、解きほぐす作業の必要性を主張している。れわれもまた、スピリチュアリスムという潮流の名前に固執することなく、かつ「心理学以外に形而上学に至る道はない」とするクーザンの語に従って、自我の経験と外界の結合の過程、およびに諸様相を分析し続けなければならないだろう。（杉山直樹「J.S.ミルとフランス・スピリチュアリスム―19 世紀フランス哲学の一断面―」『学習院大学文学部研究年報』50 号所収、2003 年。）

（２）人間的な接触

ミンコフスキーは、1948 年の「人間的な接触（le contact humain）」[76]というタイトルの発表において、この「コスモロジー」の思想を、より具体的に説明しようとしているので、これを確認してみよう。ミンコフスキーは、「科学的」であるための「一般的な次元（l'ordre général）」と、「人間的尊厳（*dignité humaine*）」、「第一の記述（*princeps*）」という形而上学的な次元を、それぞれ区別しつつも、これらが交叉することを示そうとしている。

> 感動（émotivité）は、身体－精神の平面（le plan *somato-psychique*）に立つことからやって来るし、情動（affectivité）は、われわれの生の人間－コスモスの平面（le plan *anthropo-cosmique*）の上、一方は有機体の特徴、もう一方は人間的な人格の特徴からやって来る。（中略）そして、人間－コスモス的な面は、〔われわれがわれわれの研究の〕本性に、身体-精神的な面に適応した諸方法を公準としているにも関わらず、われわれの研究やわれわれの分担する調査に開かれている（accessible）。（EcC 140-141）

ミンコフスキーはここで、「接触」によって引き起こされる精神の動きを、「感動（émotivité）」と「情動（affectivité）」に分け、前者を「身体－精神の平面」、後者を「人間－コスモスの平面」上に現れるものであるとしている。そして、精神医学が分担しているのは、「身体と精神の平面」であるとしながらも、一方では、これが「人間とコスモスの平面」にも開かれているとしている。すなわちミンコフスキーはここで、身体と精神が連帯する「科学的」で「一般的な次元」が、「人間的尊厳」の位置する「人間－コスモス」的な次元に交わり、開かれる場を示そうとしている。この地点こそが、医学の臨床上の「出会い」や「接触」が、

[76] 初出は 1948 年の発表（Xe Congrès international de philosophie, Amsterdam, 11-18 août 1948, section Entretiens UNESCO.）であり、後の 1950 年に *Revue de métaphysique et de morale* 誌に掲載された。（Eugène Minkowski, « Le contact humain », in *Revue de métaphysique et de morale*, 55, 2, 1950, p. 113-127.（＝in Écrits cliniques, Ramonville Saint-Agne, Éditions érès, 2002, p. 139-156.）

より広い意味での「人間的な出会い（la rencontre humaine）」、「人間的な接触（le contact humain）」（EcC 143）に交叉する地点なのではないだろうか。

この「人間－コスモス的な平面」は、「精神の哲学」の領野であると言えるのだが、しかしながら、ミンコフスキーがこれを述べるために示す例は、人間に固有なものではない。

> コスモス－人間学的な面（le plan cosmo-anthropologique）の射程を際立たせるために、例を増やすべきだろうか。植物学は、木々の多様性を差異化し、分類するだろう。また、木々の解剖学と生理学を学ぶだろう。詩人は、枝の垂れた柳を、彼の墓の上に植えるように求めるだろう。軽いそよ風に控え目に触れられて鳴る、小枝の柔らかくかすかな音が、彼を楽しませるだろう。それでも、木は、よりいっそう根を張るだろう。このようにして、その木は、「根を張る」ことの意味を、「根こぎにされた」ことと同じく、われわれに打ち明けるだろう。（EcC 145）

ここでミンコフスキーは、コスモスと人間とが結ばれている面、すなわち「精神の哲学」の領域を示そうとするのだが、ここで例示されるのは、人間のみならず、木々である。この平面上では、差異を記述し、分類する試みと、柳の木の下への埋葬を望む詩人とが連続する。そして、木が根こぎにされ、断絶される一方で、その根は、切り離されることによってこそ、よりいっそう根をはるとされるのである。

> 今や、われわれは諸本質に直面している。しかしながら、これらの諸本質の面は生の外には位置してはいないのである。反対に、この面は扉を持っている。まず、諸事実の物質性とその厳密な連鎖は重なり合うように見えた。その上、ほとんど乗り越えられないような距離が漂っているように見えた。現実には、われわれは、そのことを信じなくなり、切り離されていることができなくなる寸前なのである。（EcC 145）

ここでミンコフスキーは、「厳密」であるように見えた物質の因果性の連鎖が、ゆるやかな堆積でもあり得ること、そして、そこにあったはずの乗り越えられない分裂や漂流が、跨ぎ越されるような時間が始まりつつあることを予告している。ここで、ミンコフスキーがこの発表の当時、「精神分裂病」に代表される精神の病と、二つの大戦の後の裂開の乗り越えを重ね合わせながら語ろうとしていたことは、想像に難くない。そして、分裂を検討し、明らかにしようとする一方で、この分裂の比較項として無言であり続ける、ある全体の次元を指し示そうとしていたのではないだろうか。このミンコフスキーが示す平面は、ばらばらであるという感覚がある空間を満たしているようなときにも、その分裂という感覚そのものの生起を支えており、「生きられる接触」が喪失されているときにも、喪失の感覚を示すことによって、喪失されていない次元が取り置かれていることを、無言で知らせ続けて来たのではないだろうか。

（３）隠喩

このような人間と世界との紐帯は、ミンコフスキーによれば、隠喩の仕組みにも明確に現れているという。ミンコフスキーは、『コスモロジー』において、「味の苦さ（goût d’amertume）」と「苦悩（sentiment d’amertume）」の関係について、次のように述べる。

> その全体が「二である」という差異化の下書きをちょうど胚芽状態のように内部に宿しているとき、ひとはその全体を、やがて、つなぎ合わせようとして無駄に疲れ果てるであろう二つの単位に変化させるために二分化させているような、控え目に抱いていたこの疑念を、すぐさま引き裂いてしまう。（VC 82-83）

ここでミンコフスキーは、「味の苦さ」と「苦悩」が別々であるという考えが、これを持とうとするとすぐさまに破いてしまうほどに、疲れ果てるような無駄なものであるとし、これ

らが繋がってあるしかないことを提示しようとする。

> 隠喩のなかでは、基本隠喩（les métaphore de base）なるものは、結局は本来的な意味での隠喩ではない。われわれはある語の本来の意味を、別な意味に置き換えているのではなくて、ただ一つの語によって選ばれた例のなかで、人間の魂を動かすような（affecter l'âme humaine）特殊なあり方を示しているのである。もっとはっきり言えば、たった一語－後にはその意味が感覚と感情とに分割されてもいいから－によって、われわれは人間の心の唯一の性質を、それが具体化される生の領域に応じて示しているのである。苦さとは、われわれの言語が欲しているように、味覚に関するときでも感情に関するときでも、常に同じもの（toujours la même）なのである。変わるものがあるとすれば、苦さという語に付帯する所与だけである。その所与の違いによって、われわれはあるときには感覚器官の領域のことを、またあるときには感情の領域のことを語ることになる。（VC 86）

ミンコフスキーによれば、隠喩とは、基本隠喩とそのほかの隠喩に分けられるのだが[77]、基本隠喩において示されるのは、例えば「味の苦さ」と「苦悩」を同時に示す「苦さ（amertume）」のように、人間の魂を動かし（affecter）、触れるようなたった「一つの語」であるとされる。このような「苦さ」が例示するのは、感覚に関わるときも感情に関わるときも「常に同じもの」であるような、同一の大地である。

[77] 「隠喩」についてミンコフスキーは、アルノー・ダンデューから示唆された点が多いとしている（VC 87）。ダンデューは、『マルセル・プルースト』のなかで、プルーストが使用した隠喩について、特に音楽の果たした役割が大きいとしている。ダンデューは、隠喩について次のように述べる。「どのようにしてプルーストの隠喩の一体化の価値（la valeur unificatrice）を理解すればよいのだろうか。（中略）ラスキンの後で、音楽こそが欠くことのできない主導者となった。音楽はプルーストに、彼にとって個人的であったところの現実を、日常的現象の下に見出させたのである。」ここでダンデューは、スワンとオデットの「愛の国歌（l'hyme national de leur amour）」としての、ヴァントュイユのソナタの小楽節が果たした機能の大きさを示している。（Arnaud Dandieu, *Marcel Proust : sa révélation psychologique,* Paris, Firmin-Didot et Cie, 1930, p. 112-113. ）

> 本質的に「隠喩的」な言葉というものがある。言語の「真正さ（véracité）」はまさにそこにある。言語は語から代数記号を作り出そうなどとはしない。むしろ逆に、諸現象間の親密性（affinité）や同一性（identité）を言葉によって表わそうとしている。（VC 86）

このように、ミンコフスキーは「関連性」や「同一性」を軸として世界が持っているからこそ、多様な隠喩や語が溢れ出して来ると考えているのであり、これこそがコスモスの秩序であるとされる。

（４）触覚

さらに、このようなコスモロジーを検討してみよう。ミンコフスキーのコスモロジーにおいて、「触れる」ことは、「生きられる接触」とは異なる、実在する物質についての感覚であるという。しかしながら、この本章の後で詳しく見るように、「生きられる接触」が遠くまで反響し、同調する現象である一方で、「触覚」とは、一つ一つの個体を「平均化」（VC 183）しながら、「特殊性と存在理由」（VC 183）を主張する現象である[78]。触覚を可能にする「二つ」であること、あるいは「複数性」は、「堅固さ（consistance）」（VC 183）を持っている。この堅固な接触は、より遠くへ行くことを可能にするための、大地であり、土台である。

> 万物がそのなかで微細でとらえがたい塵として散らばってしまう世界（univers）がもともともっている曖昧さは、いまや触れることによって、つまりある固有の性質によって豊かになる。それは、単なる感覚的な様態がわれわれの生のなかに浸透することなどでは決してない。それは、世界（monde）の相貌が変わることである。そして、堅固さや凝集力（多分緊密ささえも）といった要素がそこに浸

[78] 平均化とは、明るい空間の働きであるとともに、第一章で見たように、第一の展開の原理によって担われる。

> 透する。諸々の事物はいまや「存在を獲得し」、われわれ自身もそこで「足場を築き」、「大地に触れる」のである。（VC 180）

生物の個体化の過程において、もっとも単純であるとされる「触覚」は、個体を平均化させることによって、自らを実在させるようになる。これは、第一章で確認した、流れであるところの生成が分化し、多数の点となる「第一の展開の原理」において論じられた様態であるだろう。ここで、「微細でつかまえがたい塵として散らばってしまう宇宙がもともと持っている曖昧さ」は、まずは触れ、多数の点たちと同じ「一兵卒」になることによってのみ、「存在」を獲得する。点と点は、互いに似た者となり、これらの「接触」の感覚は、個物にとっての「基底（le fond）」（VC 181）となるからである。こうして、われわれは感覚における最も「根本的な能力」を獲得する。

> 触れることには相互性（*réciprocité*）の要素が含まれている。そして、この相互性によって、存在が確立されるほか、触れることが他のすべての根本的性格から区別される。何かに触れるものはすべて触れられる。少なくとも触れられえる。要するに、それが接触という語によって表されているものなのである。（VC 182）

点となった互いに似たものたちは、相互に触れ、また触れられるようになる。こうして、「触覚」において能動性と受動性は交叉するのだが、この相互性を経ながら、個体は、分化した個体性（individualité）であるというより、もっと根源的な固有性（particularité）（VC 182）を獲得するようになる。すなわち、諸個体は、その取り替えのきかなさを、平均化したものたちとの互いの触れ合いのなかで獲得するのである。このような実在的な接触は、「生きられる接触」とは異なる物質的な接触であるが、これは、ミンコフスキーによれば、身体のみならず、魂においても発生するという。

> 個人の魂（l'âme individuelle）とは、何よりも感じられる魂（l'âme sensible）であり、感動させ（toucher）、感動する（être toucher）ことのできる魂として、その存在を生のなかで主張している。こうした観点からすると、個人の魂は、存在するすべてのもののあり方を決定する一般原理に属していることになる。（VC 182）

このように、われわれの魂は、まず「感じる魂」であり、感じるとは、互いに触れ合うことである。ミンコフスキーにとっては、魂もまた実在し、こちらから触れ、また触れられる。「わたし（je）」はたった一人で生成の波を被りながら自らを定立することによって、接触しえる実在性を持った魂の固有性を獲得するようになるのだが、この現象は、自己のみによっては起こり得ない。自己は、自己の似姿を鏡に映してのみ、似姿と共に単独となるからである。この現象についてミンコフスキーは、次のように述べている。

> 一方のものの実在は、第二のものの上に築かなければ堅固なものとならない。「相互性における自己と他者（le « moi et l'autre dans leur réciprocité »）」は、たった一人の「わたし」よりもはるかに根源的な現象であり、この「わたし」はたった一人である限り、実際には何の意味もない。この相互性は、触れることのうちに含まれて、すべての存在の固有なあり方を決定する。いやそれを超えて、世界（univers）のなかに一つの反映を投げかけ、それを堅固で触知できるものにする。（VC 183）

自己が実在性を獲得し、堅固なものとなるためには、自己を「相互に」見返すわれわれの似姿を必要とする。あるいは、自己は、たった一人では自己となり得ず、他者と共にのみ自己と呼ばれるようになる。すなわち、ミンコフスキーにおいて「他者が存在するか」という問いは「自己が存在するか」、という問いと同じであり、自己と他者は互いに相互的な実在する魂の接触を通してのみ、同時に存在し始める。

第二節　ゴッホと領野

（1）蛇行と旋回

第一節において確認した「触覚」には、自己と他者、点と点の実在的な接触があった。ここで、この接触が強くなるような、苛烈な「結合」としての「癲癇性」について確認しておきたい。『新版　精神分裂病』において付け加えられる第三の気質としての「癲癇性」は、「分裂性」と「同調性」とは異なる、三番目の気質であるとみなされ、その独立性が強調されるのだが、われわれはこれをミンコフスキーが、「同調」が担う「結合」の過剰として捉えていたと考える。

「癲癇性」においては、自己が炸裂し、目覚めに向かうとされる。この性質においては、環境と同調し、眠り込んでいたはずの自己が目覚め、全世界を一瞬で見渡してしまうからである。ここには、「分裂性」とは異なる仕方での創造性が刻印されているだろう。われわれは、「結合」の次元のこうした苛烈さを確認しながら、なおも、われわれの共同の「社会」の可能性について考えてみたい。

第四章において論じたように、ミンコフスカは、長らく「癲癇」についての研究を行ってきた。ミンコフスカは、「癲癇」研究のためにロールシャッハの技法を使用するのだが、ミンコフスカの研究において特徴的なのは、ロールシャッハ・テストにおける、要素の分裂と結合という二極に着目する技法を、絵画に対しても利用し、絵画のなかに個人が世界を知覚し、行為する仕方を読み取ろうとする視点である。

ミンコフスカは、著作『ファン・ゴッホ』において、二つの「運動」に注目する。まずは、二つの「運動」があらわれる前の、静かな「休息」の時間を見てみよう。ゴーギャンがアルルに到着する直前の 1888 年の 9 月から 10 月初旬にかけて、ゴッホは、黄色い『寝室』[79]の最初のバージョンを描き上げる。ゴッホの生において、この寝室が安らぎの空間であったこ

[79] Van Gogh, Vincent's Bedroom in Arles, en octobre 1888, huile sur toile, 72 x 90 cm. Musée Van Gogh, F482, JH1608.

とは想像に難くない。ここは、「避難所（*refuge*）」であり、描かれた「椅子」たちもまた「休息（*halte*）」の場であった。しかしながら、この「休息」は、ゴーギャンが実際に現れ、去っていく前後には、「くつろぎ（détente）からはほど遠いもの」（VG 59）となる。ミンコフスカは、ゴッホによって描かれたゴーギャンの『椅子』[80]の上に置かれた、灯のともされた1本のろうそくと、2冊の本とが、古くは「光」、すなわち「精神」を表していたこと、また、ゴーギャンの椅子の上にこれらを置いたことによる、ゴッホの「耐えられ難さ」（VG 59）を述べる[81]。

こうした「耐えられ難さ」の経験の後に現れるのが、二つの「運動」である。まずは、一つ目の新しい運動であるところの、蛇行する線を見てみよう。ゴッホの曲がりくねる線は、どのようなときに現れるとミンコフスカは考えていたのだろうか。ミンコフスカは、次のように述べる。

> 一つの新たな要素が作品を貫く。それは蛇行する線であり、常に繰り返され、あらゆるものに新たに侵入してしまう。そしてそれは、タブロー上に、荒れ狂う風を起こさせる。この荒れ狂い（déchainement）は『サン＝ポール病院の庭に立つ人物と松の木々』[82]に見られる。（VG 59）

この記述を追うために、ミンコフスカがここで示している、『サン＝ポール病院の庭に立つ人物と松の木々』を見てみよう。この絵は、ゴッホとゴーギャンの諍いから、約1年が経過

---

[80] Van Gogh, « Paul Gauguin's Armchair», en décembre 1888, huile sur toile, 90.5 x 72.5 cm. Musée Van Gogh, FF499, JH1636.

[81] ミンコフスカは、『椅子』が描かれたのはゴーギャンの去った後であるとしているが、ゴッホとゴーギャンの間の諍いはクリスマスの前であったため、この『椅子』が描かれたのはゴーギャンが去る前の12月前半であったとも考えられる。また、2009年には、二人の諍いにおいてゴッホの耳を切ったのは、ゴッホ本人ではなく、ゴーギャンであったという説が報じられている。（Éric Biétry-Rivierre, « Révélations sur l'oreille coupée de Van Gogh », in *Le Figaro*, mis à jour le 04/05/2009 à 10:46.）

[82] ミンコフスカの原語は « L'arbre dans le bâtiment des hommes à l'asile de Saint-Remy » だが、ミンコフスキーが序文で言及し、付加した fig. 7 においては、« Le départment des hommes à l'asile de Saint-Remy »と呼ばれている。(Van Gogh, Pine Trees with Figure in the Garden of Saint-Paul Hospital, en novembre 1889, huile sur toile, 58 x 45 cm. Musée d'Orsay, Paris, F653, JH1840.)

した頃に描かれた。また、ゴッホの絵画における新たな要素であるところの「蛇行する線」は、よく知られているように、ゴッホの精神状態を示すとされているのだが、この線をミンコフスカは、癲癇性による世界の震えとみなしている。

ここで描かれたものを、詳しく検討してみよう。前面には一人の男と、大きな松の木、この背景には、病院となっていた建物と、その玄関にいるらしい人影が描かれている。中央手前に男が立ち、上半身を自身の左手の方向に向けながらも、下半身は、こちら側に向かっているようにも見える。足は 90 度に開き、肩もまた大きく開かれている。膝のまったく曲がらない足は、棒のようである。彼は、ゴッホが、ミレーを模写しながら、同じ時期に描いていた、地にかがみ、あるいは腕をオリーブの樹にいっぱいにのばした人々、あるいは、広重を模写しながら描いて来た、広大な世界を背景に、小さくユーモラスに駆け回る人物たちとは、全く違うように見える。この男は、帽子をかぶることなく、パジャマを着用し、こちらをまっすぐには見ることのできない、サン＝ポール病院のほかの患者とも異なる[83]。男の左手側、ゴッホから見て右手側には、病院の入り口があり、入り口はゴッホのいる位置よりも三段分高くなっている。入り口にも誰かが立ち、こちら側を見ている。立派な建物の左右は画面の外にまで続き、どこまでも張り出して、終わりが見えない。そして、男の右手側、こちら側から左側に見えるのが、ミンコフスカの注目する松の木である。上の引用においてミンコフスカは、松の木が、全てに「侵入」しようとし、「荒れ狂う風」を起こさせているとみなす。

この「蛇行」に着目した後で、ミンコフスカは、二つ目の運動をあげる。

> 『糸杉と星の見える道』[84]である。しかし、ここにあるのは並木道でもなければ、木々の並列でもない。中央には、たった一本の木が屹立している。ほとん

[83] Van Gogh, Portrait of a Patient in Saint-Paul Hospital, en octobre 1889, huile sur toile, 32 x 23 cm. Musée Van Gogh, Amsterdam. F703, JH1832.

[84] ミンコフスカの原語は « La Route aux cyprès »であるが、この作品は« Route avec un cyprès et une étoile »の語で知られている。（Van Gogh, Road with Cypress and Star, en mai 1890, huile sur toile, 73 x 92 cm. Musée Kröller Müller, Otterlo, F683, JH1982.）

ど垂直に（*verticalement*）、まるでつむじ風（tourbillon）のように。この運動は、キャンバスを通して増殖し、キャンバスは上昇（*montée*）と下降（*descente*）によって支配される。道は上昇し、家に至る。荷車と〔二人の〕人影は降りて来る。ここで、これら二つの運動は、以前のキャンバスにおいては分離していたものであるが、ここでは、互いに接し合っている。接し合う二つの運動は、星でいっぱいの空にまで広がり、旋回する星は、上昇する線と、下降する線から構成されている。（VG 59-60）

今度は、糸杉が中央部に屹立する。この糸杉は、やはり、マツの木と同様に風を起こしている。しかし、糸杉は蛇行し、荒れ狂うだけの風ではない。ここにあるのは、つむじ風である。つむじ風は、中心を持っている。そして、この運動はキャンバスを通じてあらゆるものに憑りつき、増殖していく。渦巻きは絶え間のない「上昇」と「下降」から作られるが、いまや、あらゆるものが渦巻きの運動に加担している。道と人、道と荷車、これらは互いに逆向きの運動を行い、渦を作っている。この渦巻きは空にまで至り、とうとう星までもが天空で旋回し始める。

（２）「より遠くに行く」

このようにして、ゴッホは旋回する空に至るのだが、われわれは、ゴッホが経験した出来事から、これ以上どのような声を聴き取ることができるのだろうか。われわれは、われわれが思いつくことのできなかった別の道を、ミンコフスキーとメルロ＝ポンティは示していると考える。

ゴッホは、1890 年の夏、オーヴェルで『カラスのいる麦畑』[85]を描きながら、「より遠くに行く（ le « aller plus loin »）」と自分自身に言うのだが、その「遠く」についての詳細を、

[85] Van Gogh, Wheatfield with Crows, en juillet 1890, huile sur toile, 50.5 x 100.5 cm. Musée Van Gogh, Amsterdam, F 779, JH2117.

メルロ＝ポンティは、「間接的言語と沈黙の声」[86]のなかで、すでに存在しないゴッホに指し示そうとする。

> 〔「より遠くに行くこと」とは、〕それに向かって歩むべきであるような、何らかの現実（réalité）のことではない。それは、まなざしと、まなざしを誘うものたちとの出会い（rencontre）や、また、存在しなければならないまなざしと、存在しているまなざしとの出会いを返してやる（restituer）ために、まだやるべきことがある、ということである。（Si 71）

メルロ＝ポンティは、画家に、「描くのを止めること」（Si 66）を止めさせようとする。なぜなら、描くことだけが画家と世界の交渉であるところの「内的図式（shéma intérieure）」（LV66）、すなわち「魂の自動装置（automate spirituel）」（Si 66）を作動させ、より「遠くへいく」[87]経験をもたらすものだからである。画家自身が遠くへ行くこと、それは、すでに感じられるものに到来するまなざしと、未だ到来していないまなざしを出会わせ、その結び目を世界に返し、差し出してやることに他ならない。メルロ＝ポンティが考えるこのような世界と人間との交渉を、ゴッホは、大地にひれふし、仕事をするあらゆる人間の行為のなかに見出していたのであり、この点を、メルロ＝ポンティは呼び起こそうとする。すなわち、ゴッホにとっては、大地にかがみ、あるいはそこから生える木に手をのばす人々を描くことは、一回ごとに世界を分有することや、また、木を継ぐことそのものだったのであり、われわれの「社会」もまた、そのような選択をすることが可能なのではないだろうか。

---

[86] Maurice Merleau-Ponty, « Le langage indirect et les voix du silence » in *Signes*, Paris, Gallimard, 1960. 以下で引用する際には、Si と略記し、ページ数を示す。

[87] この言葉の出典をメルロ＝ポンティは記述していないが、マルローの引用するランボーのものである可能性が高い。マルローは、ゴッホの『カラスのいる麦畑』とランボーの「感覚」を自身のなかで関連づけて考察を行っており、ここには、ランボーの「俺はもっと遠くへ行く（Et j'irai loin）」という言葉が登場する。André Malraux, *Les voix du silence,* Paris, Gallimard, 1951, p. 341. およびに、Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, 2009, p. 6.

（３）修道院、精神病院、畑

ならば、「意味（le sens）」（Si 69）が「熱気（une brume de chaleur）」（Si 69）[88]のように画面上で震え始め、空転するのを止めないようなとき、われわれは、この装置に対し、どのように働きかければ良いのだろうか。

ミンコフスキーは、第四章においてわれわれが見たように、太陽が沈み、周囲が暗がりに包まれようとするとき、しばしの間、暗い空間に満ちている音たちを聴く。しかし、そのなかで「ランプに灯をつける」ことができると言うことを、ためらわない。この灯とはどのようなものなのであり、また、いかにして灯されるのだろうか。

すでにわれわれが確認したように、『カラスのいる麦畑』から半年ほど前の 1889 年 11 月、ゴッホは、上に引用した『サン＝ポール病院の庭に立つ人物と松の木々』を描くのだが、この、もとは「修道院」であったサン＝ポール病院にいるあいだ、ゴッホはなおも、病院の庭や、田園の風景や、そこで働く人々を描き続けていた。ミンコフスカは、この時期の作品のなかでも、あるものに注目する。

> 『収穫』[89]を見てみよう。山の稜線の連続や、太陽や空は、確かにある。しかし、キャンパスのすべては、領野（champ）によって占められている。領野は、下降する（le *champ* qui *descend*）。（VG 60）

この絵画のなかで、大きく描かれているのは、麦畑である。広大な麦畑は、あまりにも広く、全面に張り出している。この終わることのない張り出しは、『サン＝ポール病院の庭に立つ人物と松の木々』におけるサン＝ポール病院の広がりと同じである。病院も、麦畑の領野も、

---

[88] Jean-Poul Sartre, *Situation II*, Paris, Gallimard, 1976, p. 69.

[89] 原語は« La Récolte »であるが、これは « Champs De Blé Derrière L'Hôpital De Saint-Paul »という名称で知られている。また、ここでは、全く同じ構図から「麦畑」と「太陽」と「収穫者」が描かれた、他の 2 枚を合わせた合計 3 枚の絵が想定されていた可能性が高い。（Van Gogh,Wheat Field with Reaper and Sun, en juin 1889, huile sur toile, 72 x 92 cm. Musée Kröller-Müller, Otterlo, F617, FH1753. et Van Gogh, Wheat Field with Reaper at Sunrise, en septembre 1889, huile sur toile 73 x 92 cm. Musée Van Gogh, Amsterdam, F618, JH1773. et Van Gogh, Wheat Field Behind Saint-Paul Hospital with a Reaper, en septembre 1989, huile sur toile, 59.5 x 72.5 cm. Musée Folkwang, Essen, F619, JH1792.）

圧倒的な力を持って広がり、「下降する」。

この「下降」の広大な張り出しのなかで、農夫が、画面の左上で、小さく刈り取りを行っている。この「領野」の張り出しは、ゴッホの奥深くに「憑りつき（hanter)」（VG 60)、何度も繰り返されることになるのだが、ミンコフスカは、ゴッホがミレーの作品を模写して作成した『種まく人』[90]について、マイヤー＝グラーフェの言葉を引用しながら、この『種まく人』の「身振り（geste)」が、ずっと古くから続いてきたものであることを指摘する[91]。

ゴッホは、かつて修道院であった精神病院と、麦畑の領野を、同じ「下降する」運動で描くのだが、この領野のなかで麦を刈り取り、あるいは種をまく人は、この張り出す運動に対し、決して真っ向から逆らい、抵抗してはいない。なぜなら彼らは、「古来の身振り（geste *ancestral*)」（VG 60）に取り憑かれ、貫かれるままになり、沈殿したものたちの重みを引き受け、自身のなかでそれらを養っているからである。主体を押しつぶそうとする下降する領野に立ちながら、人間は「＜社会的な＞身振り」（VG 60）を形成する。すなわち、生成の巨大な波は、ときに主体を押し潰す流れのように経験されるのだが、しかし、これと交叉するような「社会」を思考する可能性が、人間と世界との連帯があり続けるということを確認することにおいて、開かれているのではないだろうか。

第三節　反響

（1）一つの音

われわれは、下降する巨大な波に貫入されながら、大地に立ち、主体となる。このとき、他者たちと共に、しかしながら、隔たった個物としてある。各々の個物たちは、「生きられる距離」を持ち、「共に」震え始める。この震えこそが、ミンコフスキーの主張する同調である。同調とは、単に環境に適応することではなく、「たった一つの感情」を分有することであり、個物たちの内奥の反響である。

---

[90] Van Gogh, The Sower, (after Millet), en octobre 1889, Tate Gallery, London, F 690, JH 1837.
[91] Julius Meier-Graefe, *Vincent Van Gogh : A Biography*, New York, Dover Publications, 1987, p. 61.

われわれは最後に、このような、ミンコフスキーによって提示された、同調するコスモスについて確認したい。ミンコフスキーは、『コスモロジー』の「聴覚」の記述において、多数の個物たちが聴く「一つの音（un seul ton）」について記述している。隔たってあることの奥深くで、われわれはある旋律、ある音を聴く。

> 他のいかなる様態も音の世界から得られるもろもろの経験ほどには直接的に、そして自然にわたしの存在の奥底まで浸透して来ないので、この深さは音の世界に固有なものであろう。（中略）深部に浸透し、まるで自分の意志とは無関係に自己の奥底まで実際に反響するのは、一つの旋律（une mélodie）、一つの音（un son）でしかない。（VC 107）

われわれは奥底で、たった一つの音を、自己の意志とは無関係に響かせている。この経験は、他のどの感覚から得られる様態よりも「直接的」で、本章第一節において確認した物理的接触とは異なる、「生きられる接触」である。この旋律は、再び世界を渾然一体としたカオスにしまうのではなく、一つになりながらも、各々にとっての「閉じられた世界」を形成するという。

> 自己と環境はこの運動のなかで一体化し、一つの全体のうちに融け合いながら、自己自身のうちに存在理由をもった閉じられた世界を形成している。（VC 105）

似姿であるわたしたちは、完全に隔たった点となり、個物となる。このとき、これらの個物たちと世界とは、同調し、連帯するのだが、決して融合し続けてしまうわけではない。なぜなら、一つ一つの個物が、「閉じられた世界」を持っているからである。

ミンコフスキーにおいて、たった一つの音を聴く行為は、反響という現象で説明される。反響のなかでは、個物たちのたてる「重々しい音」ですら、音楽である。

> 反響は心理学が通常考えているような自己と世界との対立よりもはるかに根源的なものである。それは自己と世界とに共有され、両者の間に対立がうち立てられても、いつでも同一の運動によって両者を結びつけてしまう。ある旋律やシンフォニー、あるいはたった一つの音でも──とくに重々しく深い音であれば──共感のこころの動きのようにわれわれの内部に拡がり、われわれの存在まで浸透していき、実際にそのなかで共鳴し、また反響する。（VC 106）

反響するコスモスのなかでは、誰かの叫びのように「重々しく深い音」であればあるほど、われわれの奥深くに浸透し、鳴り響く。深い音であればあるほど、たった一人で鳴ることはなく、他者たちと共鳴し合っているのである。この反響は、世界（univers）の全体が個物のなかに小宇宙（micro cosme）として分有されているために、われわれが持った特性である。

> 器や森は、音によって満たされるという事実から、それ自身で閉じた一個の全体として、一種の小宇宙を形作っているのである。もっとも、ここで小宇宙とは、もっぱら無限の宇宙という観念との対比で言われている。つまり、この小宇宙は、反響という特性を持ち、それによって固有な生命をそなえた「コスモス」全体を自己のうちの映し出しているのである。（VC 103, 104）

このように、ミンコフスキーによれば、われわれはたった一つの音を聴く個物たちであり、それぞれが、宇宙全体を分有している。この分有関係は、個物たちが自閉し、境界を持つことによってのみ成り立っている。

（２）形態

最後に、この分有が成り立つために必要な、個物の境界について確認したい。ミンコフス

キーは、互いを響かせるために必要となる個物たちの境界について、次のように述べている。

> 現実にあるのはただ一つの旋律である。つまり、その音で環境全体を満たしながらその境界を定め、その環境との接触を維持しながらそれを形づくり、同時にわれわれの内部に浸透しながら自己と世界とを満たし、われわれを美しく響きわたる全体のなかに溶け込ませる旋律である。（VC 106）

これまで見てきたように、われわれが聴いているのは「たった一つの感情」という音なのだが、この音を聴くためにこそわれわれは、それぞれの形態を必要とする。これが、個物の生である。

『コスモロジー』の最後の章で、絶えず「形を変える塊」について、次のように述べている。

> 先に述べたように、無（néant）は単なる不在（absence）や現実の空白（vide）ではない。それは、雪に覆われた頂、創造的思考や、未刊のものだけを出現させようと運動する塊（masse mouvante）になる、混ざり合う「雲」なのである。（VC 262）

個物と個物の間にある隙間である「無」は、ミンコフスキーにおいては、単なる不在や余白ではない。それは、新しいものを産出する「雲」であり、これはかつて、「混沌（chaos）」や「闇（obscurité）」とも呼ばれて来た。ここからやって来るソナタの小楽節は、スワンにとり憑き、あるいは、領野としてゴッホの絵画の上にまとわりついたことを、われわれはすでに確認した。繰り返しやって来る暗い塊は、ミンコフスキーに対し、長い時間をかけて慣れ親しんだものたちが、新しく生まれ直す瞬間を、「深遠な仕方」で語り始める。

> 仕事机の前に腰をおろし、わたしは前を眺めている。そのとき、わたしは、机とその上に敷き詰められた吸い取り紙、書き込みで埋まった原稿用紙、その他いろいろな材料、形態、用途からなる物を見ている。それらの物がどのようなものかすべて述べることもできるし、またそれらの物がどのように配置されているか、何でできているか、何に使うか言うこともできる。だが、それだけであろうか。突然、ある考えがわたしのこころをよぎる。何度この机とこの原稿に向かったことか。（VC 254）

ミンコフスキーはこうして、厚い時間の堆積物、すなわち実在する物体たちと出会うのだが、この物体たちがつくる厚みは、決して彼を「混乱」させたりはしない。なぜなら暗がりのなかでこそ輝く「ランプの灯」としての、「精神の哲学」の灯し方を、実在する時間の堆積物との出会いのなかで、誰かが教えたからである。

> この人間性の息吹き（souffle）は、その普遍的な力（force universelle）によって、それのみが創造できる精神的雰囲気を決定し、具体的事物や人間を超えて、その全体を包みこみ、息吹きそのものを自らの手で形づくる（former）。（VC 257）

暗い堆積物は、こうして透明な普遍性の明るさによって照らし出され、全体を包み込みながら、個々の形の輪郭を徐々に浮かび上がらせる。しかし、この灯のもつ透明な明るさは、ミンコフスキーにおいて、瞬間的な儚い輪郭たちという、もう一つ別の明るさを求める。

> この瞬間的な個々の輝き（éclairs）は生そのものの明るさ（clarté）であり、光（lumière）なのだ。（VC 257）

透明な灯、明るい輪郭、暗い塊、この三つのものを「自動装置」のなかで循環させるために

は、あるときには破壊不可能な力の反復的な指し示しが必要であり、またあるときには、個々の形の切り出しの促しが必要となる。なぜなら、普遍的な透明性、個別なものたちの形、蠢く塊は、三つのうちのどれかが、他のどれかを従属させるということはなく、三角形を形作っているからである。

> 三角形ではおのおのの頂点は他の二つの頂点と向き合っており、しかも三角形そのものは一つのまとまった図形である。（SN 252）

このようにして、三つのものから成立する世界は、やはり、ミンコフスキーにとって、光に満ちたものである。なぜなら、形の変容の瞬間に、結晶は圧倒的な光を放つからである。この光は、透明性を透かす闇のなかでこそ輝き得る。

> この移行の瞬間に、諸物体がわれわれの目の前で、発生状態のなかで結晶化する（se cristalliser）様子を指し示すために、「具体化する（prendre corps）」という表現は、このうえなく適切なものである。（VC 157）

ミンコフスキーの「コスモロジー」においては、世界はこのようにして、たくさんの面を持った鉱物のように光りはじめる。経験と経験間の移行、時間の移ろいは、閃光を次から次へと放つことを止めない。形は次の形を求め、個々の形たちは、「ただ一つの語」や「たった一つの感情」を共鳴させながら、新しい発生を何度でも繰り返す。

結論　　同調するコスモス

以上の考察からわれわれは、「分裂性」と「同調性」という概念と、これに基づく「精神分裂病」の「治癒可能性」の問題をめぐって、ミンコフスキーの哲学と精神医学を分析した。ミンコフスキーは、われわれにおいては「分裂性」と「同調性」が常に共存しているのであり、病においては、これらの混合の様態を見極めることこそが、医師の仕事であると考えた。また、このような治療は、「理性」と「直観」の両方を使ってこそなされ得るものであり、「精神分裂病」の治療においては、患者と世界とが同調し、繋がっている部分を見つけ出すことこそが、最も重要な作業であるとみなされた。

第一章「生きられる現在」では、ミンコフスキーにおける「時間と空間の問題」について検討した。ミンコフスキーにおいては、時間の流れとしてのベルクソンの「生成」概念を、一元論に還元するのではなく、個体のなかで観察するために「空間」概念が必要とされた。また、「生きられる現在」とはミンコフスキーにとって、自閉する作話に不在者を挿入し、世界と繋がるような絶対的な紐帯を構成する支点であった。

第二章では、「四つの原理における分裂と同調」ついて分析した。第一から第四の原理までにミンコフスキーが提示したのは、1.）自我が一元的な生成の流れから出発しながら分化し、2.）個別的な活動としての行為を行い、3.）個別性を保ったまま流れと合流し、4.）一つ一つの自己を休息させることで自らを拡大する過程である。また、ミンコフスキーによるこれらの原理の着想がブロイラーの精神医学にあったことを確認した。

第三章「「精神分裂病」論における自閉概念」では、「精神分裂病」論における自閉概念について分析した。クレペリンとブロイラー、ミンコフスキーまでの自閉概念の分析において示されるのは、これが環境と患者の絡み合いのなかからしか論じることができないという点である。また、自閉概念が図らずも開いてしまったのは、現象と人格全体、人間と世界とが根底において連帯するような次元であることが明らかとなった。

第四章「現代の精神医学と接触の精神医学の交叉」では、ミンコフスキーが取り上げるモレルとブロイラーの精神医学の差異について分析した。ミンコフスキーは、モレルとブロイラー、現代の精神医学と接触の精神医学の間に共有される「結合」の次元を示し、これを根拠に「治癒可能性」を示そうとしていた。この次元は、ミンコフスカによるロールシャッハ・テスト論における知覚の言語化においてもまた現れる。

第五章「諸経験間における移行の問題」では、一つの経験が、他の経験とどのように移行し合い、病の回復が可能になるのかを検討するために、ミンコフスキーとメルロ＝ポンティの存在論を対話させた。明るい空間と暗い空間、昼の時間と夜の時間を呼ばれるものの移行を分析することによって、自己の内部には、世界との紐帯があり、これが病理の経験の「回復」を可能にすること、またこの紐帯の問題がミンコフスキーとメルロ＝ポンティにおいて共有されていた点を示した。

第六章では、ミンコフスキーがラヴェルらとともに「精神の哲学」と呼んだ思想について考察した。ミンコフスキーにとって「精神の哲学」は、時代によっては地下に潜ってしまうこともあるのだが、あらゆる時代に存在して来たものである。また、世界が一つのものであるためには、個別の小宇宙が必要となることを確認した。

ミンコフスキーの思想は、確かに、これまで批判されてきたように、中心となっている問題が見えにくいものである。その原因は、自身の研究を貫く「精神分裂病」の「治癒可能性」と、治療方法を示唆するブロイラーの「同調」という語が、十分に説明されないまま、またほとんど繰り返されることのないままに留まったからである。

以上から、ミンコフスキーが「治癒可能性」を示唆しながらも明確化されてこなかった「精神分裂病」の治療方法とは、人間が人間に直接働きかけて治療するのではなく、治療者が世界の構造に「同調」し、その構造を介して被治療者に浸透することであったと考えられる。このとき、具体的には次の三点にミンコフスキーは注意を払っていたとわれわれはみなす。1. 個体の支えであるところの内奥の共鳴を聴きとり、拡大すること。2. あらゆる面を繋ぎ直すのではなく、「分裂性」もまた、創造の源泉として尊重すること。3. L. M 氏の臨床例

に見られるように、われわれが共に住んでいる世界について、人々との関係からのみではなく、建物や動物といった、人間以外のものや生物との関係を通して再構成することを促すこと。

このように、浸透としての同調という視点から見れば、調子を崩した主体に診断名を与えることは、過剰になった部分や少なくなった部分を整えることに役立つ、ということ以外にほとんど意味のないものであることが分かる。すなわち、この世界には正常と異常も、また、病の名前も存在せず、ただ一つの流れがあるのみである。

われわれのすべき行為とは、一つの音楽のなかで響く、個々の音を聴き分けることである。そこには世界の凹凸があるのみであり、おのおのの凹凸は、個体であることによってこそ全世界を内包している。世界では、さまざまな個体が生まれ、死に、また新しく生まれ、また死に、その度ごとに「たった一つの感情」を分かち合う。個体たちは、消え去りながらも実在性として堆積されており、一つ一つの染みについての知覚や、行為のなかでその厚みを伝達し合っている。ミンコフスキーが示したのは、こうした実在する空間が個体内部で共鳴することによって、たった一つの同調性に貫かれるコスモスである。

文献表

略号を使用したものに関しては［］内に記載する。

一次文献

１）　ミンコフスキーの著作

Minkowski, Eugène,［S］: *La schizophrénie : psychopathologie des schizoïdes et des schizophrènes,* Paris, Payot,2002.　(1ère édition, Paris, Payot, 1927.)

Minkowski, Eugène,［SN］: *La schizophrénie : psychopathologie des schizoïdes et des schizophrènes,* Nouvelle édition*,* Paris, Desclée de Brouwer, 1953.（ミンコフスキー『精神分裂病―分裂性性格者及び精神分裂病者の精神病理学』村上仁訳、東京、みすず書房、1954 年。）

Minkowski, Eugène, ［TV］ : *Le temps vécu : études phénoménologiques et psychopathologiques*, Paris, PUF, 2005.　(1ère édition, Paris, d'Artrey, 1933.)（ミンコフスキー『生きられる時間―現象学的・精神病理学的研究１』中江育生、清水誠訳、東京、みすず書房、1972 年、『生きられる時間―現象学的・精神病理学的研究２』中江育生、清水誠、大橋博司訳、東京、みすず書房、1973 年。）

Minkowski, Eugène,［VC］: *Vers une cosmologie : fragments philosophiques*, Paris, Payot, 1999. (1ère édition, Paris, Aubier-Montaigne, 1936.)（ミンコフスキー『精神のコスモロジーへ』中村雄二郎、松本小四郎訳、京都、人文書院、1983 年。）

Minkowski, Eugène, *Traité de psychopathologie*, Paris, PUF, 1966. (Nouvelle édition, Le Plessis-Robinson, Institut Synthélabo pour le progrès de la connaisance, 1999.）

Minkowski, Eugène, *Au-delà du rationalisme morbide*, Paris, L'Harmattan, 2000.

Minkowski, Eugène, ［EcC］: *Écrits cliniques,* Textes rassemblés par Bernard Granger, Ramonville Saint-Agne, Éditions érès, 2002.

２）　ミンコフスキーの論文

Minkowski, Eugène, « Betrachtungen im Anschluss an das Prinzip des psychophysischen Parallelismus », *Archiv für die gesamte Psychologie*, t. XXXI, 1914, p. 132-243.

Minkowski, Eugène, « Impressions psychiatriques d'un séjour à Zurich ; La schizoïdie et la syntonie de M. Bleuler ; La méthode de Rorschach ; Le nouveau service pour enfants anormaux ; Le placement familial », *Annales médico-psychopathologuques*, vol.1, 1923, p.110-126. （*Écrits cliniques*, Ramonville Saint-Agne, Éditions érès 2002, p. 13-25.）

Minkowski, Eugène, « La Géneése de la notion de schizophrénie et ses caractères essentiels », *L'Évolution Psychiatrique*, t. 1, 1925, p. 193-236.

Minkowski, Eugène, *Étude sur la structure des états de dépression : les dépressions ambivalentes*, Paris, Éditions du Nouvel Objet, 1993. (Réédition du texte intégral paru dans la collection *Schweizer Archiv für Neurologie und Psychiatrie = Archives suisses de Neurologie et de Psychiatrie*, XXVI, 17, 1930.)

Minkowski, Eugène, ［N］: « Les Notions de distance vécue et d'ampleur de la vie et leur application en psychopathologie », *Journal de psychologie*, XXVII, 1930, p. 727-745.

Minkowski, Eugène, « Phénoménologie et analyse existentielle en psychopathologie », *L'Évolution psychiatrique*, vol. 13, 1948, p. 137-185.（*Écrits cliniques*, Ramonville Saint-Agne, Éditions érès 2002, p. 185-200. ）

Minkowski, Eugène, « Les conséquences psychologiques et psychopathologiques de la guerre et du nazisme », in *Schweizer archiv für neurologie und psychiatrie,* LXI, 1948, p. 279-302.

Minkowski, Eugène, « Le contact humain », in *Revue de métaphysique et de morale*, 55, 2, 1950, p. 113-127. （*Écrits cliniques*, Ramonville Saint-Agne, Éditions érès, 2002, p. 139-156. ）

Minkowski, Eugène, « Problèmes pathographiques : À propos de la récente traduction française de l'ouvrage de Karl Jaspers : Srindberg et Van Gogh, Hœlderlin et Svendenborg », *Revue d'esthétique*, vol. 7, 1954, p. 257-276. （*Écrits cliniques*, Ramonville Saint-Agne, Éditions

érès, 2002, p. 185-200.）

Minkowski, Eugène, « La pure durée et la durée vécue », *Bulletin de la Société française de Philosophie, Bergson et Nous,* Actes du Xe Congrès des Sociétés de philosophie de langue française : Congrès Bergson, Paris, 17-19 mai 1959, Paris, Armand Colin, 1959, p. 239-241.

Minkowski, Eugène, « La notion de perte de contact vital avec la réalité », *Au-delà du rationalisme morbide*, Paris, Harmattan, 2000, p. 34-84.

３）　ミンコフスカの著作

Minkowska, Françoise,［VG］: *Van Gogh : sa vie, sa maladie et sa œuvre*, Paris, L'Harmattan, 2007. (1ère édition, Paris, Presses du Temps présent, 1963.)

Minkowska, Françoise,［R］: *Le Rorschach : à la recherche du monde des formes*, Paris, L'Harmattan, 2003. (1ère édition, Paris, Desclée de Brouwer, 1956.)

二次文献

・ミンコフスキー研究

Metzel, Nancy, *Lived space : A critical introduction to Eugène Minkowski's Lived time*, Thesis (Ph. D.), Northwestern University, 1973.

Tatossian, Arthur, « Eugène Minkowski ou l'occasion manquée », *Psychiatrie et existence,* Fédida, P. et Schotte, J., Grenoble, Jérôme Millon, 1991, p. 11-23.

Allen, D., et Postel, J., « Eugène Minkowski ou Une vision de la schizophrénie (suivi de sept lettres de H. Bergson à E. Minkowski) », *L'Évolution Psychiatrique*, vol. 60, no. 4, 1995, p. 961-980.

Allen, David, « Le Rationalisme morbide, la plusion scopique et le verbe Etre », Eugène Minkowski, *Au-delà du rationalisme morbide*, Paris, Harmattan, 2000, p. 235-256.

Allen D., et Kampougeri S., « En hommage à Eugène Minkowski (1885-1972) : pour le 90e anniversaire de la découverte du rationalisme et du géométrisme morbide », *Essaim*, 2014/2, n° 33, p. 119-131.

Gabel, J., « L'Œuvre d'Eugène Minkowski et la philosophie de la culture », *L'Évolution Psychiatrique*, vol. 56, no. 2, 1991, p. 429-434.

Garrabé, Jean, « Évocation de ce temps où naissait l'Évolution psychiatrique. À propos de « Eugène Minkowski 1885–1972 et Françoise Minkowska 1882–1950 » de Jeannine Pilliard-Minkowski », *L'Évolution psychiatrique*, vol. 75, no. 3, 2010, p. 509-513.

Goyet, Linda, « Lacan, lecteur de Minkowski : l'approche structurale », *L'Évolution psychiatrique*, vol. 69, no. 2, 2004, p. 203-215.

Mahie, Eduardo T., « Une lecture de Minkowski », Cercle d'étude de psychiatriques Henri Ey de Paris, en avril 2000.

Pachoud, Bernard, "Reading Minkowski with Husserl", *Philosophy, Psychiatry & Psychology*, vol. 8, no. 4, 2001, p. 299-301.

Szałek, Piotr, « Phenomenological and Psychodynamic Understanding of Schizophrenia (Silvano Arieti, Eugène Minkowski) », *Polish Psychological Bulletin*, vol. 46, no.1, 2015, p. 112-121.

清水誠「純粋持続と記憶—E.ミンコフスキーの「生きられる時間」を手懸りとして」、『武蔵大学人文学会雑誌』vol. 2、no. 2、1970 年、65-78 頁。

滝浦静雄「生きられる時間」、『理想』第 525 号、1977 年、45-66 頁。

・哲学関係

Barbaras, Renaud, *Le désir et la distance : Introduction à une phénoménoloigie de la perception*, Paris, Vrin, 1999.

Barbaras, Renaud, *Vie et intentionnalité : Recherches phénoménologiques*, Paris, Vrin, 2003.

Barbaras, Renaud, *Introduction à une phenomenologie de la vie*, Paris, Vrin, 2008.

Barbaras, Renaud, *La vie lacunaire,* Paris, Vrin, 2011.

Barbaras, Renaud, *Après Merleau-Ponty : Études sur la fécondité d'une pensée*, Paris, Vrin, 2011.

Bataille, G., Dandieu, A., Leiris, M., « Dictionnaire », *Documents*, deuxième année, 1930, n° 1, p. 41-44.

Berger, Gaston, *Le cogito dans la philosophie de Husserl*, Paris, Aubier, 1941.

Bergson, Henri, ［DI］: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Paris, PUF, 1970. (1ère édition, Paris, Félix Alcan, 1889.)

Bergson, Henri, ［MM］: *Matière et mémoire : essai sur la relation du corps à l'esprit*, Paris, PUF, 1965. (1ère édition, édition, 1939.)

Bergson, Henri, ［EC］: *L'évolution créatrice,* Paris, PUF, 1959. (1ère édition, 1907.)

Bergson, Henri, ［MR］: *Les deux sources de la morale et de la religion,* Paris, PUF, 1948. (1ère édition, 1932.)

Bimbenet, Étienne, *Nature et humanité : le problème anthropologique dans l'œuvre de Merleau-Ponty*, Paris, Vrin, 2004.

Blondel, Maurice, introduction et traduction par Claude Troisfontaines, *Le lien substantiel et la substance composée d'après Leibniz : texte latin* (1893), Louvain, Nauwelaerts, 1972.

Blondel, Maurice, *L'Action, Tome. II, L'action humaine et les conditions de son aboutissement,* Paris, Félix Alcan, 1937.

Bouckaert, Bertrand, *L'idée de l'autre : la question de l'idéalité et de l'altérité chez Husserl des Logische Untersuchungen aux Ideen I*, Dordrecht, Kluwer Academic Publishers, 2003.

Cairns, Dorion, "The Fundamental Philosophical Significance of Husserl's Logische Untersuchungen", *Husserl Studies*, vol. 18, no.1, 2002, p. 41-49.

Canguilhem, Georges, *Le normal et le pathologique*, Paris, PUF, 2011. (1ère édition, 1966.)

Cavalieri, Rosalia, « Langage et tons mentaux. La théorie bergsonienne de la conscience », in *Henri Bergson : esprit et langage*, Sprimont, Mardaga, 2001, p. 107-114.

Corsini, Francesco, « Bergson psychopathologue », *Annales Bergsonnes III : Bergson et la science,* édité et présenté par Frédéric Wormes, Paris, PUF, 2007, p. 393-406.

Dandieu, Arnaud, *Marcel Proust : sa révélation psychologique*, Paris, Firmin-Didot et Cie, 1930.

Dandieu, Arnaud, « Le conflit du réel et du rationnel dans la psychologie du temps et de l'espace », *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, Juillet à Décembre 1930, p. 448-461.

Devaux, André A., « Nessance et essor de la collection « Philosophie de l'Esprit » (1934-1984) », *Revue de l'Institut catholique de Paris*, n°18, Avril 1986, p. 5-23.

Dorland, Michael, *Cadaverland : Inventing a Pathology of Catastrophe for Holocaust Survival. The Limits of Medical Knowledge and Historical Memory in France,* Lebanon, University Press of New England for Brandeis University Press, 2009.

Fruteau De Laclos, Frédéric, « Entre Bergson et Meyerson : le devenir schizophrénique de Bereksohn », in *Annales Bergsonnes III : Bergson et la science,* édité et présenté par Frédéric Wormes, Paris, PUF, 2007, p. 417-426.

Fruteau De Laclos, Frédéric, « Métamorphoses de l'identité entre culture et personnalité », in *Archives de Philosophie*, t. 70, 2007, Université Paris I Panthéon-Sorbonne, p. 403-419.

Fruteau De Laclos, Frédéric, *L'épistémologie d'Emile Meyerson : une anthropologie de la connaissance*, Paris, Vrin, 2009.

Foucault, Michel, *Naisssance de la clinique,* Paris, PUF, 1963.

Gusdorf, Georges, *Introduction aux sciences humaines*, Paris, Edition Ophrys, 1974.

Husserl, Edmund, ［Hua. I］: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge,* Hrsg. von S. Strasser*,* 2 Aufl, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1973.

Husserl, Edmund,［Hua. III-I］: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie 1.* Buch 1*,* Den Haag, Martinus Nijhoff, 1976.

Husserl, Edmund,［Hua. III-II］: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie 1.* Buch 2*,* Den Haag, Martinus Nijhoff, 1976.

Husserl, Edmund, ［Hua. XVIII］: *Logische Untersuchungen : Erster Band*, *Prolegomena zur reinen Logik*, in zwei Bänden, Halle, 1900, überarbeitete Aufl, 1913, Hrsg. von Elmar Holenstein, Den Haag, Netherlands, Martinus Nijhoff, 1975.

Husserl, Edmund, ［Hua. XIX］: *Logische Untersuchungen : Zweiter Band*, *Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis,* in zwei Bänden, Halle, 1901, überarbeitete Aufl, 1922, Hrsg. von Ursula Panzer, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1984.

Husserl, troisième colloque philosophique de Royaumont, 23-30 avril 1957, organisé par le Cercle culturel de Royaumont, Paris, Les éditions de Minuit, 1959. (Coll. Cahiers de Royaumont, Philosophie, n° 3.)

Le Blanc, Guillaume, *L'esprit des sciences humaines*, Paris, Vrin, 2005.

Lévy-Bruhl, Lucien, *Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures*, Paris, F. Alcan, 1910. (9 e éd., Paris, PUF, 1951.)

Lévy-Bruhl, Lucien, *La mythologie primitive*, Paris, PUF, 1935.

Lavelle, Louis, *De l'acte*, Paris, Aubier, 1937.

Lavelle, Louis et Le Senne, René, « Avant-propos », in *Revue internationale de Philosophie,* n° 5, 15 octobre 1939, p. 3-6.

Largeault, Jean, « Émile Meyerson, Philosophie oublié »*, in Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, T. 182, no. 3, 1992, p. 273-295.

Loubet des Bayle, Jean-Louis, *Les non-conformistes des anées 30 : une tentative de renouvellement de la pensée politique française,* Paris, Seuil, 1969. (Conclusion de l'édition de 2001.)

Malraux, André, *Les voix du silence*, Paris, Gallimard, 1951.

Meier-Graefe, Julius, *Vincent Van Gogh : A biographical study*, translated by John Holroyd-Reece Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1970. (Reprint of the 1933 ed, published by New York: Harcourt, Brace and Company.)

Meyerson, Emile, *Identité et réalité*, Paris, F. Alcan, 1908.

Merleau-Ponty, Maurice,［PP］: *Phénoménologie de la perception,* Paris, Gallimard, 1945.

Merleau-Ponty, Maurice,［EP］: *Éloge de la philosophie et autres essais*, Paris, Gallimard, 1953.

Merleau-Ponty, Maurice,［Si］: *Signes*, Paris, Gallimard, 1960.

Merleau-Ponty, Maurice,［VI］: *Le Visible et l'invisible, suivi de notes de travail,* éd. par Claude Lefort, Paris, Gallimard, 1964.

Merleau-Ponty, Maurice,［RC］: *Résumés de cours (Collège de France 1952-1960)*, Paris, Gallimard, 1968.

Merleau-Ponty, Maurice, *Les sciences de l'homme et la phénoménologie,* Paris, Centre de documentation universitaire, 1975.

Merleau-Ponty, Maurice, *Parcours : 1935-1951,* édition établie par Jacques Prunair, Lagrasse, Verdier, 1997.

Minkowski, Jan Michael, *Through three wars : The memories of Jan Michael Minkowski*, edited by Ann Shreve, Louisville, Gateway Press, 1991.

Nattiez, Jean-Jacques, *Proust Musicien*, Paris, Christian Bourgois, 1984.

Pascal, Blaise*, Pensées,* éd. collationnée sur le manuscrit autographe et publiée avec une introduction et des notes par Léon Brunschvicg, Paris, Hachette, 1904.（パスカル『パンセ I』前田陽一、由木康訳、東京、中公公論新社、2001 年。）

Penesco, Anne, *Proust et le violon interieur*, Paris, Les Editions du Cerf, 2011.

Pennisi, Antonino, « Langage, action, réalité chez Henri Bergson », in *Henri Bergson : esprit et langage*, Sprimont, Mardaga, 2001, p. 147-158.

Pilliard-Minkowski, Jeannine, *Eugène Minkowski 1885-1972 et Françoise Minkowska 1882-1950 : éclats de mémoire*, Paris, L'Harmattan, 2009.

Proust, Marcel*, À la recherche du temps perdu II,* Paris, Gallimard, 1954.

Romano, Claude, « Bergson métaphysicien et critique de la métaphysique », *Philosophie,* n° 70,

juin 2001, p. 72-92.

Roy, Christian, « Arnaud Dandieu and the Epistemology of Documents », *Papers of Surrealism*, Issue 7, 2007, p. 1-23.

Rimbaud, Arthur, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, 2009.

Sartre, Jean-Poul, *Situation II*, Paris, Gallimard, 1976.

Scheler, Max, *Zur Phänomenologie und Theorie der Sympathiegefühle und von Liebe und Haß*, 1913, Halle, Niemeyer, 1913.

Scheler, Max, *Wesen und Formen der Sympathie*, Bonn, F. Cohen, 1923.（シェーラー『同情の本質と諸形式』青木茂、小林茂訳、飯島宗享、小倉志祥、吉沢伝三郎編、シェーラー著作集第 8 巻、東京、白水社、2002 年。）

Scheler, Max, *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, Darmstadt, Reichl, 1928.（シェーラー『宇宙における人間の地位』亀井裕、山本達、 安西和博訳、飯島宗享、小倉志祥、吉沢伝三郎編、シェーラー著作集第 13 巻、東京、白水社、2002 年。）

Spiegelberg, Herbert, *Phenomenology in Psychology and Psychiatry : A Historical Introduction*, Evanston, Northwestern University Press, 1972.

Vacek, Edward V., “Scheler's Phenomenology of Love”, *The Journal of Religion*, vol. 62, no. 2, Apr., 1982, p. 156-177.

Varet, Gilbert, *Manuel de bibliographie philosophique*, t. 1,Paris, PUF, Coll. Logos, 1956.

Vieillard-Baron, Jean-Louis , « La situation de *De l’Acte* dans l’œuvre de Lavelle », *Revue des science philosophiques et théologiques*, t. 88, n°2, Avr-Juin, 2004, p. 245-259.

Waldenfels, Bernhard, *Phänomenologie in Frankreich*, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1983.（ベルンハルト・ヴァルデンフェルス『フランスの現象学』佐藤真理人監訳、東京、法政大学出版局、2009 年。）

Phenomenological Approaches to Moral Philosophy : A Handbook, Drummond, J.J., Embree, Lester, Dordrecht/Boston/London, Kluwer Academic Publishers, 2002.

北夏子「『道徳と宗教の二源泉』における健康概念について」、『哲学・思想論叢』第 31 号、2013 年、1-14 頁。

杉山直樹「J. S.ミルとフランス・スピリチュアリスム」、『学習院大学研究年報』no. 50、2004 年、1-22 頁。

杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』東京、創文社、2006 年。

仲島陽一「シェーラーの共感論について」、『国際地域学研究』第 8 号、2005 年、93-102 頁。

廣瀬浩司「身体の幻影(ファントム)と道具の生成—メルロ＝ポンティの幻影論の射程—」、『言語文化論集』第 56 号、2001 年、31-49 頁。

本郷均「作品／問題の場」、『メルロ＝ポンティ研究』第 13 号、2009 年、85-100 頁。

吉川孝「共感の道徳的価値をめぐって—M. シェーラーにおける共感の倫理学の可能性—」、『行為論研究』第 3 号、2014 年、37-50 頁。

・精神医学関係

Allendy, R., Codet. H., Henri, E., Loewenstein, R., Minkowska, F., Minkowski, E., Robin, G., *Les constitutions psychiques*, Paris, L'Harmattan, 2002.

Arieti, Silvano, *Interpretation of schizophrenia,* 2d edition, New York, Basic Books, 1974.

Baruk, Henri, *La psychiatrie française de Pinel à nous jours*, Paris, PUF, 1967. （バリュック『フランス精神医学の流れ—ピネルから現代へ』影山任佐訳、東京、東京大学出版局、1982 年。）

Berrios, G. E., Luque, R. and Villagràn, J. M., « Schizophrenia : A Conceptual History », *International Journal of Psychology and Psychological Therapy,* vol. 3, no. 2, 2003, p. 111-140.

Biétry-Rivierre, Éric, « Révélations sur l'oreille coupée de Van Gogh », *Le Figaro*, mis à jour le 04/05/2009 à 10:46.

Binwanger, Ludwig, « Welche Aufgaben ergeben sich für die Psychiatrie aus den Fortschritten der

neueren Psychologie? » *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, December 1924, Volume 91, Issue 1, p. 402-436.

Binswanger, Ludwig, *Drei Formen missgluckten Daseins : Verstiegenheit Verschrobenheit Manieriertheit*, Tübingen, Niemeyer, 1956.（ビンスワンガー『思い上がり・ひねくれ・わざとらしさ—失敗した現存在の三形態』宮本忠雄監訳、関忠盛訳、永野満、影山治雄翻訳協力、東京、みすず書房、1995 年。）

Bleuler, Eugen, *Dementia præcox oder Gruppe der Schizophrenien*, München, Minerva, 1978. (Reprint of the 1911 ed., published by F. Deuticke, Leipzig and Wien.)（ブロイラー『早発性痴呆または精神分裂病群』飯田真、下坂幸三、保坂秀夫、安永浩訳、東京、医学書院、1974 年。）

Bleurer, Eugen, « Die Probleme der Schizoïdie und der Syntonie », *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, Bd. 78, 1922, p. 373-399.

Bovet, P., Parnas, J., “Schizophrenic Delusions : A Phenomenological Approach”, *Schizophrenia Bulletin*, vol. 19, no.3, 1993, p. 579-597.

Bovet, P., « Pour une réhabilitation de la notion de schïzoıdie », *Psychiatrie, Sciences humaines, Neurosciences*, vol. 5, Issue 1, June 2007, p. 58-61.

Charbonneau, Georges, « Introduction à la phénoménologie des hallucinations », *Introduction à la phénoménologie des hallucinations*, Paris, Le Cercle Herméneutique, 2001.

Ellenberger, Henri, *Œuvres I,* Paris, Fayard, 1995.

Ey, Henri, *L'Inconscient : VIe colloque de Bonneval*, avec la collaboration de Blanc, Diatkine, Follin, Green, Lairy, Lanteri- Laura, Laplanche, Lébovici, Leclaire, Lefebvre, Perrier, Ricoeur, Stein, Waellens et Guiraud, Hyppolite, Lacan, Merleau- Ponty, E. Minkowski, Paris, Bibliothèque des Introuvables, 2004.

Farnel, F., “Bergson’s conceptions as applied to psychopathology”, *The Journal of Nervous and Mental Diseases*, vol. 63, no. 6, 1926, p. 553-568.

Fusar-Poli, P., Politi, P., “Images in Psychiatry : Paul Eugen Bleuler and the Birth of Schizophrenia (1908) ” *The American Journal of Psychiatry,* 165, 11, Nov 2008, p. 1407.

Lacan, Jacques, Intervention sur l’exposé de E. Minkowski « La psychopathologie, son orientation, ses tendances », Conférence au Groupe de L’Évolution Psychiatrique en juillet 1936, *L’Évolution Psychiatrique,* t. 3, 1937, p. 66.

Lacan, Jacques, « Compte rendu du Temps vécu », in *Recherches philosophiques 1935-1936*, t. 5, p. 424-431.

Laurens, S. et Kozakaï, T., « Pierre Janet et la mémoire sociale », in *Connexions,* no. 8, 2003/2, p. 59-75.

Morel, Bénédict Auguste, *Traité des maladie mentales*, Paris, Victor Masson, 1860.

Janet, Pierre, *Les Obsessions et la psychasthénie*, Paris, Félix Alcan, 1903.

Janet, Pierre, *L’évolution de la mémoire et de la notion du temps : Leçons au College de France 1927-1928*, Paris, L’Harmattan, 2006.

Jaspers, Karl, *Allgemeine Psychopathologie,* Berlin, Springer, 1913.（ヤスパース『精神病理学原論』西丸四方訳、東京、みすず書房、1971 年。）

Jaspers, Karl, *Strindberg und van Gogh : Versuch einer pathographischen Analyse unter vergleichender Heranziehung von Swedenborg und Hölderlin*, Bern, Ernst Bircher, 1922.（ヤスパース『ストリンドベルクとファン・ゴッホ』村上仁訳、東京、みすず書房、1959 年。）

Kraepelin, Emil, *Dementia præcox and paraphrenia*, translated by R. Mary Barclay, edited by George M. Robertson, Edinburgh, Livingstone, 1919.

Kraepelin, Emil, *Psychiatrie : Ein kurzes Lehrbuch für Studierende und Ärzte,* 8. Aufl., Bd. 3, T. 2, Leipzig, J. A. Barth, 1923.（クレペリン『精神分裂病』、西丸四方、西丸甫夫訳、東京、みすず書房、1986 年。）

Kretschmer, *Körperbau und Charakter*, 2e édition, Berlin, Springer, 1922. （クレッチメル

『体格と性格—体質の問題および気質の学説によせる研究』相場均訳、東京、文光堂、1960 年。）

Parnas, J. & Bovet, P., “Autism in Schizophrenia Revisited”, *Comprehentive psychiatry*, 32 (1), 1991, p. 7-21.

Rorschach, Hermann, « Über „Reflexhalluzinationen“ und verwandte Erscheinungen », *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, 13, 1912, p. 357-400.（ロールシャッハ「反射幻覚とその類似現象について」、『ロールシャッハ精神医学研究』、K. W. バァッシュ編、空井健三、鈴木睦夫訳、東京、みすず書房、1986 年。）

Rorschach, Hermann, *Psychodiagnostik : Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungsdiagnostischen Experiments (Deutenlassen von Zufallsformen)*, Bern, Hans Huber, 1932. (1ère édition, 1921.)（ロールシャッハ『新・完訳精神診断学』鈴木睦夫訳、東京、金子書房、1998 年。）

Roux, Marie-Aude, « Marc Minkowski, une histoire polonaise », *Le Monde*, le 23 decembre 2008 à 18h14, mis à jour le 23 decembre 09h50.

Stanghellini, Giovanni, “A dialectical conception of autism”, *Philosophy, Psychiatry & Psychology*, vol. 8, no. 4, 2001, p. 295-298.

Tatossian, Arthur, *Phénoménologie des psychoses,* Paris, Masson, 1979.（タトシアン『精神病の現象学』小川豊昭、山中哲夫訳、東京、みすず書房、1998 年。）

Valdinoci, Serge, *Le principe d'existence : un devenir psychiatrique de la phenomenology,* Dordrecht, Kluwer Academic Publishers, 1989.

Volkelt, Johannes, *Phänomenologie und Metaphysik des Zeit,* Raleigh, Lulu, 2013.

Wood, James M. & Nezworski, M. Teresa & Lilienfeld, Scott O.& Garb, Howard N., *What's Wrong with the Rorschach : Science Confronts the Controversial Inkblot Test*, San Francisco, Jossey-Bass, 2003.

Ziehen, Theodor, *Introduction tophysiological psychology*, translated by C. C. Van Liew and Otto

Beyer, London, Sonnenschein, 1892.

Phénoménologie de l'identité humaine et schizophrénie : la philospphie du Soi et ses implications thérapeutiques, sous la direction de Dominique Pringuey et Frantz Samy Kohl, Puteaux, Le cercle herméneutique, 2001.

Phénoménologie des sentiments corporels : I . Douleur, souffrance, dépression, sous la direction de Bernard Granger et Geroges Charbonneau, Argenteuil, Le Cercle Herméneutique, 2003.

Phénoménologie des sentiments corporels : II. Fatigue, lassitude, ennui, sous la direction de Bernard Granger et Geroges Charbonneau, Argenteuil, Le Cercle Herméneutique, 2003.

One Century of Karl Jaspers'General Psychopathology, edited by Stanghellini, G., and Fuchs, T., Oxford, Oxford University Press, 2013.

Disability and culture, edited by Benedicte Ingstad, Susan Reynolds Whyte*,* Berkeley, University of California Press, 1995.（『障害と文化—非欧米世界からの障害観の問いなおし』ベネディクト・イングスタッド、スーザン・レイノルズ・ホワイト編著、中村満紀男、山口惠里子監訳、東京、明石書店、2006 年。）

内海健『「分裂病」の消滅—精神病理学を超えて』東京、青土社、2003 年。

内海健『双極 II 型障害という病－改訂版うつ病新時代－』東京、勉誠出版、2013 年。

小川豊昭「自閉」、木村敏、松下正明、岸本英爾編『精神分裂病—基礎と臨床』所収、東京、朝倉書店、1990 年、394-400 頁。

加藤敏『統合失調症の語りの傾聴—EBM から NBM へ』東京、金剛出版、2005 年。

河村次郎『時間・空間・身体—ハイデガーから現存在分析へ』京都、醍醐書房、1999 年。

木村敏「分裂病の診断をめぐって」、『自己・あいだ・時間—現象学的精神病理学』所収、東京、筑摩書房、2006 年、325-388 頁。

木村敏「精神病の症状論」、横井晋、佐藤壱三、宮本忠雄編『精神分裂病』所収、東京、医学書院、1975 年、106-138 頁。

小木貞孝『フランスの妄想研究』東京、金剛出版、1985 年。

霜山徳爾『現存在分析と現象学—霜山徳爾著作集３』東京、学樹書院、2001 年。

中井久夫『アリアドネからの糸』東京、みすず書房、1997 年。

中井久夫『西洋精神医学背景史』東京、みすず書房、1999 年。

中井久夫『兆候・記憶・外傷』東京、みすず書房、2004 年。

中野明徳「ロールシャッハ法の解釈の歴史—法則定立的か個性記述的か—」、『福島大学総合教育研究センター紀要』13 号、2012 年、29-38 頁。

西丸四方「精神分裂病の歴史と分類—カントから現在まで」横井晋、佐藤壱三、宮本忠雄編、『精神分裂病』所収、東京、医学書院、1975 年、1-22 頁。

野間俊一「生の隔たり」、中村雄二郎、木村敏監修『講座 生命 vol.4, 2000』所収、名古屋、河合文化教育研究所（発行）、東京、河合出版（発売）、2000 年、202-228 頁。

野間俊一『身体の哲学—精神医学からのアプローチ』東京、講談社、2006 年。

宮本忠雄「実体的意識性について—精神分裂病における他者の現象学—」、『精神神経学雑誌』第 61 巻、第 10 号、1959 年、1316-1339 頁。

安永浩『分裂病の症状論』東京、金剛出版、1987 年。

渡辺哲夫『20 世紀精神病理学史—病者の光学で見る 20 世紀思想史の一局面』東京、筑摩書房、2005 年。

『標準ロールシャッハ図版』東京、東京ロールシャッハ研究会、1958 年。

『異常心理学講座 1 —学派と方法』土居健郎、笠原嘉、宮本忠雄、木村敏編、東京、みすず書房、1988 年。

『分裂病論の現在』花村誠一、加藤敏編、東京、弘文堂、1996 年。

『他者の現象学 III—哲学と精神医学の臨界』河本英夫、谷徹、松尾正編、東京、北斗出版、2004 年。

Gogh, Vincent van et Bernard, Émile, *Lettres de Vincent van Gogh à Émile Bernard*, Paris, Ambroise Vollard, 1911. （エミル・ベルナール編、硲伊之助訳『ゴッホの手紙　上』東京、岩波書店、1978 年。）

Gogh, Vincent van, Gogh-Bonger, Johanna van, *Verzamelde brieven van Vincent van Gogh*, Amsterdam, Wereld Bibliotheek, 1953. （J. V. ゴッホ-ボンゲル編、硲伊之助訳、『ゴッホの手紙　中』東京、岩波書店、1961 年、J. V. ゴッホ-ボンゲル編、硲伊之助訳、『ゴッホの手紙　下』東京、岩波書店、1970 年。）

謝辞

博士論文を執筆するにあたり、多くの方々からご助言やご配慮をたまわりました。

まず、指導教官であった廣瀬浩司先生に心から感謝申し上げます。廣瀬先生は大学の卒業論文以来私の指導を引き受けて下さり、方向を見失ったときには、いつも軌道修正して下さり、ときに厳しく、また大変あたたかくご指導し続けて下さいました。言葉によって感謝を言い表すことはできません。

副指導教官であった濱田真先生、対馬美千子先生、本郷均先生にも深く御礼を申し上げます。濱田先生から頂くご指摘は、いつも深く広大な知の世界を感じさせてくださるものでした。先生のご指摘は、論点を問い直し、さらに深めることを助けてくださいました。また、対馬先生のご指摘は、いつもやさしく、かつ、芯の通った力強いものでした。甘くなりがちな研究を、しっかりと引き締めてくださいました。本郷先生は、混乱の多い論旨を正し、筋道を立てて思考することに繰り返し導いて下さいました。本郷先生の鋭く精緻なご指摘によって、いつも新たな問いに出会うことができました。

川那部保明先生には、学類時代からご指導をいただきました。先生は、大きな木のように、研究の拠り所となり続けてくださいました。また、山口惠里子先生には、同じく学類時代から大変お世話になりました。山口先生のご指導を通して出会わせていただいた著作や作品、また研究のアプローチ方法は、どれも私の人生を変容させてしまうような重大なものでした。

ルノー・バルバラス先生には、パリ第一大学で、博士課程の受け入れ教官としてご指導いただきました。先生のあたたかなご支援によって、留学中に研究の視点を深め、多くの資料を収集することができました。

筑波大学人文社会科学研究科、現代語・現代文化専攻、現代文化分野の先生方からは、折に触れてご助言をたまわりました。同分野の大学院生のみなさまからは、研究発表会や授業での発表に際して、示唆に富んだご指摘をいただきました。

学会発表の際にいただいた先生方からのご意見は、研究の大きな糧となりました。また、ベルクソン哲学研究会では、しなやかで力強いベルクソン哲学に触れさせていただきました。未熟な私の質問に真摯に応答して下さり、励まして下さった研究会のみなさまに御礼を申し上げます。

これまでわたしと対話して下さった全ての方々に感謝を申し上げます。とりわけ、研究を支え続けてくれた家族に、こころから感謝しています。ありがとうございました。

2015 年 12 月 1 日

佐藤　愛